
TTB ——The Tower of Babel——

白雨 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

T T B — The Tower of Babel —

【Nコード】

N 1 8 2 5 Y

【作者名】

白雨 蒼

【あらすじ】

天高くそびえ立つ機械の巨大な塔。

T T B。正式名称——The Tower of Babelと呼ばれる、機械仕掛けの巨大な塔が世界に生み出されて約百年。

約百年前の皆既日食の日、空から突如降り注いだ無数の閃光。

轟音を引き連れ、破壊を伴って降り注いだその光の雨により、世界の均衡は瓦解した。

その大事変は後に、星の泣く夜と呼ばれ、それ以降人類は今まで生きていた大地を捨てて、自らの手で生み出した機械の地面の上で

生きることを迫られることとなる。

プロローグ

そうして彼らは言った。

「さあ

我々のための都市を

そして塔を建て

その頂を

天にとどかせよう」

創世期一章三節

天高くそびえ立つ機械の巨大な塔。

T T B。正式名称——The Tower of Babelと呼ばれる、機械仕掛けの巨大な塔が世界に生み出されて約百年。

約百年前の皆既日食の日、空から突如降り注いだ無数の閃光。轟音を引き連れ、破壊を伴って降り注いだその光の雨により、世界の均衡は瓦解した。

それは衛星兵器の暴走に次ぐ暴走により、世界の大国が無差別に攻撃を受け、国それぞれの機能が停止した後は、実に早かった。

小国が大国を攻め入り、あるいはそれを未然に防ぐために大国が小国を潰しにかかり、それにより世界中で情報が混乱し、国々の治安は一瞬にして乱れ、平穏などというものはいとも容易く崩壊した。繰り広げられた資源戦争の果て、大地は枯れ果て、権力者たちが世界の状況に気づいた時には、何もかもが手遅れの状態にまで陥っていた。

ステラ・ティアラ
その大事変は後に、星の泣く夜と呼ばれた。

そして星の泣く夜の後、多くの人は住むべき場所を大地から機械の足場へと変えることとなった。

塔歴百十八年。

——現在に至ってなお、人はこの巨大な機械仕掛けの塔の庇護の下、惰性にも似た生を送っている。

プロローグ

カラン……っという、店の入り口に備え付けているベルの音が鳴り、ニアは頭に載せていた雑誌を手にとって、酷く不快気な表情で来店者に視線を向けた。

その視線は鋭く、正直接客の仕事をしている人間がする目つきではない。この喫茶店は基本的に一見さんお断りという雰囲気はあるが、その要因の一つは、間違いなくこの若き店主の接客態度にあると言っても過言ではなかった。

無論それを注意されたところで、この店主にそれを直すつもりは微塵もないのだが……。

無造作に伸ばされた——知人には鳥頭と揶揄される——金か茶か、判断に困る色の髪の間から覗く刃のように鋭い真紅の瞳に睨み据えられれば、そりゃあ彼の人となりを知らずに訪れた人間ならば裸足で逃げ出すだろう。

今回もそうなって、妨げられた午後の惰眠を再び貪れるだろう——そう思っていたのだが、今回の客はそうではなかった。

間違いなく知らぬ顔だ。

ニアの記憶違いでなければ、この来客は初めて訪れた客のはずだ。だというのに、その客はニアの視線に恐れることなく、平然とした様子で入口に立ったままだ。

この店の第一の関門をくぐり抜けたのは、一組の男女だった。

一人は長身の身なりのいい男。ニア自身も背の高いほうだが、その男はそれ以上に高い——おそらく一八〇センチはあるだろうと、ニアは目算した。

もう一人は、その対比のせいで一瞬小柄に見えたが、こちらも女性としてはそれなりに背の高いほうの、同じく身なりのいい青い短髪の女性だった。

そちらの方は男と違い、ニアの態度に苛立ちにも似た不満を抱いているようだが、連れの男が何も言わないのを見て、小さくため息を漏らすに留まる。

「……いらつしゃい。好きな席に座りな……」

仕方なく、ニアはお決まりの台詞をその来訪者に告げた。何処までも煩わしいという態度を払拭するつもりがないらしいこの店主の態度にも、男の方は薄い笑みを浮かべてカウンター席に座った。女の方もそれに倣って隣の席に座る。

「この店は何を専門にしているのかな？」

「……表の看板見てねえのか？ 紅茶だ、紅茶」

苛立ちを露とも隠す気がないらしいニアの態度は、とても客に向ける態度ではないのだが、この店『ハーディ』ではこれが当たり前。文句のある者は今すぐ回れ右して別のお店へどうぞ、がモットーのニアにとって、これで文句を言うてくれればいい。そう考えたのだが、女の方はともかく男の客はどうも勝手が違った。

「では、君のおすすめを二人分で」

「…… 茨姫の待人 二つ、な」

ニアはそう言つて、視線を二人から背後の棚に向けた。数段に分けられた大きな棚に並ぶ、茶葉の入った密封性の缶を取りな

がら、湯と茶器の準備にかかる。

「茶の入れ方は？」

「というと？」

「紅茶の入れ方だ。出来るのなら自由にやらせる。できねえならこつちで勝手にやらせてもらう。ウチはそういうやり方なんだよ。で、どっちだ？」

「私はできないな。ヘルマ、君は？」

ヘルマ——そう呼ばれた女性は、静かに頭を振った。

「私も、グレイアース様と同じく、ですね」

「と、いうことなら……君に任せるよ」

「にこりとそう言った男——恐らくグレイアースというのだろう」の言葉に、ニアは小さく舌打ちをして無言で頷いた。すると、ついに女のほうがキレた。

「貴方！ さつきから黙っていれば、なんえですかその態度は！？それが接客をする態度ですか！？」

立ち上がり、カウンターのテーブルを叩きながらヘルマという名の女性が吼える。が、ニアは無視して着々と紅茶の用意をする。隣に座る男は宥めるように彼女の肩を叩いた。

が、女性は止まらない。

「店主を呼びなさい！ 文句を言っています！」

「なら言えよ」

カップに湯を入れて暖め、茶葉を蒸す準備にかかりながらニアは言うつと、女性はきつとニアを睨みながら叫ぶ。

「貴方ではない！ 店主です、この店の責任者を！」

「だから——俺だ。ほら文句を言えよ」

「なっ！？ あ……貴方が、ですか？」

「……この店は、俺一人で切り盛りしてんだよ。つーか、おれの接客態度に文句言う前に、テメエ自身が態度改めやがれ。放り出すぞ」砂時計が堕ちるのを確認し、ニアはカップの湯を捨てて、代わりに紅茶をカップに注ぎ、それを受け皿に乗せて二人の前に静かに

差し出し——別の皿に乗せた、苺の乗ったショートケーキをその横に置いた。

それを見た男は目を瞬かせ、女性の方は目を瞬かせた。

「このケーキは？ 頼んだ覚えはないが……」

「……こんな店にやって来た変人極まりない客に対してのサービス」
そう言つて、ニアは彼らが訪れた時と同じように椅子に腰を落とし、ムスツとした表情で溜息一つ吐き、雑誌をパラパラと捲る。

それ以上の会話を拒むような彼の態度に、二人はしばらくの間顔を合わせ——男は笑い、女は咳払いをして席につき直し、

「では、頂くでしょうか」

「はい」

二人はそう言つて紅茶を飲み、ケーキを口にする。

「……ほう！ これは」

「美味しい……ですね」

二人の口から零れた自然な称賛に、ニアは「ふん……」と鼻を鳴らした。その彼の態度に女性の方がまた険悪な表情を浮かべ、男の方がそれを宥めていた。

そんな中、再び入口のベルがカラン……と鳴る。

「やつほー。ニア君いるー？」

店内に木霊したのは、どうにも抑揚のないそんな声。薄い桜色の髪を持った、伏せがちな濃紫の瞳を持った小柄な——そう、一四〇センチくらいの少女。

そんな新たな来訪者に、ニアは表情を顰めながら雑誌を閉じた。

「見りや分かんذارーが。何の用だ、シエラ先輩よー」

そう声をかけると、少女はひょっこりと空いたカウンター席に座り、服から指先が見え隠れする手でテーブルをポスポスと叩きながら、

「んー？ 丁度近く通りかかったらお腹空いてねー。なんか食べさせてくれないかい」

「ざけんな。物乞いの真似事なら、外延部近くにある薄汚れた裏通

りにでも行け。逆にお持ち帰りされて行方不明になっても俺は知らねーけどな」

「そうならないために、お腹を空かせた先輩に何か食べ物を恵んでくれないかな？ できれば甘いもの希望」

「そーだよな。アンタみたいなお子様体型の人間なんて誰もお持ち帰りしたがないよな」

文句を言いながら適当に何か出そうと椅子から立ち上がるニアに、

「長身がそんな偉いかッ！ 巨乳がそんな偉いかッ！ 君もその口なのかッ！」

シエラは激怒し、椅子の上に立ち上がって抗議した。隣に座っていた二人がぎょっと目を剥くが、シエラもニアもそんなことは気にもしない。

二人に出したのと同じ、自家製のショートケーキを皿に取って彼女の席の前に置きながら、呆れた様にニアは肩を竦める。

「んなもんどーでもいいし。つーか、俺の好みなんてそれこそアンタにゃ関係ないだろうが」

ニアのそんな投げ遣りな言葉に、シエラは表情変化の乏しい顔にわずかに不満そうに口をへの字に結んで、椅子に座り直してフォークを手に取りながら、「ふん」と吐息をのらしながら言う。

「ああ関係ないとも。ただどね、これはボクの譲れない矜持なんだ。つと、パク……にしても、いいな君は。動物には好かれるし、料理はできるし、お菓子は美味しい」

そう言いながら彼女はぱくぱくとケーキを口に運ぶのを見て、ニアは今度こそ呆れて肩を落とした。

「アンタ僻みに来たのか、褒めに来たのか……どっちだよ？」

「どっちでもない。強いて言うなら、その辺の可愛い動物を紹介してもらおうと思ったんだ」

酷く真顔で言う少女に対し、ニアは鼻で笑いながら包丁を右手に、冷蔵庫から出した林檎を左手に取り、シャリシャリと剥き始め

る。

「諦める。アンタ生来に相性悪いから」

「そんなことはないぞー」

「棒読みで言うなよ。こっちが泣けてくる……今日はこれで我慢しろ」

そう言つてニアはほんのわずかの間に剥いて切り終わった、うさぎ型の林檎をケーキの乗った皿の脇に置いた。

「おお、ウサギだ」

「そうだな。それなら逃げられやしねーだろ。ほれ、テメエらも」
続けて成り行きを見守っていた二人の皿にも、同じ物に乗せる。

「おや、これは済まない」

「……どうも」

男の方は可笑しげに笑い、女の方は何処か釈然としない様子で礼を言つた。すると、

「うわ！？ ウサギが逃げた！？」

「何でだよ？ それ林檎だぞ」

見ればシエラの手から林檎が零れ落ち、再び皿の上に戻って行くところだつた。

「ボクはしょんぼりするよ。ウサリngoにすら逃げられて、気分はしょっぱーんだよ」

「フォークあるだろうが。刺して食え」

「それは可哀想じゃないかなー？」

「頭からシヤリシヤリ食うのは可哀想じゃねえのかよ？」

「それとこれとは話は別かなー」

と言いつつ、彼女はフォークで林檎をぐさりと一突きし、そのまま口に運んでシヤリシヤリと咀嚼する。

「舌の根が渴かねえ内に言動が不一致してんじゃねーよ」

「だって食べないともつたいたいじゃないか」

「分かつた。もうアンタ黙れ」

「なんだとー」

「……ふははは」

突如湧いた笑い声に、ニアは訝しげに、シエラはきょとんとした様子でその声の主を見た。

視線の先には、口元を抑えながらそれでも笑いを隠せていない男がいた。隣に座る女性も驚いた様子で男を見ていた。

「はは……済まない。どうにも、君たち二人を見ていると楽しくなってしまうて……込み上げてくるものを抑えられなかった」

「……けっ」

「別にいいよ。気にしないで」

ニアは毒づき、シエラの方はぽけーとした表情のまま頭を振る。

「ありがとう。此処はいつもこんな風なのかい？」

「……さーな。来る人によりけりだよ」

ニアはどうでもよさげにそう答えた。が、向かいに座るシエラが一言。

「大体こんな感じじゃないかな？ 此処、来る客なんて固定客だし。いつもニア君はお客と漫才しているよ」

「してねーよっ！ 勝手に決めつけんじゃねえ！」

流石に見逃すことができず、ニアは声を荒げて文句を言うが、シエラは気にも留めずに手でニアを示し、

「こんな感じの華麗な突っ込みが売り」

「ケーキの代金請求すんぞ」

ニアが反撃に出る。すると今度はシエラが服の袖で隠れた手で、テーパーをぼすぼすと叩く。

「横暴だぞー、後輩君」

「余計なこと言うからだろ、先輩殿」

「ふむ。やはり面白いな。此処は」

二人の掛け合いを見ていた男は、どこか納得した様子で頷くと、財布の中から紙幣を取り出してニアへと手渡す。

手渡された紙幣を見て、ニアは訝しむように男を見据えた。ひ

よっこりと覗きこんだシエラも、「おや？」という風に首を傾げて男のほうを見る。料金を提示するよりも先に手渡されたその金額は、誰が見ても料金よりも遥かに多かった。

去り行こうとする男の背に向けて、ニアは溜め息交じりに声をかける。

「……ウチはこんな高くねーぞ」

「では、次来た時用に取っておいてくれ。ご馳走様。また、来させてもらうとするよ。行こうか、ヘルマ」

「はい」

男に促され、女性の方も立ち上がって店の出入り口に向かっていく。その二人の背に向けて、ニアは凄むように、それでいて投げ遣りな様子で言う。

「……此処は休みの日しかやってねえから……後、名前くらい言うてけよ。でなきゃガメるぞ、これ」

ニアの言葉に、男はまたもくつくつと笑いを発したのち、納得したとでも言う風に頷いて見せた。そして――

「グレイアースⅡヴェルⅡブレードエッジ。それが私の名だ。また来させて貰うよ」

そう名乗り終わると同時――カランというベルの音と共に、二人は店の外へと立ち去って行った。それを呆氣にとられた様子で見送る二人。

やがて、ニアがぼそりと呟いた。

「……塩でも撒いとくかな」

それを耳にしたシエラが、僅かに口角を上げて心なし弾んだ声で言う。

「また凄い人が顧客になったね」

「そうだな……グレイアース……あれが彼の有名な【剣の賢者】様かよ」

カチャカチャと茶器の片付けに入りながら、ニアは溜め息をついた。

「面倒臭えことが起きないことを願うぜ」

「だねー。あ、ケーキも一つ。あとココア頂戴」

ケーキを食べ終わった皿を持ち上げて、お代りを要求するように皿をヒョコヒョコと上下させるシエラの姿に、ニアは先ほどとは別の意味で溜め息を洩らした。

「アンタは図々しすぎんだよ。ちたあ遠慮しろ。本気で金取るぞ」

「残念だったね。ボク此処に来る時はお財布、持ってこないんだ」

「……俺は一度、アンタと真剣に話し合う必要がある気がしてきたな」

「そんなのは後でいいから、お代り早くー」

言動の割に、伏せがちな目と変化の乏しいが故に無表情に見えるその顔で、年上の少女が要求するの見て、ニアは深い溜め息を漏らしながら、ココアを造るためのミルクと新しいケーキを取り出すために冷蔵庫を開けた。

ブログ（後書き）

大学の学祭用兼小説大賞投稿用と思ったのですが、ページ数が圧倒的にオーバーしたためにこちらにうつp決めましたwww

Act:1 平穩の崩れる日

機械の軸が動く音が、あちらこちらから鈍く響く。

そこはTTBの中枢塔——人々が幹と称するこの塔の主柱の中。この中は前世時代の技術の結晶ともいえる、現代の技術では作り上げることのできない不明瞭な機械部品の塊だった。

かつてこの塔を創成する際に用いられた、建設用技術者たちのために設けられた作業用の足場——現在では非常事態の際に用いる非常階段として残されている場所。その非常階段を、一人の男が身を隠すように息を切らせながら下りていた。

白衣に身を包んだ初老の男。やたら頭上を気にしながら、男は肩で息をしながら階段を下りて行く。

「……知らせなければ」

それは無意識のうちに男の口から零れた言葉。汗を拭いながら、男は白衣のポケットに入れてある物の存在を手さぐりに確かめ、それがあることを確認すると、改めて何かを決心するかのように強く頷いて歩き出す。

と同時に、はるか頭上から響いてきた金網の足場を揺らす複数の足跡に、その表情を強張らせながら男は走り出す。

（何としても、このことを誰かに知らせねば——）

彼の胸中に生じたのは、そんな使命感にも似た罪滅ぼし。

発砲音が響く。同時にすぐ傍で火花が散った。

「追え!」「逃がすな!」「場合によっては射殺もやむを得ん!」「許可は得ている!」

追手の声が機械仕掛けの回廊に響き渡り、男の耳にも届く。

自然と男の足は早まり、飛び降りるような勢いで階下を目指して疾走する。

逃走は続く。しかし元々学者であり、現在は科学者として何年も

働いていた男と、訓練を積んだ追手では身体能力に差があり過ぎる。先を走る男と、彼を追う一団の距離は徐々に詰まり始める。男たちが手にする機関銃の銃創を引くと、無数の銃弾が銃口から吐き出され、男の傍で火花を散らして兆弾する。

「ひっ！？」

小さな悲鳴が口から零れるが、それでも男は走ることを止めない。それどころか、男は迫りくる追手に向けて手を翳し、何かを念じるように眼を細める。

そして――

「ブレム……ウェイム……イムリフォス――ザ・ブレイズ 焼き払うもの！」

彼が叫ぶのと同時に、彼の周囲に赤光の粒子が躍り――刹那、彼が今駆け下りて来た階段が、炎に飲み込まれた。

それは追撃者を拒む壁のように轟々と燃え上がり、追つての進行を阻む。

「うわああ！」「炎――くそっ！コーダ 響律式か！？」「急いで消せ！
奴を逃してはならん！」

追手の声が猛火の向こうから聞こえるのを耳にしながら、男は振り向くこともせず、階段を駆け降りる。

「外に……ハア……外に出なければ……」

響律式による炎の障壁など、結局は一時凌ぎにすぎない。いずれは鎮火され、彼らは自分を追ってくる。こんな螺旋状になっているだけの一本道では、いずれ捕まるのは明明白白。この中枢塔から外に出なければ、捕まる時間が少し伸びる程度でしかない。

何よりも、男には外に出て自分の知る事実を彼女に――あの魔女に知らせねばならないという使命感があった。それに突き動かされ、男は乱れた呼吸も気にせず階段を駆け降りる。

はたして此処が何階層辺りなのかも分からない。だが、何処かに出口と成る扉があるはず――そう思った矢先、外部に通じる扉が目

に留まる。
「あそこから……っ！」

自然と足が速まる。あそこから出れば、少なくともしばらくの間彼らを振り切れるはず。この葉を隠すなら森と先人が言うように、人の中に紛れれば今より時間を稼ぐことはできる。

（何としても、あの魔女に知らせねば——）

外部に通じる扉に差し掛かり、男は扉の傍にある端末にアクセスコードを打ち込んで閉鍵^{ロック}を解除し、扉を開け放つ。

その時、肩に焼けるような痛みが走った。痛みで顔を顰め、狙撃されたのだと気付く。だが、止まるわけにはいかない。男は痛みを堪え、扉の外へ転がるように飛び込み、扉を閉じて即座に端末を操作——扉を閉鍵する。

そして振り返り、そこに広がる景色を見て安堵の息を漏らす。

この途方もなく巨大な中枢塔に寄り添うように建設された、大樹から生える大葉を思わせるほど巨大な人口の大地。

大地を捨て、機械仕掛けの足場に住むことを余儀なくされた人間の今住む居住区が、男の眼前には広がっていた。

そつと頭上を見上げれば、そこには15という、現在の改装を示す巨大な塗装があつた。

「——十五階層か……」

肩を抑えながら、男は立ち上がりそう呟いた。

そこは人々がいつの頃からかこの巨大な塔をユグドラシルと呼ばれるようになった、TTBの第十五階層だった。

平穩に包まれた、最早資料でしか知りえない、かつての大地を彷彿させる人口の緑と建造物に覆われた一つの都市。

男は暫しその景色を眺め——頭を振って歩き出す。

まだ追手を完全に振り切ったわけではない。今は逃げ、隠れ、落ち着いたのちに、人を探さねばならない。

そのためにはまず、逃げるのが先決だった。

関係者以外立ち入り禁止と書かれた金網の扉をくぐり、男はこの第十五階層という名の都市の中へと走って行き、群衆の中に紛れていた。

「……ちっ」

舌打ちが通路に木霊した。全面が金属板で固められた、人がギリギリすれちがえる程度の広さしかないその空間に満ちる呻き声と、鉄錆と硝煙の臭い。黒衣の少年はその表情を不快気に歪め、壁にもたれかかって悶絶している男の顔を蹴り飛ばした。

「びぎや!？」

「喚くな。耳触りだ」

手にする長剣の柄頭でその側頭部を殴打して意識を奪う。鈍重な音を背に、少年は通路を我が物顔で突き進んでゆく。

背後には、少年の手によって強制的に地へと伏した、厳つい体躯の男たちが山のように転がっている。

誰も彼も例外なく少年の手により手傷を負わされている。どの傷も致命傷とまではいかないが、客観的に見てもしばらく動くことはできないくらいには重傷だというのが見て取れる。

中には両腕の骨を砕かれた者。腕の一本を切り落とされている者までいる。阿鼻叫喚の地獄絵図だ。

そんな情景を背にし、少年はその金か茶か判断のつきかない色の髪を掻き上げながら一人こちる。

「たく……こんなそうデカくもない空輸航船に^{ナフティス}どんだけ人数詰め込んでやがる? 頭がち割るぞ」

この移送艦に侵入してからモノの十分足らずで少年が相手にした数は、すでに三十人を超えていた。その三十人がそれなりに腕利きならばもう少し楽しめたのだが、湧いて出てくる連中はどれもゴロツキと呼ぶに相応しい——少年から見れば、彼らの実力は子供の喧嘩程度の技量でしかなかった。

「この程度で俺に挑んで来んな。弱い者いじめなんざ、やってて楽しくねーんだよ」

そう吐き捨てると同時に、少年が床を蹴って前方へと飛ぶように駆け出す。同時に、通路の奥のドアがスライドし、ドアの向こう側から五人の武装した男たちが姿を現す。

先ほどまで少年が相手をしていたゴロツキ連中とは打って変わった銃器や剣を装備した面々——おそらくは彼らが雇われの傭兵部隊かなにかだろうと直感し、少年の口元が僅かに笑みを浮かべる。

ただの微笑。だが、見た者からすれば飛んでもなく不気味で恐ろしい餓えた獣を彷彿される笑みを浮かべ迫りくる少年に、傭兵部隊の面々が僅かに委縮する。だがそれも一瞬ことで、彼らは即座に迎撃体制を取り、その場にしゃがみ込んで機銃を構え、銃爪を引いた。複数の発砲音と、それに合わせたマズルフラッシュが連続する。

五つの機銃からとめどなく撃ち出される弾丸の雨の中、少年は臆することなく——むしろ喜々として弾雨へ向かって突撃した。

手にする長剣を眼前に構えて、剣身を盾のように翳す。

そうするだけで幅広の剣身が少年の瘦身をカバーし、翳された剣に身体が完全に隠れてしまった。

明らかに戦い慣れた少年の判断に、傭兵たちの面々が目を剥き、銃撃が一瞬止まる。

「馬鹿者！ 撃ち続けろ！ 奴を近づけさせるんじゃない！」

彼らの指揮官らしき男が、撃つのを止めた部下たちを叱責する。

だが、それよりも少年の動きのほうが早い。

まるでその瞬間を待っていたかのように、銃撃が止んだ一瞬の隙をついて少年は飛ぶようにして通路を走り、距離を詰め——

「おらっ！」

——裂帛の気迫と共に長剣を横一文字に振り抜く。同時に剣風が唸り声をあげ、鋭い斬撃が並列した男たちの銃身を真ん中から上下に両断する。

誰もが絶句する。それも当然だ。銃に対して剣で挑むというだけでも常識外の所業だというのに、その上剣で銃を破壊するなど、そう簡単にやってのけられることではないし、なまじそれが可能だと

しても実行しようとする人間などまずいない。

そういう常識に捉われている傭兵たちからすれば、眼前の少年の所業は非現実の領域そのものだ。

一体どのような死線を超えれば、これだけの芸当を成せる技術と度胸を得られるのか。分かるのは、一介の戦闘屋ではどうこう出来る相手ではないという、その一点に限る。

「退きな」

まさしく獣の如き獰猛な——それでいて何処か静かな恫喝が反響する。

その声が耳朵を叩いた時、男たちは反射的に銃を投げ捨て腰に納めている小剣を抜刀。それぞれタイミングをずらし、少年目掛けて切りかかる。

だが、

「たくつ……手間かけさせんじゃ——ねーよ！」

長剣が一瞬で大きく、そして鋭く薙ぎ払われる。

男たちの小剣がそのただの一太刀で粉碎された。残像を伴うほどの速さで振り抜かれた長剣が生み出す剣風は、まるで少年の長剣が旋風を纏ったように室内の大気を唸らせ、少年に挑んだ屈強な男たちを吹き飛ばし、金属壁へと叩きつけた。

悲鳴を上げる間もなく、男たちはそのまま気を失って床に落ちたまま動かなくなる。

それを一瞥した少年は、つまらないものを見るような表情で舌打ちをし、スライド式のドアを潜る。

先ほどまでいた狭い通路とは打って変わった広い部屋に出た。部屋の彼処に巨大なコンテナが幾つも積み重ねられているところを見ると、此処が貨物室なのだということは容易に想像がつき、少年は鼻を鳴らす。

「たく、ロクでもない仕事を回されちゃったなー。あのババア、帰ったら覚えてろよ」

たまたま乗り合わせたTTB上層階に向かう移送艦が、TTB統

括組織——大樹の葉に異を唱える組織によって占拠ジャックされたのが今から二〇分前だった。TTBが世に創造されてから、その塔を総べる十二賢者の統治に異を唱える者はやはり多く、大小問わず様々な反政府組織が存在していた。

そしてその多くは、TTB外部周辺に点在する外周都市サークルエリアに住む脱サ落者によって構成されている。外周都市とは平たく言えばTTBに住むことが叶わなかった人間たち——脱落者たちが、元々存在したかつての大都市の廃墟を開拓して造り出した居住区であり、『星のなく夜』から今もお日々TTBの外を跋扈する人類の敵——魔物の塔歴以前に想像され、先の『星のなく夜』に以降暴走した対魔物用生体機械兵器——機獣ガジェットに怯える日々を送ることを余儀なくされている。

当然、脱落者たちはそれをよしとするわけがない。

彼らは日々TTBへ——大樹の葉へと講義を申し立てる。だが、彼らがその声に耳を傾けることは一度たりともなかった。大樹の葉はTTBの活動や機能の安寧を第一とし、それ以外のことには一切の関与を寄せず、興味を向けることもない。

彼らは行政政府ではなく、いくなれば運営機関である。

TTBという巨大な機械——それを制御し、活動の維持と保守を目的とし、それを目標とする一つの——大きな力を持った機関、それが大樹の葉だ。

無論、十二賢者の中にはTTBの治安維持や外延部における魔物討伐を任される【剣の賢者】率いる『騎士団(Einherjar)』や、【法の賢者】率いる『法施典(Ordung)』による施政により、TTB全体への行政や布かれている法律などによる安寧は保たれている。

だが、それは結局のところTTBに住む人たちのために存在するものであり、当然のようにTTB外部——即ち外周都市の人々には何一つとして意味を成さない法でもある。

彼ら脱落者に対しての法は基本的に存在しない。彼らはTTBの

住人ではないからだ。TTBに住まう人間でない者たちに対して、大樹の葉も、この塔の住人も、皆彼らを外の人間としか認識しない。

たとえ同じ姿をしていても、同じ言葉を口にしようと、

彼らは皆等しく、TTBという一つの「国」という枠組みから見たの外の人間——「外国人」という認識されている。

この世界に置いて人種は二種類。

すなわちTTBに住む人間か、TTBに住めない人間か。

前者には最上の庇護を。後者には慈悲なき淘汰が与えられるのである。

だから彼らは異議を唱え、行動を起こす。

少年の乗っていたTTBと外延部を繋ぐ空輸送船は、そういったTTBとその外との間に生じる様々な理由から占拠されたのだ。

そしてその結果——

「たまたま乗り合わせてた俺にお鉢が回ってきた——やってられねーな」

この事態に巻き込まれてしまった少年は、げんなりとした表情で忌々しげに言葉を漏らした。

少年——ニアが乗り合わせたのは、端的に言えば偶々である。

請負屋と呼ばれる、様々な人たちからの依頼を受けてそれを完遂する請負屋と呼ばれる、ようはなんでも屋のような仕事を生業としているニアは、所属する請負屋【ザプリュッド】から斡旋された物資運搬の依頼を受けていたのだ。

数日前から外周都市に赴いてやっと仕事を終えていざTTBに帰ろうとした矢先、たまたま乗り合わせたその船が占拠され——それをどういうわけか【ザプリュット】の長が聞きつけたらしく、ニアが乗っていることをこれ幸いと空輸送船の運航機関に話をつけて占拠した犯人たちの捕縛及び船の奪還をニアに押し付けたのだ。「つーわけだ。とっとと終わらせようぜ、猿山の大將よー」

肩に担いでいた剣を、ニアはつきつけるように水平に構える。その切っ先のはるか先——十メートル弱先にある貨物の上で、洗面をより険しいものに変えた男は酷く不愉快気に嘶いた。

「……貴様のような小僧に、我々の崇高な聖戦に水を差されるとはな」

「何が聖戦だこのタコ助が。やってることはただのテロ行為じゃねーか。それを小綺麗な言葉に置き換えてキャンキャン喚いてんじやねーよ」

「——若造^{ガキ}が！」

ニアの嘲笑に、壮年の男は一喝すると共に立ち上がり左手を突き出す。その両腕を覆うように展開される黒輝の円陣が、周囲の空気を震わせ響振させた。

男の行動に、ニアは一瞬目を丸くして瞬かせ——そしてその口元の両端をニタリ……と吊り上げる。

「へえ……響律式か」

響律式——それは男の行使しようとしている、塔歴に至って以降世に蔓延する神秘の術の名だった。

——響律式。

星の泣く夜以降世界に充満した、世のあらゆる存在に宿る新たな元素物質——響素^{ヒース}。

大気にも物質にも人体にも宿るその響素は、特有の固定振動数を与えることにより、古い伝承にある魔法にも似た力を発揮させることができた。

響素の発見後、前世紀時代の遺伝子技術者たちによって開発された響素を認識することを可能とする文様、響律譜^{スコア}——俗的には刻印と呼ぶ——と呼ばれる特殊な刻印を遺伝子に刻むことにより、人は響素を操るための技術——指揮^{タクト}を手に入れた。

その 指揮 は自身に宿る響素を用いて大気中の響素に影響を及

ばす固定振動数を発生させ、大気中の響素を操り特定の現象を引き起こす。

時に炎を、時には氷を生み出し、自然現象を疑似的に操り扱うことを可能にした。

それが響律式。

響律式により従来の兵器では対抗できなかった、響素による影響を受け凶暴化した獣たち——響獣や、星の泣く夜以降世界の各地に跋扈する黒き異形——【マモノ】に対抗することができ、それによりTTB建設までの時間を稼いだと云われている。

そして今、目の前の男はそれを行使しようと言の葉を紡ぐ。歌うように。

あるいは、音を奏でるかのように。

時に流麗に、時に剛胆に。

力強く。そして囁くように。

誰かに、あるいは何かに語りかけるかのように、男は言葉を口ずさむ。

「……ダムス・ヴェノム・ニゲル・プレート……マスワード・ヘイド・シュヴァルツ・ランケア・ルーク——ザ・スティング串刺すもの」

詠唱——そして起動鍵語が紡がれ、その言葉に導かれるように力が響素を通じてこの世界に具現する。

放たれたる響律式は攻撃型響律式八の型。

「死ね、小僧！」

大気に溢れる響素が凝縮し、物質化——それは人の腕ほどある大きさの無数の針——否、槍と化して虚空を漂い、一瞬の停滞の後、ニア目掛けて一斉に飛来する。

「……」

それに対するニアの反応は、酷くおざなりなものだった。長剣を右の肩に担ぎ——半身の上体で柄を握らない左腕を徐に持ち上げ翳した。そして僅かに手の先に意識を集中——刹那、ニアの前方の空間が僅かに揺れ、歪む。

同瞬、ニア目掛けて襲いかかる無数の槍が彼の身体を貫こうとし——その無数の槍がニアの前方、僅かに波紋を鳴らすように揺れる空間に阻まれて、そこに衝突——次の瞬間、連続してぶつかってくる槍が次々とその形を瓦解させ、塵となつて霧散する様を見た男の顔に驚愕の色が生じる。

「ば、馬鹿な!？」

「この程度で一々騒いでんじゃねーよ、器が知れるぜ」

必殺を信じて放った響律式を防がれ——あまつさえ無効化されてしまった男はその場で頭を抱えて混乱するが、対峙するニアの反応は極冷やかなものだつた。

そんな酷く冷静なニアの様子に腹を立てたのか、男は先ほどまでの余裕は何処に行つたのかというくらい狼狽し、血走つた眼をニアに向けて我鳴り散らす。

「き、貴様一体何をした!？ 何故貴様のような小僧に、私の響律式が阻まれる!」

「んなもんテメエが一番よく分かつてんだろうが。俺に説明求めんな、このド三流」

男の言及など端から相手にする気のないニアはそう蔑みながら男を突き離す。

そんなニアの態度に言葉を詰まらせるが、実際何が起つたのかなど、男自身にも分かり切っていることだつた。

響律式とは、どれだけ響素を上手く統御できるかで術の練度が左右される術だ。

響律譜と 指揮 は、術を行使できるようになるための道具であり、それを如何に上手く扱い、響素を集め、練り上げ、術に変異させられるかは、術者の技量と統御しこなす『意志』の強さよって大きく左右される。

つまるところ、響律式とは『世界の理』に響素を用いることで己の『意志』を割り込ませ、新たな法則を便宜的に作り出すことで事象を操る術だ。

現実を否定し、己の望む世界を『意志』を以て現出させる——
響律譜 も、指揮 も、響素も、そのための足掛かりに過ぎない。
響律式への適応能力によって生じる召喚速度さえも、『意志』を以てすれば覆すことは不可能ではない。

串刺すもの——これは単純に言い表すならば、響素に対して『凝縮』し『鋭利と成れ』そしてニアを『貫け』という三つの意志を具現化したものである。

対してニアが自身で召喚した響素に対し行った操作は、『壁となれ』と、男の響律式を『止め』という二点。

それによってニアの前方に現出した空間の波紋こそが、ニアの召喚した響素が顕現させた『壁』であり、そこに練り込まれたニアの『止め』という指令が、男の串刺すものに込められた『貫け』という意志を完全に上回った。

そのニアの生み出した障壁を貫くには、ニアの『止め』と念じた意志を超える強さで『貫け』と念じなければ、その壁を貫くことはできないのだ。

つまりは究極的な精神論の勝負である。

ニアも男も、響律式を使う者としてそのことは百も承知——故に、男は今日の前で起きた現象を認められずにいた。

自分の『意志』が、目の前の、自分の半分も生きていないような若造の『意志』に負けた。男の持つ自尊心が、その事実を認められずにいるのだ。

しかし、現実にはニアは男の響律式のすべてを悉く防いで見せたばかりか、男の統御した響素に干渉し、その制御を完全に奪い取るという芸当までして見せている。これほどまでに開きのある実力差を否定するには、それこそ今この場でニアの響律式を上回る響律式を放つ以外に他はない。

だが、そんなことは出来ない。出来るはずがない。

男には見えていた。ニアの周囲に集められた、大量の響素の膨大さ。肉眼で見れば、其処にはただニアが立っているだけだ。

しかし響素を視認する 霊視 を行つた場合、男の視界にはニアの姿は何処にもなかった。

正確に言えば、ニアを取り巻く響素の量があまりにも多すぎるために視界を阻まれて目視が出来ない状況にあった。

それほどまでに、ニアと男の間には文字通り桁違いの実力差があった。

「……………クソ……………クソクソクソオオオオオオオ！」

男が絶叫しながら新たな響素を召喚する。量だけならばニアには到底及ぶことのない微々たる量だが、そこに込められた怒りと焦燥が、響律式の勢いを僅かに強める。

しかし――

「ウゼーんだよ、おっさん」

静かに、さしたる感慨もなくニアがそう呟いた時には、すでに彼は男に肉薄し、その長剣を握る右腕を高らかに持ち上げていた。

――轟！

剣閃が唸る。

振り下ろされた大上段からの切り下ろしは、男の放とうとしてた響律式を一刀の下に両断――その術式そのものを無効化。更にその掲げていた男の右腕を肩から容赦なく切り落とす。

「ひぎやああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

男の絶叫が広い貨物室を支配した。切り落とされた腕が床に落ちると、それを待っていたかのように男の切られた肩から大量の血が吹き出し血煙と化して周囲を赤く染める。

しかしニアはそんなことには興味を見せず、コートのポケットから小型の端末を取り出して耳に当てる。

『——終わったかい？』

数度の呼び出し音の後、挨拶もなく事務的に尋ねられる。しかしこれはいつものことなので、ニアは僅かに表情を顰めるだけに留めて応じることにした。

『ああ。任務完了。標的は全員戦闘不能。親玉は片腕なくなつたことを除けば、大体問題ないんじゃない？』

『まあ、上々というところだね。ご苦労さん』

ニアの適当な報告に、相手の方はさして気にとめた様子もなく、労いの言葉を口にした。

『あと十分もすれば船がターミナルに到着するから、後はそいつらを引き渡せば終わり。事後処理は治安局に任せればいいよ』

『りょーかいした、ババア』

『相変わらずクソ生意気な坊やだ。まあ——報酬はいつも通りの口座に振り込んでおくよ。特別手当付きでね』

『当たり前だろ。そうじゃなかったらテメエもこいつらと同じ目に合わせてやる』

『やれるものならやってみな——という非現実的な夢物語は置いておいて、また何かあったら連絡するから、お前さんはそれまで大人しく一般人らしい生活を送ってなさい。じゃあね』

そう一方的な言葉を言い残して、通話は一方的に切られてしまった。文句を言う間もなく、ニアは通信の切れた端末をしばし見据えた後、忌々しげに舌打ち一つしてそれをポケットにしまった。

『くそ、あのババア……いつか目に物見せてやる』

捨て台詞の如くそうばやくニア。そしてふと視線を眼窩に向け、僅かにその鋭い相貌を細め、

『往生際のワリい……』

そう呟いて、ニアは無造作に長剣を横に薙ぎ払った。同時に響素を操り剣に纏わせ、向かってきた響律式を剣戟だけで霧散させる。そのまま腕を後ろに回し、剣を背負う形で支えながらニアは貨物の上から男を見下ろす。

「これ以上面倒起こすんじゃないよ、オッサン」

「黙れ！」

ニアの煩わしいと言いたげな言葉に、男は金切り声を上げて荒々しく頭をふって、むやみやたらに左腕を振るっては響素を操作。最早響律式とも成り得ていない不安定な術を行使してニア目掛けて撃ち出すが、

「……ウゼエ」

ニアはその一言を以て、自分に向かい来る攻撃はおるか、あらぬ方向に飛んで行った響素すらも 指揮 と『意志』を以てその制御を男から奪い取り、自らの操る響素へと変える。

男の表情が、一層絶望に染まるのを冷めた様子で見やり、ニアは剣を振り上げ、そこに響素を乗せた。

意識下に存在する 指揮 の操作は、長年の経験により無意識の領域で扱うことができる。それはつまり、響素と術を行使しようとする『意志』さえあれば、いつだって響律式を扱えることを意味する。

ニアはただ頭の片隅で漠然と意識した。響素に『意志』を通じて形を与える——その形の想像を。響素に求める、響律式の形。それを脳裏に描き、ニアは無造作に男目掛けて剣を振り抜く。

刹那——烈風が男を切り裂いた。文字通り、男の身体を襲った強風が刃となってその身に裂傷を生じさせる。血煙が再び吹き、男が痛みに悶絶してのたうちまわる。ニアが剣に乗せて放った響律式は、強烈な風の刃となって男を襲ったのだ。

男の口から洩れるのは、最早悲鳴ともならない絶叫。

ニアの行動には、一切の容赦とか遠慮というものが存在しなかった。殺していないのは、そういう命令を受けている故の配慮に過ぎない。もし【ザプリュッド】の長から捕縛の指令を受けていなければ、通路にいた男の仲間も含めて皆殺しにしていたとしてもおかしくない——その程度に、ニアは敵に対しての容赦がない。

痛みに悶絶する男目掛け、ニアは貨物を蹴って跳躍すると、手

にする長剣を両手で握り、床でのたうつ男目掛けて突き下ろした。
鈍い金属音が空気を僅かに揺らし、同時に男の悲鳴が一瞬にして
静止する。

ニアの振り下ろした剣の切先が、男の顔のすぐ横に突き立てられ、男は顔のすぐ横に突き立てられた剣を凝視して、その剣が孕む
物理的な死の恐怖に全ての動きを止めた——否、止めざるを得なかつた。

そして、そんな男に向かってニアは何処までも冷やかな目で
見下ろし——薄く嗤う。

「——よくできました」

「……！」

ニアの放った最大級の侮蔑に、男は腕に痛みも忘れて顔を怒りと羞恥で赤く染め、何かを叫ぼうとして——しかしこの少年の前では何も言っても意味がないことを悟り、言葉を呑み込んだ。

男の様子に、もう抵抗はしないだろうと判断したニアは男への興味を失ったように、まるで何事もなかったかのように立ち上がって剣を床から引き抜き、

「——【解除】」
スケーゲル

ニアがそう呟いた刹那、彼の手にする長剣の剣身が、光の粒子となつて霧散する。残されたのは、握っていた剣の柄と鍔の部分のみとなる。響素粒子の響晶武装であるニアの剣は、その柄の部分——装柄アームに還元され、彼はそれを腰のベルトに納めて欠伸を一つすると、

「……くそ……《天使》を……《天使》を見つけないと——」
「は？」

男が唐突に訳の分からないことを呟いたのを耳にし、ニアは思わず呆けた表情で男を振りむく。

見れば、男は何処か焦点の合っていない目で虚空を見上げ、まるでそこに何かがあるかのようにぶつぶつと言葉を連ねた。

「塔に住む《天使》さ……それを見つければ、我々はこの塔を——」

「世界を救えるのだ。そう、あいつは教えてくれたんだ。だから我々は動いた。この塔に囚われている、《天使》を救うために——それなのに、お前のような若造が……なんにも知らないような……無能者に……」

ぶつぶつと意味不明な言葉を連ねる男の言動に、ニアは結論を下す。ただの薬物中毒者が末期になって移送船奪取した——今回の事件は、きっとそういう顛末で終わるのだろう。

「——まったく、阿呆らしい」

酷く不快なものを見たともいう風に、ニアはそう言葉を吐き捨てて今度こそ歩き出した。背後から、何処か狂気じみた笑い声が響くが、最早聞くだけ無駄と切り捨てる。ただ——

「《天使》——ね……」

ただ一つ。その言葉だけが、酷く脳裏に焼きついたような気がした。

十五階層にある居住区の辺地も辺地。外延部近くの人気の失せた一角で、その少女は視線を右往左往させながら歩いていた。

「……可笑しい。確かにこっちに來たと思ったのに……」

桜色の髪に濃紫の瞳の小柄な少女が、無表情にそう呟いた。そして困ったともいう風に、ブカブカの袖に隠れた手で頬を掻く。小柄な身を包むブカブカのローブ開かれた胸元から時々覗く制服——コルプス・アカデミーの校章が、辛うじて彼女が学生であるということを示しているが、もし彼女がその制服を纏っていなかったら、誰もが彼女を十代前半の少女と勘違いするだろう——無論、当人にそのことを言えば憤怒の態度で挑むのだが……。

だが、どの道彼女の現状を聞けば、たとえ彼女の実年齢を知っている物であっても、間違いなくこの少女を子ども扱いするだろう。

——言うまでもなく、少女は迷子だった。

シエラ「F」レッツヒエル。彼女は紛れもなく迷子だった。

もしそう尋ねられたとしても、彼女はその事実を全否定するだろう——しかし、彼女は紛れもなく迷子であった。

ちなみに、何故迷子になったかというと——

「可笑しいね。確かにあの猫はこっちに逃げて行つたはずなのに……一体何処に？」

……そういうことである。

シエラは自他ともに認める無類の動物好きである。ただ、それが災いして、周囲のことになど目もくれず、回りの溪谷など一切耳を貸さず、ただ一心に見かけた動物を追いかけて行き——その結果、気づけば見知らぬ区画に迷い込んでしまうという前例は枚挙として存在していた。

本人は認めないが、彼女を知る人物はシエラのことを迷子のプロフェツショナルとすら揶揄している始末。それくらいに、彼女の迷子率は高い。

そして今回もその前例にもれず、猫を追いかけて東奔西走し続けた結果、現状に至る。

にも関わらず、まだ追いかけていた猫を探し回っている彼女の執着心は諦めが悪いと褒めるべきか呆れるべきか、実に判断が困る。

また、そんな彼女の迷子率を上昇させる要因がもう一つ。

シエラは無類の動物好きであるが、それに反比例するように、彼女は非常に動物に嫌われる性質にあるのだ。

犬に歩み寄れば吠えられ、猫に手を伸ばせば爪で引つ搔かれ、ハムスターは等しく巢に隠れ、鳥は一斉にその場から飛び立って行き、馬には蹴られそうになったことは数え知れず、羊だったら群れで轢かれ、正に踏んだり蹴ったりという状態に陥ってしまう——天性の嫌われ者。

何の因果か走らないが、シエラは酷く動物に嫌われてしまう。そんな彼女が動物に近づけば、まさに一目散で動物たちは『裸足で逃げ出す』の勢이었다。

そして、そうして逃げていく動物をシエラが追えば、動物もまた逃げ続け、シエラはそれを追い続ける。

悪循環此処に極まり、である。

自分が動物に嫌われているのを知りながら、それでも彼女は諦めきれず、こうして街に出れば動物を追いかけて——そして迷子になるのだ。

今日はアカデミーの講義も終えての帰り道、たまたま道端のゴミ箱の上に陣取っていた猫に近寄って、そつと手を伸ばそうとした時、その猫は唐突に起き上がってシエラの手を掻い潜って逃げた

そして数メートルの距離を開けて猫は立ち止まり、シエラを振り向く黒猫。その表情は何処となく彼女を小馬鹿にするような気配があつた——と、シエラは感じ、

「ほーう……」

——それが試合開始コンクとなつた。

あとはもう一進一退の追いかけっこだ。

猫が逃げ、それをシエラが追いかける。逃げ惑う猫に翻弄されながらも、シエラは日々動物たちを追いかけて鍛え上げた脚力と持久力で猫に通髓していった。そして——

「えーと……此処は、何処だい？」

猫を見失って、ようやく自分が知らない区画に迷い込んでいることに気づいたらしいシエラは、回りに並ぶ何処か廃れた建物を見上げて小首を傾げた。

「うーん……どうしたものだろう」

唸りながら呟かれた言葉とは裏腹に、その声に起伏はほとんどなく、どうにも眠たそうな半眼であるため緊張感がいまいち伝わらない。だが、状況的に見て今のシエラは非常に危うい綱渡りをしていると言つていいだろう。

TTBの居住区というのは、塔の外に生きる人間から見れば酷く平穏で不安の内地に見えるだろうが、その実中身は塔の外と何も大差ないのだ。人の住む場所というのは、人の数だけ様々な事象を孕

む場所となる。

もしこのTTBが真に平穏平和であるのならば、治安維持組織など必要とされないはず。しかし、実質彼ら警備隊『騎士団』や『法施典』による施政が存在するのは、TTB内で大小問わぬ犯罪が発生するが故のことだ。

そして居住区の場合、外延部に近づくほど治安は不安定になる。人気は失せ、建造物の外見なども見て分かるくらい荒廃しているのは、それだけこの一帯に人が寄り付かないことを如実に示し——それ故、俗にいうところの『はみ出し者』たちの巢窟と化していることが少なくない。

そしてシエラが今いるその場所こそが、そういった不逞の輩が集う外延部付近なのだが、少女がその事実を把握しているかとなれば、それは確実に否だろう。

自分が今いる場所がどれだけ危うい場所なのかも知らず、シエラはうんうんと唸り声を上げながら特に進行方向を定めることもなくフラフラと歩き出す。

そして、そんな鴨がネギをしょって歩いている状態の少女に対し、目を付けるなど言う方が無理な相談というのも、ある種の道理だった。

少女の進行方向に一人、少し離れた後方から二人、影のそりと脇道から姿を現す。何処かみずばらしい、煤汚れた衣服に身を包んだ男たちがシエラの前後に立ちほだかる。

シエラを待ち構えている男が、なんともらしいうすら笑いを浮かべながら、

「よー、お嬢ちゃん。君みたいな子がこーんな危ない場所に一人でいると危ないよ？　もしかして迷子か何かかい？　ならこの心優しいオニーサンたちが道案内してあげるぜ——って、あれ？」

話しかけた男が思わず突っ込みを入れたくなるぐらい、シエラは男を華麗に無視してその脇をすり抜け、まるで何事もなかったかのように歩き続けていた。しかも未だ云々と唸りながら小首を傾げて

いる。

完全に男たちが眼中にない——そんな様子に見えたのだろう。男たちはシエラのアマリのスルーっぷりに一瞬忘我するが、慌てた様子で我に返り、トコトコと歩き去ろうとしているシエラの前に回り込む。

「ちょ……お前なに俺たちのこと無視してんだ!？」

「——ん？」

そこでようやく男たちの存在に気づいたのだろう。シエラは双眸を瞬かせて男たちを見上げた。

「えーと、ボクになんか用かな？」

「ああ、そうだとも！ だからわざわざ声を——」

「でも、ボクはないから——それじゃあ」

至ってマイペースに、シエラはそう一方的に告げて男たちの間をスツ……と縫うように抜けて歩き出す。あまりに自然過ぎる動作に、再び男たちは呆氣にとられてしまう。

そして数秒後——自分たちが馬鹿にされたのだと思ったのだろう。シエラに話しかけていた男が我慢の限界を迎え、大声を上げながらシエラを振り返った。

「オイコラ待ちやがれ！ さっきから優しくしてやってりゃー調子に乗りやがって！ 身ぐるみ全部はいでやるから覚悟しやがれ！」

元々そうする気だったじゃないか、という二人の連れの視線など気にも留めず、男は懷から一本のナイフを抜く。

しかしシエラの方はというと、まったくこの状況に危機感を覚えていないのだろうか、あるいは気づいていないのか——どちらかといえば確実に後者だろう——男の叫びなど耳に届いていない様子で視線を右往左往させながら歩き続けていた。

その完全に人を無視した態度に、男はナイフを握ったままプルプルと肩を戦慄かせて叫ぶ。

「だー！ もう許さねー！ 泣いて謝っても許してやらねーからな

！ このチビが！」

シエラが動いたのは、その瞬間だった。

先ほどまでの、何処かぼーっとした雰囲気が一変し、その半眼の双眸が鋭い刃物のように研ぎ澄まされ、眼光が男を射抜く。

「——え？」

突然のシエラの様子の変化に、ナイフを振りかざして襲いかかるうとしていた男の動きがピタリと静止する。背後に立っていた二人も同様。シエラの挙動の変化に思わず息を呑み、気圧されたようにその場で硬直する最中、シエラが駆ける。

振り返って男を睨み据えた次の瞬間には地面を蹴って初速からトップスピードまで駆け上り、十メートル近くあった距離を数歩の内に走破。男との間合いを一気に詰めると、軽快な歩行^{ステツフ}で跳躍。速度を存分に生かした跳躍は、シエラの身体を大きく空中に持ち上げ——

「ぴよぎやばっ！？」

その真っ白な膝小僧を男の顔面に叩き込んだ。奇妙な悲鳴を上げて、男の身体が大きく傾ぐ。もしかすれば数センチ単位で顔が陥没したかもしれない——そう思わせるくらいの鮮やかな飛び膝蹴りを受け、男は鼻血を吹き出し頭から地面に倒れ込む。

倒れる最中に男の口から、黄ばんだ小さい欠片——折れた数本の前歯が遅れて地面に落ちる。

それと同時に、シエラはその細い二本の脚で軽快な体捌きで着地を決めると、眉尻を吊り上げ、歯を剥き出しに、

「誰がチビだっというんだい！ 身長がなんだっというんだ！ 背が高いことはそんなに偉いことか！ どうなんだ！ さあ答えるコンチクショーめ！」

そう啖呵を切った。

今年の春に十八歳を迎えたシエラにとって、一四一センチという低身長は彼女の中で最大のコンプレックス——二番目は貧相な身体——なのである。故に、そのことを指摘された場合の彼女の怒り

具合は並みならぬものがある。故に、理不尽ながらも男が受けた攻撃は、ある種仕方がないという部類に位置づけられるのだ。

「おい、大丈夫かよ？」

「ひでーなこりゃ。前歯完全に折れてるわ。ヒヤハハ……」

連れの二人が倒れた男を見下ろしてそう声をかける。飛び膝蹴りを喰らった男は蹴りつけられた顔を抑えながら身を起こし、涙目になって叫ぶ。

「こ、このガキ……ぜ、絶対に逃がすな！ ふん縛って晒し者にしてやる！」

「うえ？」

さすがに聞き捨てならない台詞を吐かれ、シエラは僅かにその表情に焦りを色を浮かべる。自身の期していることを指摘され、ついカッとなって蹴り飛ばしてしまったのを今更後悔するが、それもすべてが後の祭り。

（……えーと、もしかしくとも、ボクはピンチってやつかな？）

胸の内で現状を把握し、僅かに遅れて理解するや否や、シエラは慌てて走り出そうと振り返る——が、後ろで一つに纏めていた長い髪——ガラの悪い後輩曰く、尻尾——を？まれてその足が止まる。

「ひゃあ！？」

女性としては色気の掛けた、外見的には相応という程度の悲鳴を上げるシエラの襟首を大柄な体躯の男が？んで持ち上げる。足が地面から離れ、文字通りちゅうずり状態になったシエラを、猫背気味の男が前に回り込んで見上げて、

「晒し者っていうけどよー。流石にこの外見^{ナリ}に手を出すのはヤバイと思うぜ？ フヒヒ……」

その指摘はもつともなのだが、顔面を蹴り飛ばされた拳句前歯を折られた男にそんな指摘はなんの意味を成さないことは明白だった。「知るかよ！ 俺様の歯を折りやがったんだ。それくらい当り前の代償だ！ その後はその手の趣味がある上層区^{うえ}に住んでる好事家^{かねもち}にでも売ればいいんだよ！」

その台詞に、究極的に自分の身の危険を察知したシエラは粟を食ったように逃げだそうと算段するが、地面に足がついていないこの状況では抵抗のしようがなく、変化の乏しい表情にも流石に焦りの色が濃くなってきた。

（マズイ。この状況は非常にマズイ。あーもー、どうしてこういう時に、後輩君はいないんだよー。こういう時のための君でしょーがー）

この場にもしない人物の助けに期待するのは間違いだが、それでもこういうピンチに頼れるのは誰かと言われたら、脳裏に浮かぶのは――

「――そこのお前たち、何をしている」

シエラがそこまで考えたのと同瞬、一つの声が介入し、全員の視線がその方向に向けられて――そして男たちが絶句し、シエラが目を丸くした。

そこに立っていたのは、十人ばかりの同じ制服に身を包んだ一団。白銀の衣服。その肩に施された青葉に剣の翳された意匠――それは紛れもない『騎士団』の証。

そしてその先頭に立つ銀髪に青い瞳を持つ青年に、シエラは見覚えがあった。一週間ほど前、後輩の営む喫茶店に赴いた時に偶々遭遇した若き十二賢者の一人。

【剣の賢者】、グレイアースⅡヴェルⅡブレードエッジ。

この排他的街並みに似合わぬ名高き騎士たちの長は悠然とその場に君臨し、シエラと――そして彼女を捕まえている男たちを睥睨し――そして向こうもシエラのことを覚えていたのだろう。

シエラと目が合ったグレイアースは、確認をするように真面目を絵にかいたような表情を僅かに穏やかなものに変えた。

「君は、あの店にいた――」

「おお、覚えてたんだ」

グレイアースの確認の言葉に、シエラは感心した様子でそう応じた。すると彼は僅かに口角を上げて微笑み、

「こういった仕事柄、一度会った人の顔は忘れない性質なのでね」

「おー、偉い偉い。何処かの喫茶店の主に聞かせてあげたい台詞だ」
そう言葉を交わして、二人はわざとらしく声を上げて笑った。グレイアースの隣にいる青髪の女性は、呆れた様子で溜息を一つ。シエラを捕まえていた男たちかというと、どうリアクションすればいいのかわからず、ただ目の前にいるグレイアースと、彼の日来ている騎士団の姿に慄くばかり。

そしてひとしきり笑いを発した後、グレイアースは至極真面目な表情でシエラに問う。

「それで……君は一体どのような状況なのかな？」

その問いに、シエラは僅かに小首を傾いで、

「えーとだね。かいつまんで話すと面倒くさいし、簡潔に言つと――多分ピンチ？」

疑問符が付いていることに関しては、グレイアース率いる『騎士団』という救済の手が現れたこの時点で、最早ピンチと称していいのか悩みどころだったからに過ぎない。

戦いに置いて、TTBの統括者である十二賢者最強と目される青年がこの場におり、その人物はまがりなりにもシエラと顔見知りである。そんな彼が、様々な意味で窮地に陥っていたシエラの目前に今こうしている状況は、最早危機的状況と判断するには難しい。

「……なるほど」

そんなことを考えながら発したシエラの言葉の意味を正しく理解したのだろう。グレイアースは僅かに失笑した後、その穏やかな面持ちを鋭いものへと変えて、シエラを囲む男たちを一瞥する。

刃のような鋭い眼光。そこに込められた圧倒的な意志の力が、その眼光に晒された男たちの身体を射竦めた。

「――それで、君たちは私の知己にどんな用があつて、そのような振る舞いをしている？」

グレイアースの言葉に、男たちが息を呑む——否、呼吸することすら忘れただろう。ただ言葉を発しただけでも拘らず、グレイアースの言葉に物理的な圧力すら存在しているような錯覚に晒される。

何も言葉を発することのできない男たちの様子に、グレイアースはただ無言で頭を振り、彼の横で待機していた青髪の女性が静かに口を開く。

「グレイアース様。とりあえず、彼らの身柄を拘束することを進言します。この一帯では、よく婦女子が消息不明になるという話もありますし、彼らにその胸を訪ねてみるのがよろしいかと」

女性の言葉に、男たちがどよめいて視線を逸らす。これではまるで何か知っていますと態度で示しているようなものだった。

男たちの様子を見て、グレイアースも「ふむ……」と頤に指を添えて、わざとらしく思案する様子を見せた後、

「……それもそうだな。どうにも、叩けばそれこそ埃がたくさん出てきそうだ。そうでないにしても、少女を複数で取り囲んでいる時点で、婦女暴行未遂とみなしても問題あるまい」

だろう？ と尋ねる風に、グレイアースは微笑んで男たちを見た。が、その眼は全く笑っておらず、獲物を逃がすまいと睨みつける肉食動物のような気配を孕んでいた。

瞬間、男たちがシエラをグレイアース目掛けて力いっぱい投げ放った。

「うひゃっ!？」

予想外の事態にシエラが思わず悲鳴を発する——と同時に、グレイアースが咄嗟に前に出て屈みこみ、投げられたシエラを受け止める。

「大丈夫かい？」

「お、おう……」

受け止められたシエラは、あまりに状況が目まぐるしく変化することに理解が追いつかず、どう反応していいか判断に困り適当に言葉を濁した。

シエラを投げた男たちはその間に走り出し、その場から逃走を開始していた。彼らはすぐ傍にあった路地裏へと逃げ込んでいくのを見て、グレイアースは僅かに舌打ちをする。

「急ぎ追え。逃げきられるぞ」

そう部下たちに指示しながら、グレイアースは手遅れかもしれないと頭の片隅で自嘲する。

T T B 全体の警邏を任されている『騎士団』とはいえ、居住区の端も端。ほとんど人の寄り付かぬような外延部周辺の地理は熟知し切れていない。なによりこの一帯はT T B 設立当初に増築に次ぐ増築が繰り返されたため大小の建物が乱立しており、それによって生じた細かい裏路地が多数樹木の枝のように存在している。

そんな所に逃げ込まれては、いくら『騎士団』といえど彼らの捕縛は困難になるだろうと、諦めにも似た心情に駆られた。

しかし、今回ばかりはその悲観も無駄となった。

というのも――

「ぴぎゃあ!？」

そんな悲鳴と共に、逃げて行っただはずの男の一人が路地裏から吹き飛ばされたように飛び出てきたのだ。

実際、男は吹き飛ばされたのだ。いや、この場合は殴り飛ばされた――というのが正しいだろう。男の顔の輪郭は顔の右側から強打されたらしく、顔の肉などが全体的に左側に寄った状態で街路に殴り飛ばされて痙攣を起こしていた。

「人にぶつかっておいて謝罪なしとは、いい度胸じゃねーか。アア

！」

「ひいい……!？」

ぐしゃり……

荒々しい言動と悲鳴の後に、とても人間の体から発せられるような音とは思えない、まるで卸し立ての肉を思い切り壁に向けて投げつけた時に発せられるような音が路地裏から響き渡り、逃げた男たちを追いかけて行っただ『騎士団』の面々が思わずその足を止める。

シエラもグレイアースも、その場にいる『騎士団』の全員が沈黙してその路地裏を一樣に見つめる中、

「――ぶつとべ」

路地の蔵閤から聞こえたその宣告の一瞬後、閃光と衝撃がそこから溢れ出し――次いで大柄の男が黒焦げになった状態でよろよろと街路に姿を現し、無言のままに地面に倒れ伏してしまふ。

そして、

「ゲホツゲホツ……くそ、こんな狭い場所で響律式なんざ使っんじやなかったぜ。大丈夫かー、猫」

みゃー。と、猫が鳴く。

そんな、その場にそぐうようで何処かそぐわない台詞と共に、肩に猫を担いだ黒衣の少年が姿を現し――その姿を確認したシエラとグレイアース、そして青髪の女性が絶句する。

同じように、姿を現した少年は自分を取り巻く『騎士団』の面々の向こうに立つ三人を見て、困惑と呆気、そして面倒臭いという感情の入り混じった表情を浮かべ、とりあえずシエラを見て、

「――何やってんだ、シエラ先輩よー」

シエラの後輩、ニア「ゲイル」アシュリートは僅かに嘆息しながらそう尋ねた。

その肩で、猫が面倒くさそうに一度鳴いた。

「これはまた、奇妙な所で巡り合うものだな。何かの縁でもあるのだろうか？」

「縁ね――」

男たちを部下たちに任せ、グレイアースはニアを振り返ってそう言つと、彼は酷く億劫そうに鼻を鳴らした。

「合縁、奇縁、腐れ縁。色々存在するし、アンタとはどんな縁で結ばれてるかには知らないが――どうせ碌でもない縁なんだろうな」

そう言葉を返しながら、ニアは肩に乗せた猫の腹を撫でる。

「ぬー、羨ましい……」

そんなニアを見て、シエラはその無表情を僅かに歪めて猫を愛でるニアを見上げ、猫を見上げ、それを交互に繰り返しており、そんなシエラに向けて、ニアは僅かに口角を吊り上げて嗤う。

「それ以上近づくなよ、猫が逃げ出すから」

「うぐぐぐ……ねこー……」

唸るシエラに向けて、ニアはしっしつと手を振っている。そんなニアのそぶりにシエラは顔を顰めて遠目に彼の肩に乗る猫を見上げていた。

そんな二人のやり取りを見て、グレイアースはうつすらと笑みを浮かべて楽しみに様子を眺めていたのだが、はたと我に返って咳払いを一つ。

「……それにしても、喫茶店の店主マスターをしていた君が、どうしてこんな辺鄙な場所にいるのか——訊いていいかい？」

グレイアースの問いに、何処となく柔らかい笑みを浮かべて猫をなでていたニアが僅かに視線をグレイアースに向けた。その視線にはまるでグレイアースを探るような、それでいて何かを確かめるような気配を宿していた。そして、僅かな億劫も。

そんな二人の間に生じた沈黙に何を思ったのか、青髪の女性がニアの前に進んで彼を見上げ、詰問する。

「グレイアース様が問うているんですよ？　早々に問いに答えなさい」

「ヘルマ。よすんだ」

グレイアースが青髪の女性——ヘルマ・ティオレウスに向けて僅かに語気を強めてそう静止した。するとヘルマは僅かばかり不満気に表情を顰めるが、彼の言葉に異を唱えようとはせず一度だけニアを睨みつけてグレイアースの傍らに佇む。

対するニアはというと、ヘルマの眼光など何処吹く風という様子。冷めた視線でグレイアースとヘルマを一瞥し——そして嘆息し

た。

「……別に。この近くに塔の外にある廃材ガラクタを欲しがる偏屈じーさんが住んでんだよ。そいつにソレを売ってきた帰り——それだけだ」

猫の喉を撫でながら、ニアは億劫そうにそう告げた。グレイアースはそんな彼の様子を逐一観察し、その言葉に嘘がないかを探る。しかし、彼はグレイアースの視線すらどうでもいいと様子で、自分たちに向ける冷ややかな視線とは全く異なる優しさすら垣間見える眼で猫を撫でていた。

そして同時に、彼の口から告げられた言葉に内心首を傾げる。

「まさかとは思うが……君は、外に行っていたのか。このTTBの、外部そとへ……」

「？　それがどうかしたのか？」

ニアはさも当然という様子で答えを返すが、それはグレイアースにとって驚愕するには十分すぎる事柄だった。

TTBの外部に赴く。言葉にして見ればそれはあまりにあっけなく、手段はいくらでも存在する。TTBに住む者がその外部に赴くのは許可証さえあれば誰でも出来ることだ。

だが、出来るからと言って、自ら望んでこのTTBから外に赴く者などそうはいない。むしろ極少数と言っていていいだろう。TTBの統括議会——十二賢者ですらこの塔から自らの意志で外に赴き何かをしようとする者は僅か——それこそ【武の賢者】。このTTBにおいて機獣や【マモノ】に対しての有効な兵器の開発。並びに全盛期の対【マモノ】用兵器、アーティファクトの探索を一任されるデルミナ・ゲイツ・ミルディオンの一派くらいなものである。

そんな自ら好んでこのTTBの外に赴く彼を、グレイアースは変わり者だと思っていたが、まさかそんな変わり者があのでルミナ以外に存在するとは露とも考えていなかったフレイアースにとって、目の前に立つニアの発言は驚愕するに十分な効力を持っていた。だからだろう。グレイアースは思わず胸中の思いを口にした。

「……君は変わっているな。態々あのような危険な地に、自ら好ん

で赴くなんて」

「……変わってる——ね。そりゃこっちの台詞だよ」
「何？」

ニアの口から発せられた言葉にグレイアースは思わず訊き返すと、彼は何処かつまらないものを眺めるような視線でグレイアースを見据えており、彼はその視線に思わず息を呑む。

ニアの纏う独特の雰囲気言葉に言葉を失う中、彼はにたりと笑ってこう言った。

「あんたは、本当に俺の言ってることが——変わっていると思ってるのか？」

「！？」

ニアの言葉に、グレイアースは思わず両目を見開き絶句する。グレイアースは、彼の言わんとすることを正しく理解した。理解してしまった。

だからこそ、グレイアースは絶句せざるを得なかった。ニアの言わんとしていることは、現状では絶対的に不可能な事象。誰もがそのことを夢絵空事と切り捨ててである考え。

それを、この少年はさも当たり前のように考えているのだということを理解し、グレイアースは言葉を失ってしまったのだ。

「……」

「——なるほど」

言葉なくニアを見つめ続けているグレイアースの様子に、シエラとヘルマがいぶかしむように彼を見据える中、ニアはだけはグレイアースと同じように、彼の考えていることを理解したのだろう。だからこそ、彼はそんなグレイアースに向けてにやりと笑んで見せる。

「あんたは、まだマシな部類の人間つつーわけだ」

先ほどまでとは全く異なる、何処となく満足したという様子でニ

ニアが笑った。そしてその視線を今度はグレイアースからシエラへと移し、ニアとグレイアースの間で交わされた会話の意味を全く理解していないのであろう少女の頭を軽く叩く。

「うにゃ」

「何ボケっとしてんだよ、あんたは」

奇妙な声を発したシエラに向けて、ニアははあ……と呆れた様子で溜息一つ漏らし、猫を撫でていないほうの手でグレイアースたちを指差し、

「曲がりなりにも、こいつらに助けてもらったんだろーが。ちゃんと礼くらい言えよ」

「ぬ、むう…… だけどね、それが彼らのお仕事じゃないかい？」

「あんたバカか。こいつらが仕事であんた助けたのだとしても、それで礼を欠かすのは人として間違っただろ」

「君に人道を問われると、なんか複雑だよ」

「んなことどうでもいい。今アンタがするべきことは、こいつらに礼を言うことだろ。さっさとしろよ、先輩殿」

どこか不満げな様子の子のシエラに、ニアは延々と説教垂れて彼女に例の言葉を促した。とてもその外見には似合わない道徳的な言葉に、彼の不遜な態度や先ほど男たちを昏倒させた際の言動によって粗暴な若造というイメージをニアに抱いていた『騎士団』の面々は思わずあんぐりと口を開いて絶句していた。

そんな彼らに向けて、シエラはしどろもどろに言葉を濁しつつ、それでも背後から感じる物理的な圧力を持った眼光に耐えきれず、ぺこりと頭を下げた。

「えっと…… 助けてくれて、ありがとう…… ございました？」

謝礼の言葉は、何故か疑問形だったのは突っ込むまい。

「この迷子が迷惑掛けた。俺からも礼を言わせてもらっわ…… そうだな、そのうち店に顔出せ。茶ぐらい出してやるよ、【剣の賢者】様」

そして何故かニアのほうは無駄に態度が大きかったことにも、

誰一人として突っ込まなかった。先程ニアに強気で挑んでいたヘルマですら、ニアのシエラに対する説教で絶句している。

そしてこの場で唯一突っ込みを言えられるであろうグレイアースはというと、何処か心此処に非ずと言った様子でニアを見据えていた。

その当人はというと、何処かしたり顔でグレイアースを一瞥した後、まるで何事もなかったかのような態度で颯爽と歩き出す。すでにその歩みは周囲で忘我する『騎士団』など完全に無視し、悠然とした態度でその場を去って行った。

「あ、こら。ボクを置いていくなー」

その背をシエラが肩に引っさげたカバンを握りながら追いかけていく。

そして残されたグレイアースを筆頭とした『騎士団』の面々は、しばらくの間その背を黙って見送った後、捕らえた男たちの護送や周辺の巡回に向かい出す。

そんな中で、グレイアースは一人だけニアの去って行った街路の果てに視線を向け続けていた。最早そこにあの不遜な少年の姿は見えていないだろうに、彼は見えなくなったニアの背中を凝視し続けていた。

「……あの、如何したのですか？ グレイアース様」

「……ん、ああ。ヘルマ……彼は、面白いな」

ヘルマの呼びかけで我に返ったグレイアースは、僅かな逡巡の後その言葉を口にした。その言葉の意味が分からず、ヘルマは承服しかねると言った様子で眉尻を吊り上げる。

「そうでしょうか？ 私にはただの慇懃無礼な子供に見えましたが」

「……ふむ。君にはそう見えただか？」

「はい」

ヘルマは迷いなく断じた。その彼女の迷いのなさに、グレイアースはくすりと笑う。それが彼女の彼に対する評価なのならば、それもまた彼の一面なのだろうと納得の意を示し、

「分かった。この話はここまでにして、仕事に戻るとしよう」

「はい、グレイアース様」

その言葉を最後に、二人は無言のまま歩き出す。ニアたちの去って行った方向とは真逆のほうへ。

歩足を止めることなく、グレイアースはヘルマを伴いながらその思考の片隅で僅かに思案し、この場を去った彼へ向けて問う。

（……君は、本当にできると思っているのか？）

——大地へと帰るなどという、最早誰もが忘れ去った帰郷を。

夕闇が訪れ、徐々に夜が迫る中、壮年の男は人気の失せた道で壁に背を預け、肩で息をしながら頭上を見上げた。

頭上には夜闇に染まる空と、それに相反するように輝きを強める月が見える。

「分かつてはいたが……やはり広いのだな……このTTBは」

改めて、彼は自分が生きているこの機械仕掛けの塔の巨大さを目の当たりにした。

この塔の何処かに住んでいるという、TTBが生み出される以前よりこの世に生きているとすら言われる、魔女の名を冠する人物を求めて下層に来たものの、その実彼は彼女の行方を知らなかった。

だが、彼女の存在は何時だって噂として飛び交っていた。騎士団は何度も彼女の下に訪れ、引き抜き（スカウト）しに行ったが断られたという話も聞く。

「……もう、それほど時間も無いというのに」

すでに何度も追手の姿を見ている。往来の場ではそれほど荒っぽいことはしていないが、直に人の行き交い失せてくる時間。彼らの行動は過激なものに変わるだろう。

そうなれば、自分に逃げ切る術はおそらくない。

どれほど響律式を操れようと、所詮彼自身は科学者でしかなく、

戦闘訓練を施された憲兵などには勝てるわけがない。

「……今は、逃げるしかない」

呟き、男は歩き出す。

数を減らしてきている人の波だが、まだ人はいる。人気のない場所を通るくらいならば、まだこちらを通る方が安全だと判断し、男は人波に紛れて歩き出す。

周囲に視線を巡らせ、追つての姿がないか注意しながら歩いていると――あまりにそのことに注意を払い過ぎていた為だろう。

「うわっ!？」

「わわ」

男は誰かにぶつかってしまい、たたらを踏みつつも倒れるには至らず、慌ててぶつかった相手を見た。

「……痛い」

ぶつかった相手は、小柄な桜色の髪を持つ少女だった。本当に小柄で、その背丈は自分の胸ほどの高さまでしかないだろう。おそらく、近過ぎて視界に収まらなかったのが衝突の原因だろうと、男は判断した。

「まったく、何してんだよ」

そう悪態突きながら少女に手を差し伸べたのは、おそらく少女の連れなのだろう。黒いフード付きのコートに身を包んだ、白金の髪を持つ目つきの悪い少年だった。

少女は少年の差し出した手を取って立ち上がり、少年はその鋭い視線をこちらに向けられ、男は思わず息を呑んだ。

文句か何かを言われるのだろう。瞬間的にそう予想した男だったが、そのガラの悪そうな少年は、

「連れが迷惑かけたみてーだな。悪かった。アンタ、怪我はないか？」

そう、謝罪の言葉をかけてきたので、男は面喰ってしまい、言葉が出なかった。

そんな男の様子に眉をひそめつつ、少年は連れの少女を見下ろし

て、

「おいコラ。アンタがぶつかったんだからアンタもちゃんと謝れよ」
「うるさいなー。それくらい分かってるよ。いちいち口うるさい後輩君だ」

少女は抑揚のない声で少年の言葉に応じつつ、男にこうべを垂れた。

「すみませんでしたー」

「謝る気ねーだろ、アンタ」

そのまま二人は口喧嘩を始める。傍から見ていれば微笑ましい光景——事実周囲はそんな表情で見守っている——なのだが、男の視線は、別な所に向けられていた。

若者の着ている、黒いフード付きのコート。

その両肩に刺繍されている刻印。黒い塔を×字を描くように貫く剣の刻印。

男は、その刻印を知っていた。

気づいた時には、男は若者の肩をガシツと掴んで彼を見ていた。

当然のように、少年の顔には困惑の色が浮かび、いきなり掴みかかって来た男に鋭い視線を向けて睨み据えるが、男は切羽詰まった様子で口を開く。

「君は、剣の魔女を知っているかい？」

そう問うた瞬間、少年の表情は一変し、一瞬驚愕に染めたすぐ後に、周囲に視線を巡らせて何かを警戒する。そして小さな、だが確かに聞こえる声音で、

「……ババアに何の用だ？」

彼はそう男に問い返す。

自分の問いかけの意味が伝わったという事実、男の表情に安堵の色が宿る。だがそれも一瞬のこと。男は周囲を見回し、まだ追手の姿が見えないことを確認したのち、白衣のポケットからある物を取り出し、少年の手を取ってそれを握らせる。

突如手を取られてぎょっと目を剥くも、少年は自分の手に何かを

握らされたことに気づく。だが、

「……それを魔女に渡してくれ。頼んだよ」

男は囁くようにそう言っ、少年の側から離れて走り出す。

「おいっ!？」

少年が慌てて呼び止めようと声を上げるが、男は構わず走り続ける。託すべき物はもう託した。後はできるだけ彼から離れて時間を稼ぐ——それだけでいい。

周囲への迷惑など考えず、ただ闇雲に人波の間を駆け抜け、出鱈目に道の曲がつてを繰り返した。

やがて、自分が何処にいるのかすらも分からなくなるほど滅茶苦茶な走りをし、苦しくなった呼吸を整えるために建物の壁に背を預けて深呼吸する。

そして呼吸が整ったところ合いを見計らって再び走り出そうとした。

「——やっと見つけたぞ。デューリング君」

酷く無感情な声が背後から聞こえると同瞬、腹部に鈍い痛みと共に熱を感じ、恐る恐ると自分の腹を見下ろし——白銀の刀身を自分の血で赤く染めた細見の剣を見た。

振り返れば、メガネを掛けた長身の男が右手に握る剣を引き絞り、それを今まさに打ち出そうとしている姿が見えた。

「裏切り者には死を——それが鉄則だろう?」

胸を穿つ音と、享樂じみた宣告の声を最後に、男の意識は暗転した。

裏路地を走り抜けながら、ニアは周囲に視線を巡らせながら先ほど走り去った男を追っていたのだが、その矢先に遭遇した事態に呼吸を殺し、気配を殺してその様子を窺い見る。

白衣の男が放った二刀。その二刀目は確かにあの男の心の臓を穿っただけは確認できた。

迷いのない必殺の一撃。それを放った男の動きに無駄はなく、一流と称するに相応しい『剣士』の太刀捌き。

衣服から、そしてその背格好から見えた体躯と筋肉に量から、男が戦いを生業とするというよりは研究者、あるいは学者然とした人種であるのは瞭然だった。

（……くっそ、なんなんだよあいつは）

ニアはポケットの中に納めた記録媒体メモリーに触れる。

（そんなにこれが重要……てか？）

何を託されたのかは知らないが、それはあの男を殺してでも奪い返さねばならないような代物だということくらいはニアにも分かる。

ならば此処は早々に去るべき——そう判断したニアはその場を足早に立ち去ろうとした。だが、その時双剣を扱う研究員と共にいた数人の武装兵士の言葉に、その歩みが止まる。

「やはりすでに記録媒体は何者かに渡し終えた後のようです——轟様」

その名。轟と称された名を耳にした瞬間、ニアは自分の中で何かが爆ぜるような錯覚を覚えた。

（轟——斑目〃轟か！）

その名が耳朶を叩いた刹那、胸中に生じた衝動は猛火の如くたぎり、今すぐにでも振り返って駆け出し、双剣の研究員に向けて剣を、響律式を、自分の放てるあらゆる技巧のすべてを叩き込みたい衝動にかられた。

しかし、寸での所でニアは踏み出そうとした足を止めてその場に踏みとどまる。奥歯が強くこすれ、下手をすれば碎かんとばかりに歯を食いしばる。何処か切ったのか、僅かだが口の中に血の味が広がった。

（今じゃねえ……今はまだ、その時期じゃない……！）

必死に自分へ言い聞かせて、ニアは無意識のうちに剣の柄へと伸ばしていた手を放して踵を返す。

後ろ髪を引かれる思いを必死でこらえて、ニアはただただ静かにその場を後にする。

その胸中に、絶対的な憎悪と殺意を抱きながら。

長身瘦躯を白衣に包んだ男——斑目——轟は僅かに眼鏡のずれを直しながら黙考する。自分の部下であつたこの壮年の男——ルードビツヒ——デীরリングの持ち出した機密情報。

(……参りましたね。まだ『神域ガブリエルの守護壁』の存在を外部に漏れるのだけは避けたかつたのですが)

そのためにわざわざ自ら出向いて口封じのために殺害したというのに、肝心の情報がコピーされた記録媒体がすでに他者の手に渡っている。流石にその情報が渡った相手を特定するのは困難だろう。

「こうなつては、計画を早めないといけませんね——彼にも報告しなければいけませんし……まったく、困ったことをしてくれた」

しかし、万全を期した状態で計画を進行していたとしても、そこには必ずと言っていいほど綻びというものが生じ、不確定要素イレギュラーという存在へと変化する。轟にしてみれば、この程度の事態ははまだ想定範囲内だつた。

今回の計画は長い長い時間をかけて推し進めてきたものだ。この程度で躓くような杜撰な計画ではないし、これは上層部も容認している事象——たとえ外部に漏れても容易く頓挫することなどない。それに——たとえこの計画自体が白紙に戻されたところで、轟自身の計画には何の支障もきたさない。

「では、早急にこの死体は処理しておいてください。私は研究棟に戻ります」

『はっ』

武装兵たちの唱和を背に受けながら、轟は颯爽とその場を後にしながら思考を巡らせる。

（計画を早めるのは吝かではない。機関自体はもう九割方完成している——残るのはその心臓部となる《天使》確保……）

目下部下たちを始め、あらゆる組織に根回しをして探させているその存在——《天使》。

（あれは確実に存在している——五年前に、私たちはその波長を確かに計測した。あの力さえあれば、我々の——私の計画は盤石のものとなる）

轟は黙考し——やがて一人ごちるように言葉を漏らした。

「……少し、試しますか」

そう無意識に言葉を漏らした彼は、白衣のポケットから携帯端末を取り出してとある人物へと連絡をつける。

数度のコール音の後、相手が出た。

「……何用か？」

挨拶もなく、ただ用件だけを尋ねる相手の態度に苦笑しつつ、轟もまた簡潔に応じた。

「計画を早める必要ができました。ですから下の階層——そうですね、三十七階層辺りに例の行事の日にアレを解放していただきたい」
それだけで、相手は轟の意図を察したのだろ。その上でなお、彼は轟に尋ねる。

「……何のために？」

それは問いではなく確認。端末の向こうから聞こえてくる男の声に、轟は迷いなく答えを返した。

「——《天使》をいぶり出すための狩り……ですよ」

目の前に相手がいるわけでもないのに、轟は満面の笑みでそう告げた。

端末の向こうで、男が僅かに沈黙する。もちろん、それはほんの

わずかの一秒にも満たない沈黙。そして――

『――よからう。仔細は後々に連絡するがいい。私は早々に準備にかかる』

男はそう言葉を返した。轟は満足げに頷いた。

「ありがとうございます。では、そちらの件はお任せしますね」

『分かっている。お前こそ、必ずや《天使》を見つけ出せ。刻限は迫っているのだから』

その言葉を最後に、通信は一方的に切られてしまう。轟は一瞬呆気にとられたように端末を一瞥し――そして失笑する。

「当然ですよ。すべては、我が願いの成就のためですからね」

Act:2 災厄の者

——請負屋【ザプリユッド】。

報酬次第で荷物の配達から機獣や魔物の討伐すらも請け負う猛者の集団として、その業界では名を知らぬ者はいないとまで謳われるなんでも屋。

第十二階層の一角にその本拠地を構える【ザプリユッド】の最奥——『魔女の間』と呼ばれる純和風な意匠の凝らされた部屋に住まう金髪の和装の童女——麗愛Ⅱマルスタインが煙管を銜えて紫煙を吐き出しながら、むすーつと不満げに表情を顰めるニアを見据えていた。

「というわけで、その仕事はお前に任せる。文句はないな？ ニーア」

「あるに決まってるだろうがクソババア」

自らの長に対して彼が不機嫌を隠さず不遜な態度を取る理由は、ほんの小一時間前に遡る。

その日の朝早く、ニアはある人物に呼び出しを受けてそこに来ていた。

コルブース・アカデミー。TTB第十五階層の一角、第二学園区画に存在する教育機関の一つで、一般教育を施す一般科。響律式や響晶武装を用いた戦闘技術教育を主とする戦律科や、技術発展を目的とした技巧科、響律式の研究・開発を主とする響律科、過去の技術知識や幅広い知識の探求を行う研究科といった複数の学科を有する第十五階層最大の教育機関。

ニアも一応此処の戦律科に席を置いてはいるのだが、元々戦闘

技術は【ザプリュッド】でも屈指の実力を持つ彼にしてみれば、このアカデミーの生徒たちの戦いというのは正しく兎戯であり、相手にする価値もないと切って捨てほとんどの授業をサボっていた。

その彼が呼び出しを受けたのは、戦律科担当教師たちの集められている——まあ世にいう職員室である。

「——失礼します」

そう一言告げてからニアは職員室へと入った。粗暴な態度は最早彼の地であるが故に仕方がないが、その根っこで昔施された教育のため、こういう時の例をニアは決して欠かさない。

ただし、その風貌と態度と目付きが彼のその律儀さを一瞬にして台なしにするのだが、

「ん？ 律儀にちゃんと来たか、アシユリート」

「……おう」

「相変わらずふてぶてしいガキだな」

「余計な御世話だ」

「こーらアシユリート。お前ちゃんと俺様のありがたい授業に顔出しやがれ！」

「うっせ、俺の勝手だ」

「アシユリートくん。来週実技試験あるから顔出してねー。出ないと単位やらないわよー」

「忘れなきゃな」

この職員室では、ニアの風貌も態度も目つきも気に留める者など誰もいなかった。

どの講師たちも皆一様に職員室に現れたニアに向けて気さくにあるいは愉快気に声をかけ、ニアもまたそれぞれに不遜ながらもしっかりと答えを返す。

これが一般の教育機関や一般科の職員室ならば教師陣から叱咤の声が嵐の如くニアを苛むだろう。

しかし、此处はそういった普通の教師という者がほとんどいない。というのも、この戦律

科を任されている教員の大半が、元戦闘専門の請負屋であったり、『騎士団』に所属していたものであったり、最も機獣や魔物との戦闘が激しい外延部防衛局の前線で戦っていた者などがほとんどだからである。

かつての職を辞してなお、戦いの場に身を置かずにはられない——そんな人間たちを集めた場所——それが戦律科の教師陣だった。故に、彼らのニアに向けるそれは、生徒と教師というよりは同じ立場にいる同業者というのが近い。

そんな中を闊歩し、ニアは自分呼び出した男の前に不遜に立つ。

「——で、朝っぱらから何の用だよ、オッサン」

「お前は礼儀があるのかないのか本当に分からんな、ニアア「ゲイル」アシュリート」

そう返したのは、白髪の間違った金髪をオールバックにした壮年の男だった。

ゼリク「アーミーレンド。かつてはTTB外延部防衛局の最前線で戦い、その荒く猛々しい勇猛さと圧倒的な強さから【戦鬼】という二つ名で恐れられていた屈指の戦士。

そんな男を前にしても、ニアの態度はやはり変わらない不遜さを孕んでいた。

「いいからさっさと用件を言えよ、これでも暇じゃないんだ」

「ふむ……」

ニアの言葉に、ゼリクはしげしげと顎を撫で回しながらニアを見据え、仕方がないという様子で嘆息一つ。

「お前、二日後に上級学年による野外講義を知っているな」

「いや、知らねー。なんだそれ？」

あっけらかんと切り返されたニアの言葉に、ゼリクは僅かに目を細めて再びため息を漏らし、やれやれと言った様子で頭を振ってから口を開いた。

「まったく。学生とは思えないな、貴様は。まあいい。説明してや

る——と言ってもそう難しいことではない。単に一般科を除いた学科の四期生から六期生が下の階層で実践・実地講義を行うというだけのことだ」

「あー……あれか。なんか他の連中が騒いでるなとは思ってたが——なるほどな」

ゼリクの説明に、ニアはやつと合点がいったというように首を縦に振ったが、ゼリクからしてみればニアがすでに興味をなくしているのは明白だった。

その理由は単純。ニアにとって、その行事は実につまらないものだからだ。

下の階層に行つての実践・実地訓練とは言っているが、要は体の良い遠足程度のものである。無論、生徒たちは自分の学科に対応したカリキュラムが組まれてはいるが、それはそれぞれの学科生が初期の頃に教わる内容の再確認程度のことではない。

戦律科の生徒にはその階層にて機獣を相手にするという実戦もあるが、本当に生徒を危険な機獣と戦わせる訳もない。本場を知っている者からすれば雑魚中の雑魚と言えるような小型のものや、戦闘能力の低い機獣と戦うのが関の山だ。

強さへの探求と強い存在との戦いを渴望するニアにして見れば、なんとも生ぬるい御飯事——とまあそんな感じである。

しかし、ゼリクにとってそんなニアの感慨は関係なかった。心情的にいえば、ゼリクもまたニアに近い、こんなことやっても力はないからやるだけ意味がないという考えを持つてはいるが、この野外講義の実施が決定している以上この場に個人の感情など意味を成さない。

ゼリクは組んでいた腕を解き、デスクの上に置いてあつた封筒をニアに投げ渡す。

「何だよ、これ？」

酷くぞんざいに封筒を受け取りながらニアが尋ねると、ゼリクは僅かに鼻を鳴らしてから答えた。

「お前の主に——剣の魔女に渡してくれ。今回の野外講義での助力要請……そんなところだ」

「はあ？」

ゼリクの言葉に、ニアは素っ頓狂な声を上げたのは無理もない。ただのアカデミーの講義で請負屋に依頼する講義など聞いたことのないのだ。

しかしゼリクは至極真面目な表情でニアを見上げ、何処か躊躇った様子で静かに重い口を開いた。

「最近、下層の方で機獣の活動が活発になっていると聞く。それに、お前は知っているだろう。たとえTTBの中であつても、最早下層は絶対の安全圏でないことを」

「……」

ゼリクの言葉に、ニアは無言で彼の視線を真っ向から受け止め——そして静かに首肯した。

「つまり、保険は掛けておきたいってわけか？」

わずかに口角を上げたニアの表情に、ゼリクはいかめしい表情を僅かに柔和なものに変えて肯定する。

「そういうことだ。一応、『騎士団』のほうにも問題が発生すればすぐに連絡をつけられるように手配はしているが、やはり欲しいのは後々の増援よりもその場での確実な戦力となる頭数なのだ。だからそれを請負屋——お前を通せばすぐにコンタクトを取れる【ザブリユッド】に、それを頼みたい」

「ふーん……」

ゼリクの言に、ニアは封筒を掌で弄びながら気のない返事を返した。ある種予想できたニアの態度に対してゼリクは何も言わず、ただ簡潔に告げる。

「今日の講義はすべて免除となる——だから、早々にそれを剣の魔女へ届けて欲しい」

「りょーかい。まあ、元々今日はババアに会いに行く予定だったしな。ついでに渡してやるよ。どの道、この件は俺には関係ないだろ

うし」

不敵にして不遜な笑みと共に、ニアは手にした封筒をひらひらと弄びながらそう言つて踵を返す。

だから、その背に向けてゼリクが微かな笑みを浮かべていることに、ニアは気付けなかった。自分がこの行事に置いて無関係を決め込んでいたが故の失策。

「では、よろしく頼むぞ」

「おう」

気のない返事を返したニアは、ゼリクのその言葉を、封筒をちやんと届けてくれと言う意味と勘違いしていた。

その言葉の本当の意味を正しく理解し後悔の念に駆られるのは、ニアが【ザプリユッド】に到着してその封筒の中に入っていた依頼書に目を通してからとなる。

そして現在。ニアは自らの主である麗愛の前に一步も引かぬと言つた形相で彼女と相対していた。

今回ゼリクから【ザプリユッド】に回ってきた仕事がどんなものであると、結局は件の野外講義の護衛ということに変わりはないならそれに参加することのない自分には全く関係のないことだ——そう信じていたのだが、事態は依頼書の文面によって一転してしまつた。

ゼリクから手渡された封筒の中の数枚の依頼書。そこに記されていた一文が、ニアにとって言葉を失うほどの衝撃をもたらしたのだから。

『——此度の野外講義に置いて、TTBの言状況を鑑み、その上で最悪の場合を想定し、万全を期すために【ザプリユッド】数名の助力を願いたし。また、その担当者の中に、ニア「ゲイル」アシュ

リートを確実に参加させて頂きたい——」

ニアからすればまさに「ふざけるな」絶叫したくなる文章であったが、そのニアの主であり、【ザプリユッド】の長である麗愛は安楽椅子に腰かけ、煙管で紫煙を大量生産しながら楽しそうに笑った。

「くくく……これはまさに——してやられたのう、ニア」

「……黙れ、ババア」

常人ならばそれだけで気を失いそうなほど底冷えする声音で切り返しながら、ニアは金のかかったソファに腰掛けて忌々しげにテーブルに拳を振り下ろす。

「あのオツサン……騙しやがったな」

「責任転嫁も甚だしいぞ。彼はなにも騙してなどいないだろう。お前が勝手に勘違いしただけのことだ。違つかえ？」

「~~~~~ツツツ！」

かんらんかと笑いながら上げ足を取ってくる麗愛の態度に、ニアはその場で地団駄を踏みそうになるのを必死に堪えて、その代わりと言わんばかりに刃の眼光で麗愛を睨み据えるのだが、彼女にとってニア如きの眼光などその辺の家の庭で吠える犬と大差なかった。

彼女はニアの眼光から生ずる圧力など完全に無視して、逆にニアを一瞥するだけで威圧し、彼の不機嫌を隠そうとしない態度を委縮させつつ、鈴音のような声音で彼に命じた。

「睨んだところで何も変わりませんよ、ニア。

そして私は【ザプリユッド】の主としてお前に命ずるのだ。此度のゼリクからの依頼。我らが【ザプリユッド】はしかと引き受ける——

——この意味が、分かるな？」

わずかに、麗愛の目が細められる。しかし、そこに込められた無言の意志を完璧なまでに受け取ってしまったニアは、ソファから立ち上がって麗愛へと一礼——否、拝礼し、

「――イエス・ママ」

ただ一言、そう承諾の意を示した。

元より、麗愛がこの仕事を受けると決断した瞬間から、ニアに拒否する権利は存在しなかったし、する気もなかった。

ニアにとって、麗愛とは雇い主であると同時に保護者的存在でもある。そして何より、一人行く当てのなかった彼を育ててくれた恩人でもある。口ではどれだけ反抗的な態度をとって見せようと、ニアにとって麗愛の言葉は絶対であり、その意に反するという考えは端から存在しない。

救われたのが命であるのなら、それこそ命を賭して彼女の命に応え完遂しよう。それがニアの内に秘めている決意だから。

そんなニアの心情など知ってか知らずか、麗愛は満足げに口角を上げて鷹揚に頷いて見せる。

「よい返事だ。では明日、任せるぞ。他の者は後で適当に見繕っておく。今日の残りは自由に過ごしてくれてよいぞー」

「へーへー、りょーかい」

麗愛の労いに対し、寸前の了承時とは打って変わったまるで気のない返事を返すニア。

しかし、

「……ババア」

ニアは僅かに躊躇いながら麗愛に呼びかける。

椅子を気分よく揺らしていた麗愛は、ニアの声音にわずかな変化を感じ取ったのだろう。即座に椅子の動きを止め、煙管を一度大きく吸って紫煙を吐き出した後、

「――何かあったか？」

そう切り出す。ニアは即応した。

「昨日――十五階層で白衣の男に会った。身元とかは分からねー。ただ、アンタにこいつを渡すように頼まれた」

話しながら、ニアはコートのポケットから記録媒体を取り出して麗愛に投げ渡す。彼女はそれを受け取り、僅かに目をくれた後それをデスクの上で置いた。

「それで、その男はどうした？ まさかそのまま見送った——などとは言うまい」

「当たり前だっつーの。そうアンタが教育したんだろう」

ニアの返しに、麗愛は「当然だ」とでもいう風にうんうんと頷く。が、それも一瞬のことで、その表情はすぐに至極真面目なものにとって代わり、

「それで、そいつはどうした」

「身元を洗う前に殺された。ものの数分の間に——な」

「そいつらの特徴は」

「おそらく、上層の連中だ。それらしい目印はなかったが、装備や身のこなしを見る限り、十分に訓練を施された実戦部隊だったぜ」

「ふむ……そうか」

ニアの説明に、麗愛は思案顔で煙管を銜えて首を捻った。そこで僅かに逡巡したが、ニアは話すべきか隠すべきか悩んだ末に、もう一つのことを告げるために口を開いた。

「……それと、もう一つ……」

「何だ？」

麗愛が即座に問うてきた。その視線と言葉を正面から受け、ニアは僅かに逡巡した後、彼女にそのことを告げた。

「その場には、奴が——斑目」轟がいやがった」

「——！？」

ニアの口から告げられた名を耳にした刹那、麗愛の表情が驚愕の色に染め上げられる。ぽろりと口から煙管が零れ落ち、麗愛は慌ててそれを？み取りながらニアに尋ねる。

「確かか？」

「——ああ。確かに、武装した連中にそう呼ばれていた。そいつを渡してきた男を殺したのも奴だった」

ニアはぎりっ……と歯を軋ませながら答える。掌に食い込むほど強く拳を握り締め、怒りと憎悪に顔を染めながら、ニアは吐き出すようにその名を口にする姿を見て、麗愛はニアの言葉が真実なのだと悟る。

「そうか……よく、切りかからなかったな。偉いぞ」

麗愛は肩を震わせて感情を押し殺しているニアを見て、朗らかに笑ってそう褒めながら、その内心で驚嘆していた。

ニアにとって、斑目「轟」という存在は絶対的な悪であり、殺したくて仕方がない殺意の目的のような存在だ。そのことを麗愛はよく——それこそ痛いほどよく知っている。

だからこそ、その場の感情に任せて目の前に現れた仇敵を衝動的に殺そうとしなかったニアに、麗愛はその実心底驚かされた。

「ガキじゃ……ねーんだ。感情任せで暴れるのは獣だろうよ。それに……俺だけならいいけど、他の連中を巻き込むのは、きつと博士が望まない……」

「そうだな。奴——恭一郎は、そんなことを望むまいさ」

吐き出すように呟かれたニアの言葉に、麗愛は同意を示しながら煙管をデスクの傍らに置いて、置いてあった記録媒体を手にとった。

「あの小僧が何をしようとしているのか。他者を自らの手で殺してまで闇に隠したかったものがある——そして今となってはこれだけが手がかかりか。しかし、こんな物の中身をどう確かめるといいのか……」

「それを剣の魔女に渡せ——おれはそう言われたぞ？」

「しかし私はこの手の機械に弱いのは、お前もよく知っているだろう？」

麗愛のしょぼくれた表情を見ながら、ニアは「ああ……」と頷いた。

この童女はどういうわけか機械技術という者との相性が圧倒的に悪いらしく、【ザプリユッド】の構成員と連絡を取るために用意し

た携帯通信の出来る端末ですら扱いに慣れるのに数年の歳月を要したくらいだ。

（……なんつーか、俺の周りにいる女どもは、どうにも相性が悪いものにはとことん駄目なの……）

脳裏によぎる、動物が好きなくせに動物にこの上なく嫌われる桜色の髪をした先輩少女の姿が浮かんだ。きつと今日も報われない究極の一方通行に明け暮れているのだろうと思うと、何故か目頭が熱くなったのはご愛敬。

ニアは脳裏に浮かんだ動物を追いかけて四苦八苦するシエラの姿を振り払い、僅かに嘆息してから麗愛に問う。

「じゃあ、どうするんだよ。そいつの中身、一応俺も見れないかと思つて弄つてみたけどよー。滅茶苦茶プロテクトかかつてファイル一つ開けなかったぞ」

「だろうな……それだけ秘密にしたい物がこれの中にはあるのだろう……仕方ない」

麗愛は一人納得し、ニアに向けて記録媒体を投げ渡す。それを慌てて受け取るニアに向けて、麗愛は煙管を手に取り指先で回転させながら言う。

「ニアよ。今からちいと、最下層のほうに行つて来てくれぬか。奴の手を借りるのは腸が煮えくり返るほど嫌じゃが、背に腹は代えられん。代金は奴の言い値でよいと伝えておけ」

まくしたてるように矢次に飛んできた麗愛の言葉に、ニアは信じられないという風に目を瞬かせて彼女を見た。

「良いのかよ？ アンタあいつのこと嫌いだろ？」

「うう……奴のことは死んだ方がマシというレベルで嫌いじゃともしかし腕は確か——そればかりは否定しようのない事実だからのう」
今にも泣きだしそうな表情でニアを睨み上げる麗愛の様子に呆ればいいのか流石はプロと称賛すればいいのか判断がつかず、結局ニアは肩を竦めてしぶしぶと頷いた。

この記録媒体の中身も気になるし、何よりこれに斑目「轟」が関わ

っているというのなら、ニアの返答に否という言葉は存在しないのだから。

「わーった。今から行きゃいいんだろ？」

ポケットに記録媒体を無造作に突っ込み立ち上がると、麗愛は勢いよく立ちあがってデスクに足を乗せ、ニアに煙管を突きつける。

「ああ、マツハで頼むぞ」

「音速の壁超えてんじゃねーか」

呆れながら突っ込みを入れ、ニアは件の情報屋に会いに行くために『魔女の間』を後にした。

——目指す場所はTTB最下層部。アンダーグラウンド地下都市区画と呼ばれる、この塔の深淵。

——パタンツ。

そんな音を残して閉じられた扉を見て、麗愛は暫し何をするでもなくただ口に煙管を銜えて紫煙を吐き出していた。

そして今しがたこの部屋を去っていた少年の背中をふと思い出し、そこに重なる懐かしい記憶にわずかに思いをはせながら、麗愛は煙管の灰を落とす。

新しい脂を入れて指先を弾く。わずかに赤い燐光が迸り、煙管の先端に朱色の熱を灯す。響律式の使い方としてはいささか行儀が悪いが、この部屋からあまり出ることのない麗愛にしてみれば、こうでもして感を養っておかないと響律式自体の使い方すら忘れてしまいそうになる——というのは、やはり言い訳になるんだろうかと苦笑する。

肺一杯に紫煙を吸い込み、それをゆっくりと吐き出す。最早何十年と繰り返された行動。意識せずとも、どのように煙を吐き出せば最適なのかすらも分かり切ってしまった。

肺の中にたまった煙のすべてを吐き出し終わると、麗愛は煙管を

銜え直し、カチカチと歯で何度も噛む。

「——しかし、轟の小僧……一体何をしでかすつもりだ？」

麗愛にとって斑目「轟」とは知らぬ顔ではない。むしろ生まれた日から知っていると云っていいくらいには顔なじみだった。此処五年ばかり——彼が彼の父を殺した日以来、顔を見たいとも思ったことはなかったのだが、

「二度と交わることはない……そう願ってはいた。だが、それは不可能なのだろうとも、思ってもいた」

彼の父は、麗愛の古くからの友だった。故に、友を殺した轟の存在は、たとえ友の子息であろうともその生存を許容できるものではない。

できることならば今すぐにでも轟の下へ馳せ参じ、自らの得物を以てしてその頭をかち割ってやりたい衝動に駆られる。

「が、それは私の役目ではないしのう……」

自分などよりの役がいる。ニアという、最もあの男と相対すに相応しい者がいる。

「私が我が友の子を殺すか……あるいは、ニア（あやつ）が兄弟殺しとなるか……それだけのことか。まあ、どちらにしてもお前がそれを望むことも、許すことも思えないがな……」

そして麗愛は振り返り、壁際に並ぶ棚の一角——そこに置かれた写真立を一瞥し、そこに映る一人の男へと向けて、決して答えの返ってくるはずのないと知りながら問いかける。

「——そうだろう？ 斑目「恭一郎」」

それが、麗愛「マクスティンの古き友であり、

斑目「轟の父の名であり、

そして——ニア「ゲイル」アシュリートの生みの親の名だった。

地上三七〇メートルもの高さを誇るTTB——その深層は、地上の光も霞む地下二三三メートルの位置に存在している。

ほとんど人も住むことのない、この塔のゴミ溜めとすら呼ばれる場所——地下都市区画。

塔の機能の七割以上がこの場所に設置されている様々なエネルギー循環機関によって賄われており、それ故にこの巨大な塔を機能させる機器の排熱量は常軌を逸し、その熱を冷やすための冷却により発生する大量の蒸気が一帯を包んでいる。

「……相変わらず気の滅入る場所だな」

蒸気でほとんど視界を奪われた通路を歩きながら、ニアはうんざりした様子でそう愚痴を零した。

太陽の光がほとんど届かない此処での光源は人工的な明かりのみ。その光が射す足元と記憶を頼りに、ニアはその建物に辿り着いた。ほとんどがニアの身体の何倍もの大きさのある配管や巨大な換気扇——そして足の踏み場もないと表現したくなるほど緻密に配備された配線の群衆の中で、その建物は逆に異質な存在感を持ってそこに君臨していた。

いや、たとえこの建物が上層の居住区画に存在したとしても、この建物は間違いなく異物に見えているだろう。

それは住居と言うにはあまりにも無骨。全体が鉄の壁で作られた建物。鉄製の四角い箱がそのまま巨大化したと思えば想像も難くないだろう——その建物は、正にそう言うものだった。

分厚く冷たい鉄の壁は、長い歳月をここの蒸気に曝され続けた結果鉄錆に覆い尽くされているが故に、まるでこの建物だけが時間に取り残されたかのように残されている。

ニアはその建物の前に立ち、ほとんど壁の錆色と同化した玄関をノックする。

「ヴィル！ ヴィルヘイム！ チャンバー！ 死んでるか？ 死んでんなら返事しろー」

その尋ね方はおかしいと思えるのだが、この建物の主であるヴィルヘイム「チャンバー」に対してはおおむね正しい尋ね方だった。

「……そうですねー。半分ほどは死んでいますヨ？」

扉を隔てているため、僅かに籠った声が返ってきたのを確認したニアは、了承も得ぬままその扉を無言で開けて中に入った。

建物の中は空洞——正方形の空間が存在していた。階段もなければ、他の部屋へ続く扉もない。頭上十メートルほどにある天井と、三〇メートル四方に広がる四角い空間。ただそれだけの場所だった。その場所の四方の壁を埋め尽くすのは巨大な本だなど、その本棚を埋める大量の書物——そして床に四散するその本棚にすら収まらぬまま数メートルの高さに積み重なった本の塔と大量の紙。

知識の埋もれる場——そう比喩的表現ができるようなその空間の中央に、その男は一つの椅子でまどろむように座っていた。

もに付したような漆黒の衣服に全身を包んだ、左目の周囲に十字の刻印を刻んだ——異様な雰囲気を纏う瘦身の男は、闖入してきたニアを一瞥すると、その何処か脱力した表情ににこりと笑みを浮かべる。

「——久しいですね、ニア」

もし、その場に彼という存在を知らぬ者が同行していたのなら、きつとその同行者は全身の毛を逆立てて後退つただろう。

男の声は、とてもではないが男の口から発せられたとは思えない、正に独特の歪さを孕んでいた。

上から。下から。右から。左から。前から。背後から。身体の内側から。あるいは鼓膜を直接的に。あるいは頭蓋に……。

人間は音や声を等しく聴覚で捉えて、それを神経伝達により脳が捉えることでその音声を『聞こえた』と認識する。

それはある意味万物の法則であり、この世の摂理であり、いわば世界の理によって律されたものだ。

しかし、男の——ヴィルヘイム「チャンバーの声だけは、その例に属さない多次元的なものだった。たとえとして最も近いものがあるとすれば、それはおそらく精神感応テレパシーが一番近いものであるうが、ヴィルヘイムの声は脳に直接言葉を伝えるというものとはまた若干異なる。

しかし、それが何であるのかと問われれば、誰であれ明確な回答を口にすることはできないだろう。

そして、その唯一の答えを持っている声の持ち主であるヴィルヘイムは、そのことを尋ねると決まってこう答える。

「人が禁忌に触れる以前、この世に言葉は一つだった——つまり、そういうことだス」

ヴィルヘイムはいつもそう答える。そしてそう言われた者は、誰一人として反論する術を失っていた。

答える気がなくてはぐらかしているのか、あるいは本当に知らないから答えらしいものを口に出しているのかは分からないが、ヴィルヘイムに対して言えることは、とりあえず胡散臭い奴という認識で終了される。

その胡散臭い男を前に、ニアは軽く呆れた様子で溜息を漏らした。

「ババアからあんたの所に行くように言われたんだよ。こいつの解説を依頼だ。言い値で任せる——だよ」

そう言つて、ニアはポケットから取り出した記録媒体をヴィルヘイムに向かって放り投げる。ヴィルヘイムはそれをゆっくりした動作で伸ばした手で受け取ると、けたけたと声を発して笑い、

「彼女にしては実に気前がいいですネ？」

そう小首を傾げながら立ち上がった。

「期日はどうします？」

「出来るだけ早急に——ババアが口にしたわけじゃないが、なんと

なく嫌な予感がするんだよ。だから急いでくんねーか？」

「それはまた、どうして？」

ヴィルヘイムは踊るように室内を歩き回って、空間の一カ所を占拠している本に埋もれたデスクに歩み寄り、そこに設置されて常時演算を行っている端末を操作しながらそうニアに尋ねた。

ニアは率直に答える。

「斑目〓轟——奴が関与してるかもしれない——」

カタカタと端末のキーを叩いていた手が僅かに動きを止めた。ヴィルヘイムがその眼の下に大量のクマを浮かべた双眸でニアを振り返って捉え、首を傾げる。

「あの坊やがです力？ それは確かニ？」

「ああ。そいつを俺に預けた男が、あのクソ野郎に殺されたところを見る——つまりはそういうことだろう？」

「あの小童が自らの手で始末してでも隠したかったことがある——そういうことですネ？」

ヴィルヘイムの答えに、ニアは無言で首肯する。対してヴィルヘイムは満足げに頷いて見せ、目視が不可能なくらいの速度で端末のキーを高速で叩く。

「承りましょウ。あの恭一郎の小倅が何をしようとしているの力、私も興味がありますカラ」

そう言って、ヴィルヘイムはにこりと笑った。ニアは僅かに鼻を鳴らして追うように頷いて見せ、意地の悪い笑みを浮かべた。

「任せるぜ。あのババアが苦虫噛み潰したような顔までしてお前に依頼したんだ。存分に応えてやれよ」

何処かからかうような楽しむような、そんな調子で軽口を叩いたニアに、ヴィルヘイムもくつくつと笑って大きく頷いて見せる。

「了解です。彼女が泣いて悔しがるほど完ぺきな仕事をしてご覧に見せますとモ。

——そうですネ……一見した限り、随分とプロテクトが多く暗号化が若干複雑ですが、この程度ならば一週間もあれば完璧に解読して

見せましよう。解説が終了し次第、麗愛の所に連絡を入れますとお伝えください」

「わーった」

ヴィルヘイムの返答に頷いて見せ、ニアは不敵に笑って踵を返す。

「忙しそうですネ？」

視線を端末の画面からそらさず、ヴィルヘイムはそうニアに声をかけると、彼はおどけた調子で肩を竦めてワザとらしく首肯する。「本当だぜ。面倒臭い仕事ばかり回されっから、働かされる側からしたらたまったもんじゃない」

「ですガ……君を見ている限りでハ、退屈はしていないようですヨ？」

「違うない」

全くその通りだという風に、ニアは複雑そうな笑みを浮かべてヴィルヘイムの言葉を肯定する。

「忙しくて目が回る日々だ。」

学校に行ってお勉強。

喫茶店の接客。

請負屋としての命がけの日々——そのおかげで、飽きも退屈もなかなか感じなくて、これでもかかってくらい充実してやがる。俺のような人間もどき（にんぎょう）にとっちゃあ最高の人生だよおまかせ」

自嘲するように、ニアは何処か哀愁の漂う表情でそう呟く。

そんな自らを貶めるような言葉を口にするニアを見て、ヴィルヘイムはうつすらと、その死人の如き顔色で何処か優美な笑みを浮かべ、あっけらかんと語る。

「たとえ偽物の人生かまかけなのだとしても、その生に君が充実シ、満足シ、その先を望んで生きていくというのならバ、それは決して偽物ではないはずですよ、ニア。」

だからそう悲観しないようニ。人の生は一度きり。たとえそれが人形の生であっても同じこと。君は君が思うように生きればいいので

すヨ。それが……恭一郎の望みですか」

ヴィルヘイムの言葉に、ニアは僅かにその両目を大きく見開き、そして何処か泣き笑いのような表情を浮かべて、

「——本当に、そう……思うか？」

「ハイ、と私は答えましょう」

ニアの問いに、ヴィルヘイムは迷いなく答えた。それが彼の生みの親の願いであると、確たるものであると証明するように。

わずかな沈黙が二人の間に生じる。

ヴィルヘイムの柔和な笑みと、ニアの無表情が向き合い、互いの視線が交錯した。

「……そうか——」

やがて、ニアが小さくそう囁いたのが聞こえ、ヴィルヘイムは満面の笑みで頷いて見せた。

「ええ、必ずですヨ」

その言葉に、ニアは彼にしてはごく珍しい柔らかい笑みを零し黙って頷き返すと、その表情はすぐに普段の顰め面に戻り、まるで何事もなかったかのように歩みを進めた。

「そんじゃ、そいつのことは任せたぜ」

「もちのろんでス！ 君も色々と気をつけてください。君の言葉を借りるわけではありませんガ、嫌な予感がしますのデ」

「お前がいうと洒落にならねーなオイ」

苦虫をかみつぶしたような表情を浮かべながらそう返して、ニアは玄関から建物を出ていく。

残されたヴィルヘイムは端末の画面から視線を一切そらさぬままだった。しかし扉が閉まる瞬間、ニアは確かに彼の声を耳にした。

「——本当に、何事もないことを祈っていますヨ」

ヴィルヘイムのその言葉が、やけにニアの耳に残る。

まるで、これから起きる何かを予感させるような——そんな気がしたのだ。

野外講義のことを遠足などと比喻表現したのは誰だろうか——シエラはいつも下がっている口角をより一層への字に曲げて不満顔を浮かべていた。

現在位置はTTB第三十二階層平原区画——とは名ばかりだと思わざるを得ない。それほどまでに、この場所は殺伐としていた。

目視できる緑の数などたかが知れ、おそらく全体で見てもこの区画における人工の草木など数百メートル四方に存在すると思えばマシなほう——それ以外はほとんど機械や鋼鉄で出来た地面がむき出しとなっている状態だ。

確かに、居住区画の存在しない第三十二階層に多くの人工森林を配置するのは無駄というものだが、曲がりなりにも遠足と揶揄されているのだ。もう少しこう、楽しい場所に行くべきではないだろうかとしエラは思う。

もしこの場にニアがいたのなら、その不満を延々と愚痴っていただろう。その挙句、ニアの口から、

「夢見てんじゃねーよ」

と一刀両断される未来まで克明に脳裏に描いてしまったことをすぐさま後悔しつつ、シエラは何処となく教師陣の物々しさを観察していた。

（なーんか、やけに戦律科の教員が多いね。それに——）

引率として同伴してきた教師たちの数は両手で数えるより多い。

目算しただけで、確か30人以上いた記憶があり、そのうち八割近くが戦律科を担当している教師だ。しかも各々がそれと見て分かるくらいに物々しい装備に身を包んでいる。

形状は様々だが、皆一様に身を包んでいる膝丈ほどあるコートは、シエラに見覚えがあった。ニアがいつも着こんでいるコートと同類の、対衝撃吸収素材で作られた防刃防弾コートの類。そしてあちこちに武装している装柄は最高級分類である響素結晶武器。ヒースクリスウェポン

そんな装備、ただの野外講義の周囲警戒のために持ち出すものだろうか。

そしてシエラを始め、生徒たちが此処に来るために利用した大型の階層移動昇降機の到着口で待ち構えていた集団のことを思い出す。人数としては二〇人もいたかないかだが、あの白銀の外套に青葉と剣の意匠には見覚えがあった。

（あれって……『騎士団』だったよね……？）

記憶の中でまだ新しい存在の名前を思い出し、シエラは何とも表現し難い感覚に見舞われていた。

あれは間違いなく騎士団だった。彼らもまた教師陣と同じように物騒とすら言えるような装備を持ち出して、それを隠しながらではあるが入念に点検しているのをシエラは視界の隅で見ていたのだ。

ただの哨戒で、騎士団がこんな場所にあれだけの人数でいること自体がおかしいのに、その上であれだけの武装をしていたら、それこそ怪しんでくださいと言っているようなものだ。

（……何か起きてる？ 私たち生徒には知らされていないような、なにかが？ でも、それならこの野外講義を中止にすればいいのに……）

だが、そうしない以上自分の心配はただの取り越し苦労なのだろうか。そう考えて、シエラは気づいた。

（——取り越し苦労……もしかして、本当にそれだけなの？ 戦律科の先生たちの武装も、『騎士団』も、単なる行き過ぎたくらいの保健とか？）

頭の中で、幾つもの可能性とその否定が連続して、シエラはうんうんと唸り声を上げながら首を捻らせること数分。不意に彼女は何かも諦めたという風に大きく首を縦に振って結論付けた。

（——聞いた方が早いに決まってるね）

他力本願、此処に極まり。

しかし、この場においてシエラの抱いた疑問に最短距離で回答に至るには、それが確かに正しい選択だった。

暗愚な考えで最良の選択を選んだシエラは、即座に視線を右往左往させて彼を探す。

しかし、その視線は彼の所属しているはずの戦律科の列ではなく、生徒たちが四散して探索や羅調査やらをしている瓦礫の山の上やら、戦律科が戦闘訓練をしている近くの廃墟の屋上などだ。

シエラは彼があんな子供のままごとのような戦闘訓練の場所にいるとは端から思っていない。あの強敵との戦闘中毒者である不遜な後輩が、あんな剣を適当に振るだけで倒せるような機獣しかないような戦闘訓練になど目もくれない性格なのを重々承知していた。

だから、彼がもしこの場にいるとしたら、それは生徒側ではなく教師側——即ち周囲に気配を配って哨戒する警戒担当だろうと最初のうちに推理して彼の姿を探した。

そして——

「……………いた！」

探し人の姿を見つけ、シエラは見つけるや否やすぐに彼にこの疑問を尋ねるべく歩き出す。随分と高い所に上っているが、問題ない。

「木登りは、得意分野——」

語尾に音符が付きそうなほどの楽しげな声音で、シエラはさつそく目の前のコンクリートジャングルの踏破を目指し、最初の一步を踏み出した。

「ほんと、あれじゃガキのごっこ遊びのほうがまだ遠慮がない気がするな……………」

双眼鏡を片手に、ニアは眼窩の様子を見下ろしながらそう一人呟いた。

武器を振る速度。相手の動きへの対処の短慮さ。そして響律式の詠唱速度——どれと取って見ても、彼らのそれは一流にはほど遠い。「せめて逃げ脚だけは一流であってくれよ」

「ふーん……やっぱりそういう事態は想定されているんだね」

皮肉を込めて呟いたニアの言葉に、返ってくるはずもない声が聞こえてギョツと目を剥いてニアは振り返った。

「うんせ……っと」

そこには廃屋によりかかるように高く積まれた瓦礫を伝って、この廃屋の屋上に乗り移ってきたシエラの姿が、「よっ」とでもいう風に片手を上げながらこちらに歩いて来る姿が。

ニアは絶句し、そして叫ぶ。

「あ、あんた一体何してやがんだ！」

その絶叫ともとれる問いかけに、シエラは真顔で、

「君のお弁当を奪いに来た」

そう真顔で返してきたので、今度こそニアは言葉を失って口をパクパクと開閉させる。呆れてものも言えないとはこのことだろうか？ ならば本当に言葉通りなんだな、と半ばあきらめたように納得する彼に、シエラは僅かに微笑んでかぶりを振って見せる。

「冗談だよ。じょーだん」

「アンタが言うのと、冗談に聞こえないんだよ！」

肩を震わせて眼尻を吊り上げて本気で突っ込みを入れるニアに対し、彼女は涼やかな表情で先ほどまでニアの見ていた風景を見下ろした。

そこには熊ほどの大きさの体躯を持つ機獣を相手に、数人の戦律科の生徒たちが陣を組んで対峙している姿があった。

一人が片手持ちの剣と楯を手にして牽制し、それを後衛の二人が響律式で攻撃するという戦闘技巧の初期に教わる戦術で戦っている。それをじっと見つめ、次いでそれをいらだった表情で見下ろすニアを見上げて、一言問う。

「あれに対してのご感想は？」

「本場の実戦に出たら五秒で死ぬ」

そうニアは断じた。対しシエラはやれやれと言った様子で首を振る。

「そりゃあ、君と比べたらねえ」

「俺と比べるとかそういう問題じゃねーんだよ」

「じゃあ、どういう問題？」

すかさず尋ねるシエラに、ニアは面倒臭いという様子を隠す気もなく、しかし溜息とついて渋々と応じた。

「どいつもこいつも、これが結局授業の一環だと安心しきってるんだよ。教師陣もすぐ傍で監督してる——つまり、本当に危なくなったら助けてもらえる……そういう気配が目に見えて分かる」

「どうして？」

「事あることにオッサンに視線が向かってる」

「あー……」

その答えに、シエラも納得した様子で頷き、再び視線を下ろしてよく観察して見れば——なるほど、とニアの指摘に同意する。

生徒たちの動きをよく見れば、前に出て切り結んでいる生徒にしろ、後衛で響律式を展開している生徒にしろ、彼らは一撃一撃を叩き込むたびに監督教師であるゼリクへと、視線どころか顔すら向けているのがシエラにも見えた。

戦闘に、目の前の敵に全く集中できていない。あれでは素人目に見ても隙だらけなのが丸分かりだ。

「相手が俺だったなら、あの瞬間に迷わず切り倒すぞ」

「どうどう」

歯を剥き出しに今にも飛び出して行きそうなニアをシエラは肩を叩いて諫める。すると、ニアは視線の矛先を眼窩の生徒からシエラへと変える。

「それで……アンタ、本当は何しに来たんだ？」

「ん？ 君のお弁当をだね」

「え？ なに？ 紐なしバンジーがしたい？ じゃあ蹴り落としてやるよ」

「女性に対して何たる暴挙……」

「誰だよ、女性って？」

シエラの台詞に何気なく返されたニアの言葉に、シエラは変化の乏しい表情に珍しく怒りをあらわに立ち上がり、ニアに向かつて囁み付かんばかりに叫ぶ。

「なにをー！？ 身長がそんなに偉いのか！ 胸あることがそんなに凄いのかー！」

「誰もそんなこと言ってないだろうに……」

ジタバタと暴れるシエラを横に、最早我関せずと言った様子で双眼鏡に目を通して周囲を見回す。

放置されたシエラは、むむむ……と唸り声を上げ、そんなニアの邪魔をしないように注意を払いながら、

「質問するけど、いいかなー？」

「答えられることならな」

そのかわり、手短に頼むなどシエラを振り返りもせずにつけ足すニアに、シエラは僅かに深呼吸したあと、

「戦律科の先生の数が多いのと、昇降機前で『騎士団』が待機してた理由、知ってる？」

そう尋ねた瞬間、ニアが息を吞んで、双眼鏡から目を離してゆつくりとシエラを振り返った。

そして僅かの逡巡の後、彼はゆつくりと口を開いた。

「……よく、気づいたな」

「何となく、気になったただだよ。でも、君の反応を見たところ、何かあるんだね？」

シエラの確信を得たというその言葉に、ニアは僅かに思案顔を目を僅かに伏せた後、静かにかぶりを振った。

「微妙に違うな。何か『あつたから』あの人数を用意したんじゃない、何か『あれば』すぐに対応できるように万全を期した——だと思っ……しかし、本当に『騎士団』まで動かしたのかよ。何者だ、あのオッサン……」

一人ごちり、そのままぶつぶつと何かを呟いて思考するニアの様子にシエラは彼の話の中に上がった人物——おっさんことゼリク

を見下ろした。

厳めしい面立ちで戦律科の教師と並んで生徒たちの戦いに目を向けているゼリクは、明らかに周囲を警戒しているのだろ。他の教師陣たちと同様、彼も同じように周囲に視線を巡らせて注意を払っているように見えた。

見えた——というのは、何処となくゼリクの様子は、辺りの様子に注意を払って警戒しているというよりも、

(……何かを、待ってる?)

そんな風に、シエラには見えたのだ。

(だとしたら……それはなに?)

僅か。ほんの僅かだが気になってしまい、シエラはそのことをニアに告げようとした。だが、結局それを彼に伝えることはなくなってしまう。

シエラがニアに声をかけようとしたのと同瞬、双眼鏡で遠方に視線を向けていたニアが突如立ち上がり、物凄い形相で視線の先を睨み据えていた。

そして双眼鏡を握っていないほうの手を持ち上げ、指で輪を作るとそれを口に銜え、

——ピイイイイイイイイイイイイイイイイ……………

口笛を鳴らした。

瞬間、下のほうで警戒していた教師たちが一斉に動き出し、他にも廃墟や瓦礫の山の中から武装した集団が姿を現す。皆一様に外套の背中や肩に塔と×字の意匠を宿している。

それは【ザプリユッド】を表す印。

その印を背負った者たちが、次々と手にした装柄に響素を込めて刃を生み出して走り出す。

「アシュリート! どっちだ!」

「正面! 距離五〇〇!」

眼窩からの声に、ニアはただ簡潔に応えて自身も装柄を取り出し、

「――ディアグラム【顕現】」

トリガー起動鍵語を口にし、その柄の先に響素結晶の漆黒の刀身を顕現させて薙ぎ払う。そして此処でようやく、事態の急変を理解したシエラが立ち上がりながらニアのコートの裾を？む。

「ちよつ、一体どうしたのさ？」

「どうしたもこうしたもあるか！ 現れたんだよ！」

その声に含まれていた焦燥の色に、シエラはぞわりと背中を撫でられたような気がした。

それと同時に、ニアの口にした言葉の意味を漠然と理解する。

――現れた。その言葉が脳裏で木霊する。

彼は何が現れたのだと明確に口にしたわけではない。だが、それは確かな予感となつてシエラの中で克明に形を以て脳裏に描かれたそんなことはありえない。常識的に、あの存在がTTBの内部にいるはずがない。

だが、シエラの中でそれはほとんど確信となっていた。

「――ねえ」

だからシエラは、僅かに自分の中に残った否定に従つて、恐る恐ると言つた様子でニアを見上げて、

「なにが……現れたの？」

自分の、ニアのコートを掴んでいる手が震えているのが、そう問いかける声が震えているのが、シエラには分かった。

そんなシエラの様子に、ニアは一瞬だけ息をのんで後退ろうとした。が、それを必死に堪えて、ニアは齒軋りしながら吐き出すように――否、絞り出すような必死な声で、

「――そんなの、決まつてるだろう」

伝えることが正しいのか間違っているのか、それが分からぬが故の僅かな逡巡。だが、真摯なまなざしで見上げるシエラの眼力に気圧されたのか、ニアは忌々しげにそれらが現れた方向を睨みなが

ら、その名前を口にした。

「奴ら——【マモノ】だよ」

呟かれたその存在の名に、シエラは文字通りその顔を絶望の色に染めた。

警備隊の本部の一室。【剣の賢者】の執務室で、グレイアースはペンを走らせる手を止めて黙考する。

（……分らないな）

胸中でそう呟きながら、グレイアースはデスクの上に設置してある端末を操作して、今朝届いていたメッセージに再び目を通す。今朝方自分の端末に送られてきたメッセージ。その内容も色々興味深いことが書かれていたが、要約すれば警備の要請に過ぎない。それだけならば、グレイアースもさして気に留めることもなく仕事の一環として処理していただろう。

だが、そのメッセージには安易に警備要請のメッセージと割り切るには見逃しがたいものがあつた。

「……どうして、この名前が」

グレイアースが着目していたのは、メッセージの本文ではなく、その差出人の名にある。

——ベオルフ・クロウ

差出人の名前の欄に書かれているその名前が、グレイアースがこのメッセージを何度も読み返してしまっている理由だった。

ベオルフ・クロウ。その名はこのTTBにおいて知らぬ者がいないと言っても過言ではないほど高名な——近年において英雄と呼ばれる存在の名前だ。

かつては荒くれ者の集団と恐れ嫌われていた『騎士団』の意識改

革を行い、今の形へと再結成しただけではなく、自ら【マモノ】との戦いにおいて最前線で戦い、三年前の大型【マモノ】グレンデルと壮絶な戦いを繰り広げた果てに、グレンデルと相打ちとなって殉職した前任の【剣の賢者】——それが英雄、ベオルフ・クロウ。

そして、グレイアースの剣術の師でもあるベオルフから届けられたメツセージ。死んだはずの彼から、三年の月日を経て届いたメツセージにグレイアースはおそらくこれまでの人生で一番驚いた。

その彼から届いたメールの内容は、グレイアースの記憶の中にある通りの彼の文面そのもの。必要最低限のことしか書かれていない彼らしい文面。

だがその文面は、『騎士団』を率いこのTTBの治安を任されているグレイアースとしては見逃すわけにはいかないものだった。

信憑性はないが、警戒しておくにこしたことはない——そう結論に至ったグレイアースは、下層のほうに少数ではあるが『騎士団』の騎士を二個小队送り込んでおいた。

（何も起きないのならばそれでいい。だが、もしこれが本当だとしたら……）

それは、ある種の予感だったのかもしれない。グレイアースの中に生じた、何かが起きるのではという微かな予感は、

「グレイアース様！ 緊急事態です！」

副官であるヘルマと共に、現実となつて訪れることとなった。普段から礼を欠かすことのない彼女が、ノックもそこに了承の返事も待たず駆け込んで来た——それはつまり、彼女が口にした言葉通りの緊急事態が生じたということの意味する。

グレイアースはそう判断した。

「報告を」

故に彼女を咎めることはせず、彼は早急に彼女に続きを促す。ヘルマは佇まいを僅かに整えると、あわただし様子で言葉を連ねた。「下層、第三十二階層に配置していた部隊より、第一級緊急事態発生との報告あり。まだ確認は取れていませんが、【マモノ】が出現

した可能性が大きいです！」

「——っ!？」

ヘルマの言葉に、グレイアースは息を呑んだ。

第一級緊急事態。それはこのTTBにおいて最大級の非常事態が発生した際のみ発令される、最優先で事態収拾をしなければいけないことが生じたということだ。

そして、これが適応される事態の要因は、たった一つ。

——【マモノ】。

『星のなく夜』以降、この世界に現れた存在であり、同時にある種の事象と認識される——人類のとしての災い。

人の形に似た、黒い霧のような集合体であり個体。

前世時代の従来の武器では一切が通用せず、響律式の実用化まで人類は一切の抵抗の術を持たぬまま【マモノ】の手により無抵抗に等しい蹂躪に晒されるしかなかった。

ただ存在するだけで、人類にとって災厄となる存在。それが現れた。

しかし、問題はそこではない。

【マモノ】の被害というのは、毎年必ず数十件ほど起きている。そして奴らが現れたとしても、現代は響律式が戦術として確立しているし、響素を集束して武器へと転換する兵器——装柄も存在し、これらを用いて【マモノ】と抗戦する外延部防衛局に十分な戦力が存在する。

故に、ただ【マモノ】が出現しただけでは、ヘルマもグレイアースもここまで緊張することも焦ることもない。

問題なのは、【マモノ】がTTB内部に出現した、ということにある。

約百年前に建設されたTTBの主目的は、【マモノ】の蔓延した大地とTTBを巨大な障壁で遮断し、絶対的な安全の地を齎すとい

うことにあつた。

事実、TTBが生み出されてから百年近く、このTTB内は絶対的な安全の地として君臨し、それを統治する 大樹の葉 の絶対的な権限は此処から来ている部分が大きい。

だが此処十年近くの間に、TTBの絶対的な安全というお題目の実態は徐々に揺らぐものとなつている事実を知る者は少ない。

TTBが【マモノ】に対しての完全な安全地帯である——その前提はとつくの昔に覆されていた。すでに下層——特に七十階層より下では、ほとんど毎日【マモノ】の出現報告が大なり小なり『騎士団』の下に届けられている。

いつ、どのようにして奴らがTTBに侵入したのかは不明だが、現実には【マモノ】は今、徐々にTTBを侵食している。

しかし、それはほとんど人の文いらず、居住区画も存在しない遙か下層の話であつた。故に 大樹の葉 はこの事実に対する収集を後回しにし続けてきた。

(……だが、今回はそんな風にうやむやにできる事態ではなくなるぞ)

近年でも【マモノ】の出現階層は六十八階層が最大だった。だが、今回はそこから三十階層も飛び越えて第三十二階層に出現した——これはTTB始まって以来の重大事件と言っても過言ではない。

「現場に配置した騎士たちは？」

「報告が、即時掃討に向かつております——しかし……」

グレイアースの問いに即応したヘルマが、僅かに言葉を濁す。

「何か問題が？」

すかさず問うグレイアースに、ヘルマは僅かに逡巡して見せた後、言葉を次いだ。

「現場である第三十二階層には、コルプース・アカデミーの学生たちが多数存在しています」

「なんだと!？」

思わず、グレイアースが声を荒げた。

コルブース・アカデミーの生徒がどれだけ三十二階層にいるのかは不明だが、一般人に【マモノ】の出現を目撃されるのは 大樹の葉 としてあつてはならない事態だ。

（急ぎ収集に向かわなければ、大変なことになる！）

「ヘルマ、一番隊から五番隊までを即時集合させる。我々も向かうぞ」

「既に招集をかけてあります。十分以内に完全武装で準備完了するよう厳命済みです」

ヘルマの言葉に、グレイアースは無言で首肯し立ち上がる。

「現場の学生たちの状況は？」

「混乱はあるものの、概ね自己判断で昇降機付近まで退避しているとのことです。あとは戦律科という響律式戦闘技術の教鞭を任されている教師たちが対応しているという報告が上がっています」

「その辺りは流石だが、やはり【マモノ】相手では分が悪いだろう」
幾ら戦い方を教える側にいる人間であっても、対【マモノ】戦闘にそう長けている者がいるとは思えない。

（急がせねばな）

そう胸中で一人ごちるグレイアースだったが、

「それが、何故かその場には教師陣以外の戦力が存在しているように――」

「何？」

続くヘルマの言葉に、グレイアースは思わず動きを止めて彼女を見て、視線で続きを促す。ヘルマもそれを理解したのだろう。小さく首肯して言葉を続ける。

「確認したところ、どうも請負屋集団のようです。数はおよそ二十。全員が対【マモノ】戦闘用に響素結晶武器を装備し、【マモノ】と戦闘中とのことですよ」

「……何処の請負屋だ？」

ヘルマの説明に、グレイアースは部屋を出ながらそう問うた。ヘルマが即応する。

「送られてきた画像で確認したところ、塔を貫く二振りの剣の意匠——【ザプリユッド】と思われます」

「剣の魔女の一派か」

剣の魔女——『騎士団』でその名を知らぬ者はいないといわれるほどの、常軌を逸した剣の使い手として名を馳せる実年齢不明の童女の姿をした人物。その彼女が設立し、屈指の実力を誇る請負屋集団。それが【ザプリユッド】と、グレイアースは認識している。

「彼らは腕も立つし、義理も通す——しかし」

「我々に素直に手を貸すような者たちとも思えません。あの粗野な店主のように」

皮肉を込めてヘルマが言うが、グレイアースは彼女の発言に思わず苦笑した。目の敵にしているようで、何気に彼のことをしかと観察はしていたようだ。

いや、目の敵にしているからこそ気づいたのだろう。あのニアという少年の来ていたコートの肩にあった意匠——あれは間違いなく【ザプリユッド】のものだった。

そして先日出会ったあの桜色の髪の少女。あの娘が着ていた服装はコルプース・アカデミーのものであり、その制服を着込んでいた少女を、彼は「先輩」と称していた。

「彼が手を回したか……そう考える方がいいだろうな。おそらく、彼はTTBの事情にも通じている。【マモノ】の塔内現出のことも知っているだろう」

「だから、万が一を想定して保険を掛けていた——そう思われますか？」

「いや、そう思いたいんだ」

ヘルマの指摘に、グレイアースは微笑を浮かべて答えた。

（……しかし、それが彼ではないとしたら——一体誰がそれだけの準備をした？ あるいは、誰かがこうなるように仕向けた？ しかしそうだとしたら、それは一体何のためだ？）

脳裏に生じた幾つかの疑問。しかしそれを解明している時間は、

今のグレイアースにはなかった。

（考えるのは止そう。今は目前の問題を片付ける方が先だ……）

「ヘルマ、君も準備したまえ。すぐに向かうぞ」

「御意のままに」

そう言葉を交わし、グレイアースとヘルマは長い廊下を颯爽と歩いていった。

もしこの時、グレイアースが自身の中に生じた疑問を後回しにすることなく、【マモノ】の掃討と問題の解決を並行して行っていたのならば、後の未来が僅かばかり変わったかもしれないが——今の彼がそれを知る由もなかった。

次々と草木が芽吹くかのような勢いで地面から湧き出て来る【マモノ】を見据え、ニアは舌打ちしながら長剣を肩に担いだ。

そして傍で呆然とあれらの現出を眺めているシエラの頭を軽く叩く。我に返ったシエラが、両眼を瞬かせて言葉なくニアを見上げた。

そのシエラに、ニアは安心させるように僅かに微笑みを浮かべて見せた。昔、唐突に不安に襲われて震えそうになった時、いつもあの人がしてくれたように——そう意識してニアは僅かに微笑んだ。

しかし、対するシエラは僅かに眉を顰めて、

「ボクは犬猫と同じ扱いかい？」

そう口を曲げて言った。どうやら先日の猫に向けていた笑みと同じように見てとられたらしく、ニアは僅かに呆れた様子でシエラを見下ろして溜息をつく。

「……ああいいか。アンタ、絶対此処動くなよ。今更あの波に乗るのなんて不可能だろ？」

言われ、シエラはニアの言う波を見下ろした。そして「あー…

…」と曖昧な声を発したあと、

「うん、無理」

素直に肯定した。見下ろした先にあったのは、数百人の学生によって生じている人の波だ。誰も彼もが目の前に現れた機獣などよりもはるかに恐ろしく、相対するのも絶望的な存在を前に恐れをなし、昇降機目掛けて殺到する様は、正に波と呼ぶに相応しい。

シエラの言葉に、ニアは微苦笑しながらコートのポケットに手をつ込み、そこから小さな機械を取り出してシエラに投げ渡した。「小型の狭範囲音声伝達機だ。俺の持つてるのに直接繋がる。問題が起きたらすぐに報せる」

「うん、分かった」

ニアの言葉に、シエラは素直に従った。流石に状況を理解しているのだろう。文句も言わず、黙ってその場にしゃがみこむ。

「出来るだけ早く戻ってきてやるから、それまで大人しくしてろよ」
「に、ニア君！」

飛びだそうとしたニアを、シエラは慌てた様子で呼び止めた。飛びだす寸前だったニアは、跳躍する寸前の姿勢のまま振り返って、視線だけで何だ？ と尋ねる。

「け、怪我しないように……」

「はっ、俺がああ程度の雑魚に傷負わされっかよ」

鼻で笑いながら、ニアはそう返して笑って見せた。それを見て、シエラは無表情——ではなく、僅かだが心配そうに目を伏せながらも頷く。

瞬間、ニアが飛び出す。圧倒的な脚力と、対内に宿る響素を意識化の指揮で操り肉体を強化。撃ち出される砲弾さながらに、ニアはぞろぞろと群を成して向かってくる【マモノ】目掛けて飛び込む。

——着弾。

そう思わせるような衝撃を伴ってニアが地面に降り立つ。着地によって生じた衝撃に乗じてニアが長剣を振り抜き、降り立った

場所に存在していた【マモノ】の一体を頭頂から一刀両断。

「うらああああ！」

咆哮と共に、身体を捻って長剣を振り回す。それは剣術とはかけ離れた力まかせの一刀。しかし響素によって形成された刀身は、ニアの 指揮 が支持する力を具現する。

剣身を形成する響素に込められたニアの『斬断』の意志がそのまま具現したかのように、振り払われた長剣の刃に触れた【マモノ】たちがなんの抵抗もなく横一文字に両断された。

円を描くように振り払われた剣によって斬断された【マモノ】が、まるで霧散するかのように塵となって消えていくのを鋭い視線で僅かに一瞥したニアは、剣を天高く掲げ上げて声高らに叫ぶ。

「続け【ザプリユッド】！ 敵が【マモノ】だからって臆するんじゃないぞ！」

『応！』

各所からニアの鼓舞に応える咆哮が轟くと共に、響素結晶武具の剣や槍、斧などを手にした男女が【マモノ】の群れに殺到する。

斬撃に穿突が乱舞し、幾つもの攻撃型響律式が各所で炸裂する。

さらに、

「——ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

巨大な獅子が吠えたかのように、ゼリクが身の丈もあるような大剣を振り上げて【マモノ】の群れへ飛び込んだ。

「行くぞ！ 【戦鬼】ゼリクの アルカ・メイス・バトル 五大の英雄 を受けてみよ！」

大音声で叫ぶと同時に、ゼリクの周囲で大量の響素が渦を巻き——次の瞬間閃光を伴った爆発となって響素が荒れ狂う。

ニアを始め、【ザプリユッド】の面々も、ゼイクに通髓してきた教師陣も突然発生した爆発の衝撃波に顔を覆う。

衝撃が去ると、皆が一斉にゼリクへと視線を向け、そこに顕現した巨大な五つの剣を見て息を呑む中、ニアだけが微笑を浮かべ

た。

「あれが……ゼリク^{オリジナル・コード}アーミーレンドの唯一響律式 五大の英雄か」

——唯一響律式。

それは響律式の一つの奥義と捉える者もいれば、選ばれた者のみ
が使える大いなる力と説く者もいる、普段人々が行使する響律式と
は似て非なる存在。

響律式には大きく分けて二つある。

一つは先に挙げられた、遺伝子内に響律譜を刻み込み、指揮を得
ることで行使できるようにある響律式——これを世に公式響律式と
呼ぶ。

この公式響律式を一般的に響律式という大きなくくりで捉えてお
り、響律式という言葉は、通常この公式響律式のことを意味する。
それとはまた異なり、響律譜を刻み込んだだけでは決して得るこ
とも操る出来ない特殊な響律式が存在する。

響素が世に出で、響律式というモノが確立したのと同時期——あ
る一定の確率で遺伝子内に既に響律式の刻印が存在する者が現れる
ようになった。

本来ならば、響律譜 を刻む者——封刻^{シール}技師の下で刻まれて初
めて得るはずの 響律譜 。それに似て非なる、それぞれ個々で異
なる文様の 響律譜 を宿した者たちは、生まれながらにしてたっ
た一つ、従来の響律式では及ぶこともできない力を持った響律式を
扱うことができた。

そのどれもがそれぞれ独自の性質と効果を宿し、一つとして同じ
力の物が存在しないことから、当時の科学者たちはその響律式を——
唯一響律式と名付けることにしたのである。

そして唯一響律式はその種類にもよるが、たった一人その唯一響
律式を使える者がいれば戦況を一気に逆転できるほど強力なものが

いくつも存在する。

かつてTTB建設案が生じる以前、【マモノ】を退けながら行われた資源戦争で導入された唯一響律式使いが、たった一人で一国を滅ぼしたという事例だって存在する。

それほどまでに、唯一響律式という力の恩恵は凄まじさと苛烈さを誇る。

そして今、ゼリクが発動させた響律式—— 五大の英雄 もまた、そんな唯一響律式と呼ばれるモノの一つであり—— 戦況を覆すほどの力を持つモノだった。

効果は武装の幻実操作。

自身の武器の幻を複数—— 最大数は五—— 生み出し、それを自在に操るという力を持つ。

だが、生み出される幻は幻ではなく、実体を持った幻—— 幻を生み出すというよりも、同じ武器を複数作り出す能力と言ってもいい。そしてその生み出した武器を、己の意のままに操作することができるのが、ゼリクの持つ 五大の英雄 の力だ。

五つの巨大な剣が宙空を舞い、ゼリクの前に立ちはだかる多数の【マモノ】をジューサーにかけた果物のように恐ろしい勢いで粉微塵に切り刻んでいく。

それは最早掃討というよりも一方的な暴力の権化のようにも見える。

周囲が一気に歓声に包まれ、ニアも彼の暴れ具合には舌を巻く思いだった。

（……これが鬼……ね）

ゼリクの猛々しい戦いの勇猛さを垣間見ながら、ニアは背筋がざわめくような感覚に晒される。

その時、ニアの耳に入っていた受信機に僅かな雑音の後、シエラの声が飛び込んできた。

『ニア君、大変だ！』

鼓膜を突き破るほどの大声を直に受け、ニアは声にならない悲

鳴を発した。そしてその場にうずくまりなくなる衝動を必死に堪え、我鳴るようにシエラの声に応答する。

「だー！ うるせー！ なんだよいきなり大声で！」

『後ろ！ 昇降機の近く見て！』

叫び返した文句に返ってきたシエラの声に宿った尋常でない気配に、ニアは早急に振り返り——シエラの言葉の意味を理解し絶句した。

「——なんだ……ありや……」

シエラに言われて振り返ったニアの視線の先——そこに君臨したそれを見て、絶句し、忘我し、言葉を失って呆然とすることを、一体誰が咎めることができようか。

それは巨大だった。

全長として、その大きさは目算四十メートルほど。全身は夜闇のような黒一色。その体内で走る、骨格を現すような雷光。

ニアの様子に何かを感じたのだろう。幾人もの教師や【ザプリユッド】の面々も振り返ってそれを見——皆が言葉をなくす中、ニアが絞り出すように口を開いた。

「——【マモノ】……なのか」

ニアの言葉に、誰もが言葉を失った。

もしニアの言葉が事実だとすれば、それは途方もない事態を意味する。ただでさえ、TTB内部に【マモノ】が現出しているという、あつてはならない事態が生じているというのに、あれほどの大型【マモノ】が現れた——これがどれほどの大事か、その場にいる誰もが意味を純然と感じ取っていた。

教師陣や、ニアを含めた【ザプリユッド】の面々はまだいい。彼らは自分の触手を通じて、その事実を以前から知っていた。

だが、コルプース・アカデミーの生徒たちはそうもいかない。

人の口に戸は立てられない。というように、この事情を知った大樹の葉 が言明しかん口令をしいたところで、情報の漏洩はほぼ免れないだろう。

【マモノ】がTTB内部に現れた——この事実が世に知れ渡れば、これまでの不安定なバランスで保たれていたTTBの治安は一瞬にして崩壊を告げる。

だがしかし、今気にするべきこととはそんなことではない。少なくとも、ニアにとつてこのTTBの治安がどうなろうと、そんなことはどうでもよかった。

ニアが問題視しているのはたったひとつ。

「……あれ、どうやって倒しゃーいいんだよ？」

忘我から戻ってきたニアは、まず最初にそう言った。その言葉に【ザプリユッド】の面々が「こいつは正気が……？」という視線で彼を見た。

「何だ、アシュリート。あれとやる気か？」

ニアの背に向けて声をかけたのはゼリクだった。見れば先ほどまで埋め尽くすほど存在していた【マモノ】はいつの間にかその数を激減させ、残ってる数はそう多くない。どうやらこの男一人で――掃ってしまったらしい。

「この化け物め」

「だが、そんな私でもあれには少々骨が折れそうだ」

五本の大剣を伴い、ゼリクはその厳めしい面に微笑しながら巨大な【マモノ】を一瞥した。

ニアも同じように剣を肩に担ぎ、頬を掻きながら一言。

「まあ、まずは近づくことから始めるとするか」

「なるほど全くその通りだ」

ニアの言に頷きながら、ゼリクは一足先に走り出す。ニアと同じように、対内の響素を操作して肉体強化を施しているのだろう。強すぎる踏み込みのせいで地面に幾つもの大きな足跡を残し、そこに存在していたという残滓も残さぬほどの速さで疾走していった。

それを見送りながら、ニアは呆れた様子で肩を竦めて振り返る。「お前ら、ここの残りは任せた。終わり次第追って来い。たぶんあっちにも溢れてやがるぞ」

そう一方的に告げると、ニアもゼリクを追って地面を蹴った。そして空に舞い上がりながら、ふとシエラのことを思い出し、

「……ついでに回収してくか」

そう思っただけで向かうべき先を変えるために地面に着地し、方向を変えようとした時——ニアは視界の片隅で何かが沸き上がるのを見て、そちらに視線を向けて唖然とする。

「嘘だろ……おい」

流石のニアも、これには今度こそ我を忘れて一人呟く。

一、二、三、四……どんどん——そう、どんどん増えていく。あの大型の【マモノ】が十も二十も、次々とその数を増やして偽りの機械で出来た大地からのそり……と、まるで昼寝から目を覚ましたように身体を起こして姿を現すのを見て、ニアはどうしたもんかと頭を傾げ——そして結論。

「——つくそ！ ようはブツ倒せばいいんだろ！」

苛立ちを吐きだすように叫びながら、ニアは長剣を片手に新たに出現した大型の【マモノ】たちの元へ向かうべく、全身の響素を操り地面を蹴った。

グレイアースとヘルマが『騎士団』を率いて三十二階層に辿り着いたのと、あの大型【マモノ】が姿を現したのはほとんど同時だった。

巨大な身体をもたげ、その黒い集合体は咆哮を發してグレイアースたちを迎えた。

昇降機を出てすぐ、多くの学生たちが我先にと集まったこの場で、誰もが動きを止めてただその暴君の君臨に絶望する中、グレイアースは誰よりも先に【マモノ】へと飛びかかった。

腰に剣帯から装柄を抜き、起動鍵語を呟くと同時に生み出される暗紫色の長い剣身が構成され、剣身が成された両手剣を手にグレイ

アースは「マモノ」へと斬りかかる。

周囲の大気を巻き込み、その刃に触れる全てを切り断つ斬撃が「マモノ」の腕を寸断する。

絶叫が上がる。

同時に、歓声も。

グレイアースの一刀が「マモノ」の腕を斬断したのと同時に上がった数多の声と共に、次いでヘルマも動き出す。

自らの体内に巡る響素を操り、肉体を強化すると同時に地を蹴った。引き絞られた弓から放たれる一本の矢の如く、「マモノ」の胴体部目掛けて彼女は飛ぶ。

そして同時に具現させるのは、彼女の身長をも超えるほど長大な柄を中心に巨大な刃を持つ双頭の剣。

――前世時代最大の異物、ただの響律式使いが唯一響律式使いに対抗するために作られた殲滅兵器にして、対「マモノ」用殲滅兵器――兵器遺品、アイディファクトグングニル。

ヘルマがそれを手にした刹那――刀身が目も眩むような雷光を纏いヘルマの全身を呑み込む。彼女自身が一条の雷閃となり、巨大な「マモノ」の体軀を一刀の刺突の下に風穴を開けて見せた。

正に一撃必殺。

彼女のその様を見ていた学徒たちには、何が起ったのかすら目視で来た者はないだろう。

それほどまでの神技たる響律式の技巧。グングニルと卓越したヘルマの響律式技術の賜物だ。

ヘルマの渾身の突きを受けた「マモノ」は持ち上げたその身体を力なく地面へと倒していき、無数の粒子となって虚空に霧散する。

「見事だ、ヘルマ」

「ありがとうございます」

グレイアースの称賛の声に、ヘルマは僅かに頷いて見せる。そして、彼女の視線は別の方向へ向けられた。

「ですが……」

「分かっている。まだ来るぞ」

ヘルマの視線を追って、グレイアースは自身の剣——フェンリル魔狼を
持ち上げながらそれらを睥睨する。

地面から乱立するように立ち上がってくる巨人——大型の「マモ
ノ」を忌々しげに見上げながら、グレイアースは声を発した。

「行くぞ、『騎士団』の勇士たち！ 我らが騎士としての矜持を示
せ！」

関の声が上がる。グレイアースと共に馳せ参じた六十人からなる
騎士たちが一斉に得物を抜き放ち、昇降機前に集まった学徒たちを
守るように陣を組んだ。

「一番隊は先行。二番隊、三番隊は周囲の掃討。四番隊と五番隊は
この場で防衛に徹せ。行くぞ！」

グレイアースの号令に、各騎士が声を上げて応じ動き出す。

「ヘルマ——」

「いつでも」

すべてを語るよりも早く、ヘルマが「グングニル」を掲げてグレ
イアースの横に並び立つ。彼女の対応の早さに微笑し——すぐに
その表情を引き締めて彼は大型の「マモノ」たちを見上げた。

「しかし、あれだけの数をどうするべきかな」

「正直、対処方法は限られますね」

「このままでは、戦力差で押し切られる。通常の【マモノ】だけで
も厄介だというのに……」

対策案を脳裏でいくつかシミュレートする。だが、頭の中で描か
れた案のどれもが大差あるものではなく、どれも決定的な違いは生
じない。

そもそもに、数百にのぼる【マモノ】の出現などそうそう起きる
事象ではないし、更にあれほど巨大な【マモノ】が複数同時に現れ
た例など今までに一度もなかった。

三年前の大型【マモノ】——グレンデルでさえ、その数はただの一
体のみ。戦闘力だけを鑑みれば、今回現れた大型に比べればグレン

デルのほうが遥かに凶悪な力を持っていた。

だが、今回現れた大型はただ身体の大きいということ以外は通常の【マモノ】と大差ない。

そうグレイアースが考えていた時だ。新たな変化が生じたのは。

「グレイアース様！ あれを——」

ヘルマの声で我に返り、グレイアースは視線を持ち上げて大型を見上げ、絶句。

文字通り、グレイアースは言葉を失った。それはヘルマも同様——否、この場にいる誰もが、今日何度目とも知れない言葉の喪失を味わった瞬間。

響律式使いは、誰もが等しくその視覚で響素の流れを意識するだけで目視することができる。響素は常に大気に漂っているようなものだが、それは一定の現象が生じれば流れを持つ。

そう、たとえば響律式の発動。

術者の意志に応じた響素は、その術者の意志を具現するべく召喚者の周囲に集束する性質を持つ。

それだけならば、グレイアースたちにとって当たり前以前の常識だ。

だが、それを行っているのが【マモノ】だとすれば訳は違う。

「バカな……【マモノ】が響律式を……！？」

異形の災厄であるはずの——ただ力を振るえば人を屠るほどの力を持つ【マモノ】が、響律式を行使する——そんな話は聞いたことがなかった。

眼前で起きている事象に、グレイアースは信じられないもの見ている気分に陥る。事実、それはあつてはならない事態だった。

人類がただ一つ【マモノ】に対抗しうる力の根源である響素が、

【マモノ】の手によって操ることができ——それは最早、人類の

【マモノ】に対する唯一の優位性を失ったに等しい。
アドバンテージ

その場にいる『騎士団』や学徒たちが呆然とする中で、【マモノ】の一体が片手を頭上に掲げて響素を束ねた。

詠唱は？

響素を操るための 響律譜 と 指揮 は？

そんな疑問を抱けた者がどれだけいただろうか。

その場にいた多くの者は、目の前で圧倒的な死の象徴となろうとしている【マモノ】の響律式に目を奪われていた。

『騎士団』も【ザプリユッド】もコルプース・アカデミーの教師や生徒も、個々で【マモノ】相手に奮闘しているすべての人類が、その頭上で渦を巻く響素の巨大さに呆け見上げることしか出来ずにいた。

誰もが悟った。

自分たちは、此処で死ぬ——と。

だが、その僅か後にすべては一転する。

【マモノ】が響律式を発動しようとした刹那——目も眩むほどの眩い閃光がその【マモノ】を呑み込んだのだ。

言葉通り——何処からともなく生じた極色彩の輝きが一帯を一切の陰りなくその光で埋め尽くされた。

大型の【マモノ】も、無数に現出していた【マモノ】も一切の関係なく呑み込んだ光。その光に包まれた瞬間、周囲に存在したすべての響素がその光によって統御されたのを、誰かが見た。

誰か一人だったかもしれないし、あるいはその場にいた全員が見たのかもしれない。

恐怖とは別の——まさに畏敬の念すら抱く純然な力そのものを体現した光に、誰もが呆気にとられる中、光に飲み込まれた【マモノ】たちが、なんの抵抗をする間もなく消滅した。

そう——言葉通りの消滅。

光に吞まれた【マモノ】たちは静かにその動きを止めて、その一瞬後にはまるで霧が晴れるかのように霧散し消え去ったのだ。

そしてすべての【マモノ】たちが消失したのと同時に、第三十二階層全体をも飲み込んでしまっていた光も、まるで最初からそんなものは存在しなかったという風に元の情景へと戻っていた。

誰もが白昼夢でも見たような錯覚に陥る中、人の集った昇降機から離れた場所で、その二人は立っていた。

うちの一人——斑目——轟が我慢できないという風に口元に笑みをたたえ、くつくつと笑っていた。

「見つけましたよ——我らが願を成就させる存在、《天使》」

「しかし、姿までは確認できなかったであろう？」

轟の隣に立つ壮年の男がそう尋ねた。灰色がかった髪を風に靡かせている姿に、轟は僅かに目を見開いて首を傾ぐ。

「おや？　どうなさったのですか？　元の姿に戻っていますよ」

「おそらく、あの《天使》の力によるものだろう。我が響律式を相殺されてしまったようだ。まったく、幻視の術は色々と面倒臭いというのに……」

男は僅かに嘆息したあと、その鋭い視線を轟へと向け、

「それで、この後はどうする？」

「大丈夫ですよ。すでに《天使》の放った響律式に含まれている生命反応は？　んです。後はこれをアカデミーの個人データと照合すれば、すぐにでも《天使》は見つけられますよ」

轟の説明に、男の方は安堵した様子で肩を上下させた。

「ならば、よかろう——では、私は向こうに戻る。それでも忙しい身でな」

男の言葉に、轟は声を発して笑った。

「くはは。確かに忙しいでしょうねー。学校の教師などしていれば、引率も大変です。ですが、それもあと少しの辛抱ですよ、英雄殿」

「——英雄などではない」

轟の言葉を遮るように、男はそう断じた。そして振り返ることなく、聞こえるか聞こえないか程のか細い声で、

「私は——いや、私たちはただの……そう——夢想家だ」

そう自らを称し、男はその場を去って行った。

その姿を見送っていた轟が、やがて堰を切ったかのように高笑いを上げた。

「くくく……くははははは！ ええ！ ええ、そうですも！ 貴方は確かに夢想家でしょうとも！」

轟は笑った。腹を抱えて、空を仰ぎ見て愉快気に笑う。

「神の力を具現させる——そんな考えを抱く貴方も！ そして——神の座を目指す私も！ 確かに夢想家でしょう！ ですが——」

そこで轟は笑いを抑え、大きく深呼吸をしてから、最早この場にいる男に向けて言葉をたむける。

「——夢想家となるのは、貴方だけですよ。ベオルフ・クロウ」
そうして轟は踵を返し、その場を後にした。

Act 3：邂逅も、喪失も、雨と共に

——あの日は酷い雨だった。

全身を打つ幾つもの水滴。それを感じながら、三年前のあの日、人気の失せた路地裏で倒れこんだ。

「……くっそ、ミスったな」

全身に走る幾つもの裂傷。そこから溢れ出すおびただしい出血が体力を奪う。更にこの雨で体温の下がった身体が一層冷えていく。

「流石の俺も……年貢の納め時ってか？」

自嘲するように、ニアは言葉を漏らす。身体が思うように動かなかった。本能的に自分の最後を悟る。

（……ごめん……博士……）

無意識のうちに、心の中で彼に謝った。

せつかく生かしてもらった命を、結局つまらない失敗で亡くしてしまう。自分の命がどうなるうが知ったことではなかったが、生かしてくれた彼に対しては申し訳なさが沸き上がる。

自分が死を望んでいるのか。それとも生き延びることを願っているのかすら曖昧な至高の中、ニアはただ忘我しながら水浸しの地面に横たわった。

（やべえなあ……ババアも……ヴィルも……怒っかなー……？）

不意に脳裏に過った、彼に逃がされた後に出会った彼の友人と名乗る二人の姿に、くはは……と小さく笑った。

ああ、人はこんな状況でも笑えるんだな——そんなことを朦朧とする意識の片隅で考え、目を閉じようとした時だった。

「おい、どうしたんだい？」

温かい光と共に頭上から注がれた脱力気味の声と、やたらと泣き喚く猫の声が、耳朶を叩いたのは――。

三十二階層で起きた【マモノ】の出現という大惨事は、その翌日から瞬く間にTTB内を駆け巡った。それによって生じた情報の錯綜と、居住区各地で起きる暴動——そしてその真偽を問うべく塔民の多くが統括機関 大樹の葉 の総本部に押し寄せるといふ騒動にまで発展した。

絶対に安全とされていたTTBへ【マモノ】が侵入し、それが大量に発生しただけではなく、大型のモノが複数——更には響律式を扱うという突然変異についてもあらゆる憶測が飛び交う中、大樹の葉 からの発表は一切なく、彼らは黙秘を続けている。

最も、大樹の葉 ですらこの事態は予想だにしていなかっただろう。確かにTTB内部の【マモノ】の現出に関しては長年黙秘し続けてきたが、これまで被害らしい被害もなく、塔に住む人間に被害が出ていなかった故の安心もあったのだろう。

それもまた統括機関の惰性と言われればぐーの音も出ない。

しかし、今回ばかりは 大樹の葉 も混乱に陥り、此度の件で話は持ちきりとなっていた。統括機関の重役たちは連日の議会に次ぐ議会で疲弊し、状況への対処と今後の行政や対応に関して長い時間をかけて論議している。

また、TTBの各部門の長である十二賢者もまた、現状への対応に追われていた。特にTTBの治安維持を任される『騎士団』は、連日生じる暴動の鎮圧などでほとんど休む間もなく出勤の連続で疲弊の色を隠せないでいる。

ちなみに、この騒動で一番の被害を受け、更にはこの情報の漏洩となったコルプス・アカデミーはしばらくの間休校措置が施され、生徒のすべてはしばらく外出禁止令が命じられていた。

無用な情報が口々に流れるのを恐れた統制機関の措置だろうか。

あるいはこの件を問題視したアカデミー側の措置かは分からないが、正直大した意味を成していないのは現状が物語っている。

そんな様々な問題の交差によって、現在TTBは未曾有の事態に陥っていた。

「とまあ……あとは似たり寄ったりの情報が錯綜してるな。皆が皆、これまで安全だと思ってたTTBが実は奴らの侵入を許し、大多数が住んでいる二十階層のすぐ下まで来るとなりや——まあ、無理もないが」

「そうか……すまんニア。ともに動けるのがお前くらいしかおらん故に、こんな些細な仕事をさせて」

ニアの説明に、麗愛は微苦笑を浮かべて椅子に深く座り直した。その表情は何処となく疲労の気配を漂わせている。おそらく、彼女もまたこの連日の騒動で【ザプリュッド】を総動員して動いているのだろう。

「別にいいさ……」

それが分かったからこそ、普段は当たり前のように口にする皮肉も悪態も鳴りをひそめ、ニアはただそう一言だけにとどめて肩を竦め、自身もソファに腰を下ろした。

「どの道、いずれはTTBの安全性なんて瓦解するのは目に見えていたことだろ？」

ニアのぼやきに、麗愛は僅かに目を見開いて驚く。が、すぐに納得した様子で肩を竦め、煙管を口に銜えて苦笑した。

このTTBという全盛期の科学の粋のすべてを注ぎ込んで建設した、おそらく歴史上最大の建造物だろう。その構成や構築に用いられた技術も機材も、今の人類の力では再現することはほとんど不可能と言われている。故に、TTB全体の機能に何か問題が生じるような欠陥が生じた場合、これを修繕する力は今の人類にはない。

それ故にTTBの安全性というのはあらゆる意味で砂上の城とも

言える欠陥が多く存在するのだ。

そのことを知っている人間など本当に極少数であり、この少年がそれを知っているという事実は麗愛を圧倒させるには十分だったが、彼女はすぐにその理由を理解した。

「そうか……聞いてるのじゃな、恭一郎に」

「まあ、ある程度は……な。だからあの人は、事あるごとに俺に言っていたよ。『大地を目指せ』って」

「なるほど、奴らしいな」

彼の育ての親——斑目〓恭一郎は、TTBにあらゆる方面で精通している男だった。その彼に育てられたニアが、TTBの問題点を知らされていないと考える方が難しいだろう。

麗愛の記憶の中にある恭一郎という男は、よくよく大地をこよなく愛する男だった。このTTBに移り住んでからも、事あるごとに大地への帰還を夢語り、そのための研究を行っていた。

そんな大地への帰郷を夢想する男に育てられたニアは、その思想を色濃く受け継いでいると言っている。故に、ニアはTTBという存在を根底から快く思っていない節がある。

もっともニアには個人で、大地に変える方法を常思索しながらも、このTTBにこだわる理由が多いので、今もこの地に留まっているわけだが。

ニアが思い出しながら口にした言葉に、麗愛は楽しそうに笑い

——煙管から流れた支援を吸い間違えてむせ込んだ。

「たく……いい歳したバーサンが子供ガキの姿ナリでそんなもん吸ってるからそう言うことになるんだよ」

「うっさいわ！好きでこんな姿しとるわけじゃあないわい！」

ニアの皮肉に、麗愛は歯を剥き出しにして講義する。が、その姿はどうにも昼寝を邪魔された子犬を幻視させる。どうにも彼の周りには小動物を彷彿させる人間が多い。

即座に視線を反らして明後日の方向を眺め始めたニアに、これ以上の抗議は無駄と悟ったのだろう。麗愛は小さく咳払いをした後、

至極真面目な表情を作ってニアを見た。

気配を察したのだろう。ニアもまた、普段脱力気味の表情に僅かな緊張を走らせて麗愛の視線を受け止める。

口火を切ったのは、麗愛のほうだった。

「それで——何が起きたのだ、あの場で。報告によれば目も眩むほどの閃光が辺りを包み、その次の瞬間には全ての『マモノ』が消失——これはただ事ではない」

「だろうな……それで？」

麗愛の問いに、ニアはあくまで知らぬ存ぜぬを決め込むつもりでいた。同時に、それはおそらく叶わないだろうという予感もあった。

自分などよりも百年近い人生経験の差を持つ麗愛を相手に、齡十年そこらの自分の嘘が通じるとは到底思えない。

事実、麗愛はニアから視線を別の方向へ向けた。この部屋に置かれた大きなベッド。本来は麗愛の寝所であるその場所に今居座り、眠り続けている少女へと。

シエラⅡフレッヒエル。

桜色の髪を持つ少女が、そこで静かな寝息を立てていた。

あの騒動の最中、ニアは倒れた彼女を抱えて昇降機とは異なる裏道——TTBの中央塔にある旧作業地の階段を使って十五階層まで昇り、下層で起きた騒動で混乱を起こし始めていた人の中を駆け抜けながら『ザプリユッド』に駆け込んだのだ。

必死の形相で駆け込み、更には青ざめた顔で息も絶え絶えの少女の様子に麗愛も異常を察し、その場ですぐに響律式を以て治療を行った。

そして此処に運ばれて三日過ぎたが、その間彼女が目覚まづことは終ぞなかった。

「お前は知っているのだろう？ あの光が何なのかを。そして、あの状況下で一人だけ連れ出し、昇降機とは全く異なる裏道を通じて此処に駆け込み、挙句あの小娘をかくまうように頼んできた——こ

れでは何かありますと言ってるようなものだろうに」

麗愛の言葉はどれもこれもが的を射ていた。ニアにして見れば、彼女の言葉のどれ一つとて撥ね退ける材料がない。

「ニア。私は問うぞ——その娘は、何者だ？」

そこで畳みかけるように、麗愛は言葉を連ねた。いや、それはただの問いかけでもある。

別に応える必要はない。だが、これだけは聞かせてほしい——そんな意味が込められているように、ニアには感じた。

正直、どう答えたものだろうとニアも思考を巡らせていた。

ニア自身も、彼女のことは多くは知らない。分かっているのは、普段からやたら自分の周りをつろちよろしては動物を愛でようと必死になり、しかしそれが叶わぬまま悔しげに頬を膨らませてお菓子をねだる先輩らしからぬ先輩——それが、ニアの中にあるシエラの認識だった。

ただ、ニアが彼女のことを知っていることが他のあるとすれば——それは一つ。

「ババア……昔、博士から聞いたことはないか？ 攻防を一つとし、更にはその響律式の影響範囲内では絶対な力を持つ唯一響律式……」
「……？ 確かにその話は何度か聞いたことがある。理論上は存在するが、実際は不可能とされる響律式をも上回るといふ、アレのことか？ しかしそれが一体何の関係が——」

唐突なニアの言葉に、麗愛は目を瞬かせて首を傾げた。そしてすべてを言い終えるよりも早く、麗愛はニアの言いたいことの意味を理解し、目を見開いたまま寝所で眠るシエラを見すえた。

「待て……まさかこの娘がそうだというのか？」

「おそらく……な。確信はないが、この間の光は間違いなくそのチビがやったことだ」

あの時、ニアは確かに見ていた。巨大な【マモノ】が響律式を

発動させようとした刹那、それを上回る速度で響素を召喚し、その膨大な量を解放して光へと転化させるシエラの姿を。

シエラを中心に発した階層そのものを呑み込むほどの光量に目がくらむ中、背中に八つの光の翼を背負って数十に重なる術式を展開し、それを余すことなく発動させたシエラ。

（……あんな量の響律式の多重起動なんぞ、人間の脳が焼き切れかねないってのに）

シエラとて響律式使いとしての講義は何度も受けているだろう。

どれだけ強力な力を発現させる響律式であっても、それを扱うのが人間である以上限度がある。

常人が発動できる響律式の数は最大で三つ。訓練を積んだ熟練の響律式使いでも、その最大同時起動術式の数は五つが限界と言われ、史上でも響律式の多重起動数の記録は最大で十。それ以上は絶対にありえないと言われている。

それを超えた数の使用は遺伝子に組み込まれている 響律譜 が耐えきれず暴走を起こし、それだけの術式を演算しようとした脳が負荷に耐えきれず焼き切れて廃人になる。

だが、ニアが見たシエラの起動術式数はそんなものではなかった。

完全に把握し切れたわけではないが、あの時ニアが確認したただけでも数は数十——最低でも五十は超えていただろう。下手すれば三ケタにも上っていたかもしれない——それは最早人間のなせる所業を上回る、正に神の御業などという領域だ。

「マズイのう。それだけの響律式だとしたら、上の連中は躍起になつてでも得ようとするぞ」

「ましてやこの状況だしな……あれだけの大型を一気に殲滅できるとなれば、そりゃあ喉から手が出るほど欲しいだろうよ」

ニアも麗愛も同じ結論に至っていた。もしこの事実が 大樹の葉 やその他の機関に知られれば、大事になることは避けられないだろう。二人の中では、すでにシエラをかくまうことを決めていた。

TTB内部に現出し、響律式を使う謎の「マモノ」。それをたった一撃で一掃した力を持つ響律式が存在する。「マモノ」の存在に怯え暮らす人類が、その力の恩恵を得んとなないわけがない。

「本当に、人間というのは剛が深い生き物だよ。弱い奴らを踏みにじるのは好きだが、自分たちがそうされるのは我慢がならないとはね……」

地球上に存在するあらゆる生物を弱きもの・知恵なきものと淘汰して、この惑星の支配者と君臨しておきながら、いざ「マモノ」のような自分たちよりも強い存在が現れるや否や、その存在を疎み消し去ろうと足掻きもがき、躍起になる。なんとも愚かしい行為だろうか。

「もともと人間ってのはそういう生き物だろーが。他者を下に見て自分を上に置き悦に浸る——本能だろ、ホ・ン・ノ・ウ」

「厭味な奴だのう。お前」

「今に始まったことかよ」

「違うない」

ニアの皮肉に、麗愛はかんらかんらと笑った。つられて、ニアも苦笑を浮かべてシエラを見た。

話題の渦中。そしてもしかすれば今後の騒動の渦中の存在となるかもしれない少女は、静かに寝息をたてて眠り続けている。

そんな少女を見て、ニアはどんな表情をすればいいのか僅かに逡巡したのち、呆れた様子で肩を竦めた。

「たーく、これだけ世の中が混乱に陥ってるつてのに、呑気に居眠りとはね。いつそ呆れを通り越して尊敬するよ」

この男は奇妙にして奇怪な男だと、グレイアースは思う。突然の訪問にも驚いたが、グレイアースにとって、その男の来訪は正直快く受け入れられるようなものではなかった。

「お初にお目にかかります。【剣の賢者】殿」

男——斑目〓轟はゆるりとした動作でこうべを垂れてそう挨拶をした。しかし、どういいうわけかグレイアースには彼の言動が酷く不快に感じられているのだ。

仕草。口調。言動。態度。

何故だろうか、そのすべてに対して、グレイアースはおぞましさを感じていた。まるで人の形をした得体のしれない何かと相対しているような錯覚。

グレイアースは思う。

この男は、何だ？

しかし彼はそのような感情をおくびにも出さず、僅かに口元を綻ばせて見せた。

「いえ、こちらこそお待たせして申し訳ない。轟博士」

そう言つて会釈すると、轟は弱々しい笑みを浮かべて恐縮するようにかぶりをふつて見せた。

斑目〓轟。

グレイアースの記憶が正しければ、確かこの男は彼の高名な人工生命研究の第一人者である斑目〓恭一郎の子息であり、現在では響律式を用いた防衛技術研究の第一人者として活躍している男だったはず。

そのような男が、一体どのような用件で『騎士団』の本部へと訪れたのか。それがグレイアースのただひとつの疑問だった。

無駄な腹の探り合いをするのも面倒だ——そう判断したグレイアースは、即座に本題へと入る。

「それでも、轟博士は我ら『騎士団』にどのような御用向きでお越しになられたのですか？」

「おや、ずばりお聞きしますね。ブレードエッジ卿は」

卿——それはグレイアースにある幾つもの通り名の一つだ。上層出身の彼は、いふなればこのTTBに長年影響力を及ぼす貴族的立ち位置にあり、その長子であり父亡きあとその家を継いだ彼に与え

られた呼称である。

ちなみに、グレイアースはあまりその名が好きではない。そもそもブレードエッジの姓を名乗ることすら、彼は好ましくないとすら思っている。

地位に固執する父と、名声にばかり執着する母の下で育ったグレイアースにとって、あの家は両親の妄執の塊のような場所だった。家名を、名誉を、地位を——そればかりに固執し、息子にまでそれらを得るよう強要していた二人は、グレイアースにとって忌むべき物以外の何物でもなかった。

押し付けられる業と、それを許容する周囲の目にいつも苦しみ続けていた。もしヘルマという理解者が存在しなければ、グレイアースは今この場にはいなかったかも知れない。

わずかに、胸の内が痛むのを辛うじて無視した。

「ええ、貴方も私も、腹の探り合いなどをするには時間が惜しい立場でしょう。私は騎士としての仕事を、貴方は研究者としてそう長く現場を離れている暇などないと、私は考えますので。出来れば用件を早々に教えていただけるとありがたい」

「……なるほど」

グレイアースの言に、轟は僅かに表を下げた眼鏡を指で押し上げる。

「——流石は、その若さで【剣の賢者】にのし上がったただけのことはあるようですね？」

その妙に力強い声を聞いた瞬間、グレイアースは思わず愛剣の柄に手を伸ばしていた。いつでも抜剣——剣身を具現させられるように、そつと指先で腰の剣帯へと添える。

そして……なるほど——と、グレイアースは納得する。

（こちらのほうが本性……というわけか）

先ほどまでの何処か気弱で押しの低い、若い研究者然とした態度

は一変し、うつすらと浮かべた笑みとは裏腹に相手を値踏みするような視線と、隙のない立ち姿。言動の端々に感じる相手を小馬鹿にするような高圧感。

グレイアースは直感する。この男は危険だと、本能的に理解してしまう。

だが、理解できたからと言ってどうこうするわけではない。だが、警戒を怠ることはできなくなったのは確かだった。轟から発せられる禍々しい狂気に、グレイアースの本能はずっと警鐘を鳴らしっぱなしなのだ。

しかし同時に安堵もする。

（この場に……ヘルマがいなくて本当に良かった）

もし彼女がこの場に同伴していたら、おそらく彼女は グングニル を手に取り轟に斬りかかっていたかもしれない。そう思うと、背筋に嫌なものが走る。

その原因は、轟がヘルマに切り殺されるということではなく、ヘルマが轟に殺される情景が脳裏にありありと浮かんできたからだ。

もし二人が切り結べば、十中八九ヘルマが敗北するだろう。

轟の腰に隠す気もなく吊るされた二つの装柄。おそらくは双剣だろうと予想する。その腕の程は分らないが、相当の手練なのはその隙のなさから想像に難くない。

そんな彼の胸中を知ってか知らずか、轟はうつすらと笑いを浮かべたままつくつと声を漏らし、手に持っていた封筒をグレイアースへと手渡した。

「用向きというのはいたって簡単。その中に入っている資料と一緒に添えてある写真の人物を探し出して欲しいのです」

「人探し——ですか？」

本当にそれだけなのか？ という言葉は辛うじて呑み込めたのはきつと奇跡に近い。グレイアースは黙したまま手渡された封筒の中を取り出し、そしてそこに添えられていた写真を見て息を呑む。

（この少女は——！？）

添えられた写真に写っていた人物は、桜色の髪に濃い紫の色をした瞳を持つ少女だった。その少女の姿に、グレイアースは当然だが見覚えがあった。

いや、見覚えがないわけではない。この少女は何の因果が最近になって何度か顔を合わせている。

それと同時に、脳裏に浮かぶのはあの少年。

だが、今はそんなことを考えている場合ではない。

問題は、この男が何故この少女を探そうとしているその理由だ。グレイアースは写真を見据えながら、それをデスクの上に置き、同封されていた資料に目を通す。

そこに書かれているのは、どうやって調べたのかまでは不明だが、少女の詳細な情報がくまなく知りされているように見えた。

彼女の出生。家族構成という法的に調べれば分かることから、アカデミーでの成績や友好関係。彼女個人でしか知り得るはずのない趣味や趣向といったあらゆるすべて。

（どうやって調べた？ いや、そもそも何故、防衛技術研究のトップがこんな一介の学生を探している？）

「私がこの少女を求める理由が、気になるようですね？ グレイアース「ヴェル」ブレードエッジ」

いつの間にかデスクに手を寄せ、身を乗り出すようにしてグレイアースを見下ろす轟がいた。接近されていたことに気づかなかったどころか、気配すらなかった接近に、轟は僅かに驚愕の色でその表情を染めると、轟は満足げに笑って見せた。

「ふはは……冷静沈着そうに見えて、よくよく顔に感情が出ますね、貴方は。なるほど——彼の言う通りだ」

「彼……だと？」

轟が名を上げずに呼ぶ存在——その彼と呼ばれた存在は自分のことを知っている？ グレイアースの中に、自分という存在を「知っている」と言えるほどの該当人物を検索する。

「考えているようですね？　ですが、貴方の考えている中にはおそらく該当する人間はいないと思いますよ？」

轟の言葉に、グレイアースは僅かに目を細める。逆に、轟の笑みは深まる。正に下卑た笑みというに相應しい三日月を浮かべ、轟は言った。

「貴方の脳裏に上げた人物の中に、死人が含まれていれば別ですがね」

その言葉を紡がれた時、轟が何を言っているのか分からず、グレイアースにしては珍しいキョトンとした表情を浮かべていた。

だが、その言葉の意味を知った刹那――グレイアースの表情に戦慄が走る。

「馬鹿を言っな！　そのような世迷言を、この私が信じるとでも思っただか！」

グレイアースが絶叫した。が、轟は僅かに肩を竦めて応じるだけだった。代わりに答えたのは轟ではなく――

「――世迷言ではないぞ」

低い、巖のような厳格な声音。

グレイアースが動きを止めて、声のした方に視線を向けた。そして、その両目を大きく見開き、信じられないという様子でたたらを踏む。

有り得ない。

こんなこと、有り得ない。

グレイアースの心境は、まさにそんな状態だった。

そこに立っていたのは、グレイアースの記憶の中の姿と何一つ変わっていない師の姿。

自分が憧れ、追いかけて続けた背中。そしてついに追いつくことが

叶わぬまま、この世を去ったはずの男。

ベオルフ＝クロウ。

その男は、そこに立っていた。

それだけなら、それだけならばグレイアースにとって喜ばしいことだった。感動の再会——そう呼ぶに相応しい再会だっただろう。

だが、現実はそうではなかった。

グレイアースの目に映ったその情景は、それこそグレイアースの知るベオルフならば決してありえぬ暴挙。

無表情のまま入室してきた、彼の右手に握られる真紅の長剣。何故それを構えているのかなど一瞬生じた疑問は、扉が完全に開かれて彼の姿全体があらわになった瞬間、口にする必要すら失せた。

彼の左手に？まれているそれを見た刹那——グレイアースは声の限りでその名を叫んだ。

「——ヘルマッ！？」

白銀の外套も、雪のように白かった肌も、空のように眩かった蒼髪も、彼女の流したのであろう血の色によって赤く染め上がっているヘルマの髪を、ベオルフは無造作に？んで引き摺っているその姿を見たグレイアースの動きは迅速だった。

いや、それは思考して対応したのではないだろう。ただ感情に任せた本能的挙動。

故にそれは考えて動くよりもはるかに早い。

この状況で、彼が何をしたのかは明白だった。

たとえ彼が自身の恩師であろうと、尊敬していた相手であっても——それでも譲れぬ者があるとすれば、それは間違いなく常に自分の傍らで助力してくれていたヘルマに他ならない。

その彼女を傷つけられた。

それも、尊敬していた男の手によって。

だからこそ、グレイアースは、

「ベオルフ」クロオオオオオオオオオオオオオオオオオウ！」

かつての師の名を怒りと共に叫びながら 魔狼 を抜剣した。瞬間的に構成された響素結晶の剣を手に、グレイアースは感情の爆発に乗せて肉体内の響素を操り一歩で間合いを詰めてベオルフへと迫る。

だが、それよりも早くベオルフが動いた。

手にしていた剣を手放し、懷に手をつ込みながら左手で引き摺っていたヘルマを持ち上げて立てのように翳し、同時に右手を抜いてその手に納めていたそれを彼女へ突きつける。

「なっ!?!」

剣を振り下ろそうとしたのと同時に、グレイアースは声を発して動きを止めた。

そんなグレイアースに向けて、ベオルフは表情を変えずに告げる。「一人の男として、よくぞ止めた。だが、一人の騎士として、それは失敗だ」

その言葉に、グレイアースは悔しげに表情を顰めた。次の瞬間、グレイアースの身体が大きく傾ぎ、床に顔から叩きつけられる。

「この状況、この期に及んで説教とは、貴方も随分と教育熱心になったものですねー」

振り向けば、そこには地震を踏みつけて呆れたような笑みを浮かべる轟がベオルフにそう問うていた。

「教師を三年もやっている、説教臭くもなるものだ」

大した感慨はないがな、と付け足しながら、ベオルフはグレイアースを見下ろした。すかさず問い正そうとするグレイアースに対し「何故? などという陳腐な問いは止してもらおうか」

そう先手を打たれ、グレイアースは鋭い視線でベオルフを見上げるも、彼はそんな視線を気にも留めずに、ただ無感動に告げた。

「轟の話は聞いたな。ならば即座に騎士たちを動かさ、あの娘を探

し出せ。さもなくば、この娘を殺す」

「なっ!？」

ベオルフの言に、グレイアースは絶句する。そして同時に、ベオルフならば必ずやるだろうと理解し歯ざしりした。

(一体……何がどうなっている!?)

死んだと思っていた前任の【剣の賢者】が生きており、今自分を踏みつけている男と結託をして何かをしようとしている。

ならば一体、なにをしようとしているのか?

「知りたいか？」

まるでグレイアースの考えが読めているかのように、ベオルフがそう問いかけた。グレイアースはベオルフを見上げ、忌々しげに表情を歪めながらも視線で肯定する。

「——すべては、このTTBの安寧を守るためだ」

「なん……だと?」

ベオルフの言葉に、グレイアースはそう疑問を口にした。それに答えたのは、ベオルフではなく轟だった。

「つまりはですね——」

もったいぶった様子で轟はそこで言葉を区切り、睨み上げるグレイアースの様子に満足げな表情で頷いて見せた後、彼は大仰な動きで両手を広げていった。

「ちよつと大がかりな装置を使って、このTTB全体を防衛するための、響律式を応用した障壁を形成するんですよ。そのためには、《天使》と呼ばれる特殊な存在の力が必要不可欠でして、我々は長年それを探し続けていたんです。そして、それを先日ついに突きとめることに成功したんですよ」

「そのお前たちの計画と、あの写真の少女が何の関係がある?」

すかさず、グレイアースは問うた。彼らの返答は何となく予想できるが、それでも尋ねずにはいらなかった。

下手をすればあの少年——ニアや、その後ろにいる【ザプリュッド】とことを構えることになりかねない。あの猛者ぞろいの連中

との交戦は出来るだけ避けたいというグレイアースの願いは、いとも容易く裏切られることになるが。

そんなグレイアースに向けて、轟は満面の笑顔で答えた。

「彼女がこの計画の要——即ち《天使》と呼ばれる存在なのですよ」
そう告げた轟の言葉を引き継ぐように、ベオルフは言った。

「我らが大願——《天上の御力》^{ガブリエル}の完成のために、その娘——シエラ・フレッチェルを一刻も早く見つけ出すのだ」

さもなくば……その言葉の先は言わずとも分かった。

グレイアースはただ悔しげにうめき声を漏らし、頷くことしか出来ずにいた。

しとしとと振り続ける窓越しの雨を、ニアは口をへの字に曲げてそれをただ見上げ続けていた。

ニアにとつて、いいことがあつた時も悪いこともあつた時も、そつという記憶には常に雨が付きまとつていた。

そう。たとえば育ての親である恭一郎を失つたあの日もまた、今日みたいな雨の日だったと不意に思い出し、ニアは顔を顰め——そして眼窩に現れたそれを見て立ち上がる。

「ババア、表に客が来てる」

ニアの言葉に、椅子に座していた麗愛が煙管の灰を落として立ち上がりながら問う。

「ほう。今時分に此処に客か？ 一体何処の誰だ？」

「そんなの見りゃ一目瞭然——」

ニアは腰のベルトに吊るしてある剣帯から装柄を取り出して献身を形成しながら答えた。

「——『騎士団』の連中さ」

「それはまた、偉いお客人だな。お帰り願おうかね？」

麗愛もまた、壁に掛けてある長刀を手に取り、鞘走らせてその長

い刀身を抜き身にながらにこやかにいうと、ニアは「そいつは無理だろう」とかぶりを振り――、

「来るぞ！」

そう叫ぶのと同時に、階下から騒音が轟いた。麗愛がデスクの上にあるマイクを手にとって叫ぶ。

『総員戦闘態勢！ 相手が騎士様だからって遠慮はいらんぞ！ 叩きのめせ！』

「ババア！ 正面の壁！ 響律式だ！」

「なんじゃと！？」

麗愛が素っ頓狂な声を上げると同時に、麗愛の部屋の通りに面した壁が膨大なエネルギーを叩きつけられて爆散した。

ニアと麗愛が即座に響素を操って障壁を展開し、破碎された壁の破片とエネルギーの余波を弾き飛ばす。

「わ、私の部屋が！」

「泣くのは後にしろ！ ほれ、客がきやがった」

まだ粉塵で視界の開けていない中を、何人もの武装した騎士たちが飛び込んでくる。

「貴様ら無傷で帰れると思うなー！」

それらを出迎えた麗愛が、自分の身長より遥かに長い刀を手に疾駆する。その速度の余り、周囲を覆っていた粉塵が麗愛の巻き起こした風圧で吹き飛ばされていくのを見て、ニアは呆れた様子で肩を竦めた。

「相変わらず速えな、オイ」

気づけば麗愛は飛び込んできた騎士たちを初太刀の一撃で武器折りし、返す刀でそれぞれの手の建を切り、次に下段に薙いだ一刀で足の建を断ち切った。

「破っ！」

追撃で放つ、渾身の薙ぎ払いが騎士たちの胸を払う。

峰が返されているため身体が輪切りになることはなかったが、その小柄な体躯によって放たれたとは思えない重圧な一撃を受けた騎士

たちは二階から外の街路へと投げ落とされ、そのまま意識を飛ばして落下していくのを見送ったニアは、一人の騎士の頸を剣の柄頭でかち上げ、右から迫ってきた騎士の側頭部を蹴り飛ばしながら黙祷を捧げた。

「ディアーム・ジエム・バッフェ……イ・ルイン・シギリハム——
ザ・ライトニング
ほとばしるもの」

響素を束ね、ニアは祝詞を口にして響律式を発動させた。意識下で発動できる響律式だが、口頭詠唱を行った方がその威力は大幅的に上昇する。

翳した左手の先に生じた光陣からほとばしる幾つもの雷光が鞭のように四散八散して、飛びこんできた騎士たちを襲い返り討ちにす。当然騎士たちも響素で生み出した障壁で防御するが、ニアの放った響律式に込められた意志によって簡単に貫通され、全身を稲妻で貫かれて意識を飛ばしていた。

だが、倒しても倒しても騎士たちはなんとかの一つ覚えのように次々と開けた穴から飛び込んできては、麗愛とニアの手によって押し戻されていく。

「くっそ、人海戦術ってのは相手するとつくづく面倒臭い！」
すでに倒した騎士の数は二十を超えた。麗愛の倒した騎士と合わせれば五十近く。騎士の総員が確か万人近くいたなと頭の片隅で考えながら、ニアはまた飛び込んできて剣を振り下ろしてきた騎士を受け止めて鏑競り合う。

その時、背後に衝撃が走った。

「なっ!?!」

「今度はなんじゃ!?!」

二人して声を上げて振り返れば、そこには天上に穴が開いており、そこから一人の男が飛び降りて来て麗愛の寝所で眠るシエラを抱え上げている姿が見えた。

「ちい——!?!」

注意を正面に集中させている隙に上からの奇襲というのはよくあ

ることだ。にも拘らずそのことを忘れていた自分の暗愚さに舌打ちしながら、ニアは目の前に騎士の顔面に拳を叩き込んで殴り飛ばすと、即座に踵を返してシエラを抱えている男へと飛びかかるうとした。

だが、それは上から降りてきた十人以上の騎士によって阻まれる。「邪魔すんじゃねー!」

怒号と共に、ニアが剣を振るう。大気中の響素を操り、剣を振るうのと同時に周囲の空気を圧縮し、無数の風刃が騎士たちを襲う。対する騎士たちは、響素結晶の剣を掲げて、更に剣に障壁を纏わせることでニアの斬撃を凌ぐ。吹き飛ばせたのは僅かに三人。

残った騎士たちはニアの一撃を凌ぐのと同時に体制を変えて一斉にニアへと斬りかかった。

「くそっ」

一人の腹を蹴り飛ばしながらそれを足場とし、ニアは大きく退きながら奥の騎士を一瞥する。

あの出で立ちにあの髪の色。騎士の中で該当する人間など、一人しかいなかった。

「テメエ、グレイアース! 待ちやがれ!」

その呼びかけに、騎士——グレイアースが僅かに動きを止めたが、しかし振り向くこともなくシエラを抱えて粉碎された屋根の上へと飛び去っていく。

去っていくグレイアースの背を忌々しげに見上げながら、ニアは力まかせに剣を振り抜いて騎士たちを圧倒する。が、いかんせん数が多すぎる。

倒しても次々と現れる騎士たちの姿に、ニアは齒軋りしながらどうにか突破しようとあがく。

刹那、麗愛が叫ぶ。

「ニア、合わせろ!」

麗愛の叫びに、ニアは僅かに視線を向け——彼女の周囲であらぶるように渦を巻く教組の流れを黙視し、彼女が何をしようとして

いるのかを即時に悟るや否や、

「応！」

叫び、自らも周囲の響素を集束。麗愛の形成している響律式に合わせて自らも指揮を構成し、連結させた。

二人の生み出した異なる響素の流れが絡み合い、まったく異なる一つに式へと変異する。まるで様々な音が混じり合い、絡み合い、調和して生み出される合唱の如く、ふたつに響素の塊は一つの術式へと昇華されて具現する。

デュエット・コード
二連立響律式——ザ・デントベスト 雷の嵐。

麗愛の生み出した響律式、吹き荒ぶもの（ザ・ウィンド）と、ニアの生み出した ほとばしるもの。ある一定の響律式を異なる響律式使いが同時に発生させ、それらを同時発動させる際に互いの響素を連結——融合させることで発生させることのできる上位響律式の一つ。

二人の同時起動によって発生した 雷の嵐 は文字通り周辺の大気を一気に集束させ、巨大な嵐を発生させて二人を取り囲む騎士たちを容赦ない風刃と雷撃を浴びて上空に打ち上げられる。

落下の際着地を失敗して死ぬ可能性も無きにしも非ずだが、二人がそんな配慮をするような常識に溢れていれば、そもそもこんな巨大な嵐を発生させる響律式など使わないのでご愛敬。そしてご愁傷様と言ったところか。

文字通り周囲の騎士を一掃した二人。だが、懲りずに騎士たちは再びなだれ込んできた。

「ニア、先に追え！ こ奴らの目的は私らを此処に足止めすることだ！」

「わーってるよ！」

麗愛がすべてを言い終えるよりも早く、ニアは天上に開いた穴から屋上へと飛び出して周囲を見回す。

響素で強化した視力で遙か遠方を黙視し、去っていく銀髪の男の姿を辛うじて捉えた刹那、

「逃がすか！」

ニアは叫びながら、響素で強化した脚力の限りで地を蹴りその後を追う。

こちらに向かって降りてくるグレイアースの背後を見て、外延部のすぐそばにある展望場で待機していた轟は仕方がないな、とでもいうように苦笑しながら、

「おやおや……いらぬおまけがついてきてますよ、グレイアース君」
そう言って彼を追ってきた少年を一瞥した。

金か茶か判断に迷う色の髪をした、黒衣に身を包んだやたら目つきの悪い少年だ。だが、どういうことだろうか。轟はその少年を見た瞬間、どうにも表現し難い感慨に見舞われた。

地に降り立った少年は、グレイアースを見て、次いでその背の向こうに見える轟とベオルフを見て目を見開く。

「ほう……アシュリートか」

隣に立っていたベオルフが、感心とも呆れともつかない嘆息を漏らした。どうやら顔見知りではあるらしい。

「もしかして……貴方の教え子ですか？」

「アカデミーで、少しな……」

骨のある若造だよ、と続けるベオルフの声音は何処か楽しそうだが、それも一瞬のことで、彼はその厳めしい表情をまるで鋭利な刃を思わせるような気配を漂わせて、装柄を抜いて剣身を形成する。

深紅に染め上げられた両手長剣が彼の手に納まると、ベオルフはグレイアースを押しつけて少年の前に立ちふさがる。

「どきやがれ！」

少年は怒号共に飛び出した。思い切りのいい遠慮なしの踏み込み。ベオルフの眼前へと迫る寸前で身体を捻り、その長い剣の性質を生かした遠心力を乗せての薙ぎ払い。

なるほど、あの剣にあれほどの速さと重さを乗せれば、一介の騎士であっても容易に退けることはできるだろうと、轟は徳新が言った様子で頷く。

だが、それが一介の騎士であればの話だ。

少年の一撃は、ベオルフがただ剣を構えるだけで簡単に弾かれる。少年の表情にわずかに驚愕の色が浮かぶ。

しかし、少年は冷静だった。防がれた次の瞬間には剣を引き、その引いた際に生じる力を利用して飛び上がりながら上段蹴り。響素を集束し、威力を遥かに高めた蹴打。

が、それもベオルフの持ち上げた左腕が受け止め、纏っていた響素はベオルフの束ねた響素によって相殺される。

そして、

「ぬうん！」

ベオルフが裂帛の気迫と共に真紅の剣を少年目掛けて振り下ろした。

大気はおろか、眼前の空間ごと両断するとすら思える神速の斬撃——少年は辛うじてそれを翳した剣で受け止めるが、剣圧と共に少年を襲う衝撃までは防ぎきれず、少年の身体は大きく吹き飛んで背後の外延部障壁に激突した。

大量の粉塵が巻き上がり、障壁が凹んでしまっている。

一歳の遠慮のない一撃に、轟は思わず失笑する。

「いささか、やり過ぎではありませんかねー？ 相手は一介の請負屋ですよ」

「そうであつたなら、どれほどありがたいだろうな……」

轟の言葉に、ベオルフは視線を逸らすことなくそう応じた。視線を吹き飛ばした少年のいるであろう方向に向けたままのベオルフの様子に違和感を覚えた轟が、視線を彼から未だ晴れぬ粉じんの向こうに向けようとし——その粉塵を突き破るように飛び出してきた少年の姿に目を剥く。

その動きがあまりにも早く、轟はおろか、ベオルフですらうめき

声を漏らしながら対応しようとする。

だが、少年の狙いはベオルフではなかった。

少年は長剣を肩に担ぐように構えながら、ベオルフの脇をすり抜けてその背後で傍観を決め込んでいた轟へと襲いかかったのだ。

「斑目〓轟iiiiiiiiiii！」

鬼気迫る咆哮と共に振り下ろされた剣の一撃を、轟は寸での所で具現化した双剣で受け止める。

重い――圧倒的な圧力の込められた渾身の斬撃。それを受け止められたのは運が良かったとしか言えないだろう。唯一響律式を使う間もなかった。本能に任せて抜剣しなければ、おそらく自分は今頃真つ二つに切り捨てられていただろうと思うとぞつとする。

「ぐううう！」

「らああああああああ――があっ！？」

そのまま轟の双剣ごと両断しかねない気合の声が途切れる。背後からベオルフが拳の一撃で少年を地面にたたき落としたからだ。

少年が地面に叩きつけられるのと同時に、轟は飛び退いて少年から距離を取った。久しぶりに生きた心地がしない思いをした轟は、双剣を納めながら少年を見下ろす。

「まるで……獣のようなガキですね」

轟が考えるよりも先に口にした言葉に、ベオルフは同意するように頷いた。

「違ういな。お前自身、そう思うだろう？ アシュリート」

「ぐう……テメエ……俺のことを知ってるみたいに話してんじゃねーよ」

もがきながらそう吐きだす少年に、ベオルフは失笑した。

「ついこの間もお前と顔を合わせていたではないか。分からねののか？」

「なんのことをだ！ 俺は死んだ英雄と顔見知りになった覚えは――」

「――」
叫ぼうとした少年の言葉が、そこで止まった。振り返って仰ぎ見た先にあったベオルフの顔は、寸前までの灰色がかった髪ではなく、白髪の混じった金髪となり、顔立ちまでもがどこか別人へと変化していた。

そして、その顔を見た少年はしばらく言葉を失ったあと、徳新が言ったという様子で歯をむき出しにして笑った。

「ああ、そうか……アンタの唯一響律式の本質は、幻を操る――ああ、そういうことか！ゼリク・アーミレンド！」

少年の言葉に、ベオルフは大仰に頷いて見せた。

「そうだ。ゼリク・アーミレンドとは仮の姿。我らが大願のための核を見つけるための……な」

彼の顔が、再びベオルフのものへと戻る。変化する瞬間は初めて見たが、なるほど確かに幻を見せられたようなものだとも内心で轟も納得する。

「核……見つけるため……」

不意に、少年が一人ぶつぶつと何かを呟きだした。轟もベオルフも、少女を抱えているグレイアースすらも彼を見下ろす中、彼は唐突に目を見開いてベオルフを見上げた。

「――あの【マモノ】も、全部そのためにあんたが用意したってわけか」

「なっ!?!」

「ほう……」

少年の発した言葉に、グレイアースがその表情を驚愕の色に染める中、轟は感心したように少年を見下ろした。まさかあれだけのヒントでその事実まで辿り着くとは思わなかった。粗暴な見た目に反して、随分と頭も回るらしい。

彼の指摘したことは事実だった。

あの三十二階層の【マモノ】襲撃事件は、轟が提案し、ベオルフが実行したものだ。三年のうちに少しずつ【マモノ】を捕獲し続けていたベオルフは、轟の提案から大願の核となる《天使》をいぶり出すためにあれほど大がかりな事態を引き起こしたのだ。

その際に生じる被害や、その後のTTBの治安の乱れなどは考慮していない。すべては自分たちの目的を果たすために必要なことだったのだから。

しかし、まさかこんな粗野な少年にそれを看破されるとは想定していなかった轟としては、流石に驚かずにはいられない。

隣で言葉を失っているグレイアースは、激怒した様子でこちらを睨んでいた。だが、あのヘルマという副官が人質となっている以上、彼が抵抗することはまずあり得ないので捨て置く。

この少年に関してはどうしたものかと考えようとした矢先、轟の耳朶をその名が叩いた。

「よく分かったな……流石はあの剣の魔女の弟子のことだけはある——ニア・ゲイル・アシュリート」

ベオルフが何気なく口にしたその名を耳にした瞬間、轟の全身に戦慄が走り、その視線が少年——ニアへと向けられた。

轟は、その少年を知っていた。

今から五年近く前、まだ父である恭一郎が生きていた頃。彼の研究所の培養槽の中にいた幼子。

白金色の髪に真紅の双眸——そしてニア。

それらのピースが符合し、轟は徳心が言った。この少年は——

「……やはり、生きていたのか……人工生命——出来そこないの人間形」

「ああ、テメエをぶつ殺すために。博士の仇を取るためにな！」

轟の言葉に、ニアは這い出すようにそう返した。そして自分を踏みつけていたベオルフの足を振り払うと、手放さずにいた剣を握り直して轟へと斬りかかる。

だがその剣捌きは先ほどと比べればはるかに遅い。すでにベオル

フの剣を受け止めた時点で限界にきたしていたのだ。

「ならば、今度こそ死ね！」

轟が双剣を抜き払い、ニアの剣を左の剣で凌ぐと、右の剣で胴を払った。

刃が肉を断ち、鮮血が吹き出す。

そのまま声もなく倒れ伏したニアに、轟は吐き捨てるように言った。

「所詮守られてばかりの人形。このまま何も守れぬという現実を噛み締めながら、惨めに死ね」

そして値に横たわるニアの身体を蹴り飛ばし、その動かなくなった身体を展望場のはずれ——外延部から蹴り落とした。

「これならば、たとえ人より頑丈な人工生命でも生きてはいられないでしょうね。さあ、引き上げましょう。あとは彼女を核として装置を起動させるだけです。急ぎましょう。これ以上の邪魔はごめん被りたい」

「うむ……ゆくぞ、グレイアース」

轟の言葉にベオルフが頷きそう促した。見れば、グレイアースは怒りと憎悪と後悔と——様々な感情の入り混じった表情で自分たちを見ていた。

そして、絞り出すような声で問う。

「貴方たちは……何処まで——」

「何処までも——ですよ。グレイアース君」

グレイアースがすべてを言い終えるよりも先に、轟はその問いに応えた。

「私の願いを成し遂げるためならば、どれだけの人間が死のうが、どれだけの人間が嘆こうが、私はやって見せますよ。ええ、それこそ、悪魔と契約を交わしてでも——ね」

そう言って、轟は屈託のない笑みを口元に浮かべて歩き出す。ベ

オルフもそれに並んだ。

その背中を、グレイアースは哀しげに見据え、悔やむようにうめき声を漏らしながら歩き出す。

——だから

だから、誰も気づいていなかった。

眠っているはずのシエラの手が、わずかに外延部のほうに延ばされ——その指先がほのかな光を放っていたのを……

——楽しい記憶の始まりは、いつだって彼がそこにいた。

ニアという名前をくれたのも、楽しいことも哀しいことも、笑うことも泣くことも、彼が教えてくれた。

培養槽の中で生まれ育ったニアにとって、父や母という者は存在しない。だが、もし父という者が存在するのなら、きっと彼のような存在のことを言うのだろうと思った。

彼が何を願って自分を生み出したのかは分からない。でも、それはニアにとつてどうでもいいことだった。彼に望まれ、生を受けたい——それだけが、培養槽の中で育ったニアにとつてのすべてだった。

時々、彼が謝ってくることがあった。

済まなかった。

許してくれ。

私たちのエゴなのだ。

彼が泣きそうな顔でそういうたびに、ニアは首を傾げた。一体彼が何故謝っているのか。どうして、自分に向かって謝るのか。その意味が分からないニアにとって、彼のそんな姿を見るたびに泣きそうになったのを覚えてる。

時々、眼鏡をかけた青年とも少年ともつかない、その狭間に佇むような年層の人物が現れる。

轟——と、彼は言っていた。

轟は、時折この部屋にやってきては彼と口論になっていた。短い時は数分、長い時は一時間以上も彼はこの部屋で彼と言いつ争っていた。

そして最後には必ず轟のほうを何かを吐き出すように捨て台詞を

残して去っていく。

その時、彼は必ず自分を見上げて、殺意にも似た視線でニアを見ていた。

そして彼は、その都度に言う。

「この人形が――」

と。

ニアは、あの視線がとても嫌いだった。

そしてそれ以上に、彼の口にする人形という言葉が嫌いだった。

ある日、それは本当に唐突に訪れた。

彼が腹部に怪我を負って部屋に入ってきたのを見て、ニアは我を忘れて彼を呼んだ。彼は額にたくさんの脂汗を流しながら、それでも普段と同じ笑みを浮かべて培養槽に歩み寄ると、端末を操作して培養槽の中の培養液を排斥した。

一分もしないうちに培養槽の中の液体は空になり、培養槽を固定していた機械が起動音を鳴らしながら動き出す。

プシュー……という空気の圧縮されて吐き出される音がしたコアと思うと、唐突に培養槽の障壁が解放され、ニアは初めて自分の脚で地面を捉えた。

「――博士！」

あの時、確かにニアは彼を呼んだ。いつもそうしているように、だが、いつもよりもたくさんの緊張と困惑を孕んで。

彼は傷を負った腹部を抑えたまま、反対の手でニアの頭を撫でた。

「此処から……お前を逃がす」

言葉の意味が、良く分からなかった。

まだ知識の足りないニアには、彼の言っていることが上手く理解できなかったが、ただ彼の身に危険が及んでいるというのだけは分かった。

彼はニアが喚くのを必死に宥めながらその手を引いて長い廊下

を歩いた。

「最下層——そこに行くと、大きな鉄の箱がある……そこに……ヴイルヘイムという男がいる……彼に、これを渡して保護して貰うんだ……いいな？ ニーア」

有無を言わせぬ気迫に、ニーアは文字通り何も言うことが出来ず、ただ黙って頷くことしか出来ずにいた。

本来なら廃棄物などを入れてTTBの最下層に廃棄するためのダストシュートにニーアの小柄な身体を押し込められた。

そして、繋がれていた手が離される。

身体が急速に落下していくニーアの耳朶に、遠ざかる中でも確かに彼の声を聞いた。

「さらばだ……我が子よ。どうか——お前の未来に幸が多いことを……」

その言葉を最後に、ダストシュートを覗きこんでいた彼の頭が、銀色に閃く軌跡にて遮られ、僅かに赤い——彼の血が吹きでるのが見えた。

……

……

……

……

……

……

「おーい、どうしたんだい？」

淡い光と共に頭上から降ってきた、どうにも間の抜けた声が耳朶を叩き、ニーアは移ろう意識の中で瞼を開けて、その声の主を見た。

「お、目を開けた。生きてるっばい？」

「なんで……疑問形なんだよ？」

間抜けな問いかけをしてくる桜色の髪をした少女に、ニアは痛む身体を無理やり起こして壁に背を預けた。

「あんま動かない方がいいよ。治癒はかけたつもりだけど、正直君の身体、大分危ない状況なのは変わりないし」

と、少女は言うが、ニアにしてみればついさっきまで指先すら動かすこともできないほど疲弊していたはずの身体が動かせる——それだけでも驚異的な回復をしたと言えた。

「……さっきまで身体動かすこともできなかったんだ。それに比べりや雲泥の差だよ……」

それでも、ニアは自分の言葉には気がないことを理解した。身体を置き上がらせることは何とか出来たが、虫の息には変わりない。ニアはそんな自分の状況に悲観するでもなく、ただ自嘲するように嗤った。

そして、視線を未だに横にしゃがみ込んで自分を見据えている少女へと向けた。酷く小柄な、おそらく目算でも身長は二三〇から一四〇の間といった程度。まだ一〇代を迎えたくらいの子供——そう予測したニアは、乾いた笑いを漏らして少女に言う。

「あー……なんだ。ガキがこんな時間に、こんな場所でうるつくのは感心しないぜ……さつさと家に帰って親と一緒に団欒でもしてる。そんで、今見たことは忘れろ……いいな？」

そう言っ、ふとニアは少女を見て——ぎょっと目を剥いて肩を慄かせる。

三毛猫を両腕でホールドしていた少女は、その濃い紫の双眸を鋭いものに変えて、ニアを睨み据えていた。

そして、冥府の底から聞こえる者じやの嘆きのような低い声で、ゆっくりと問う。

「ガキ……ガキっていうのはさー、もしかしなくてもボクのことを言ってるのかなー？」

ただならぬ怒気を孕んだ少女の声に、ニアは思わず息を呑んだ。少女の背後が陽炎のように揺らいで見たのは、きつと自分の気の

せいだと言い聞かせながら、ニアは僅かに首肯して言った。

「あのな……この辺りはお前みたいな初等部のガキがうるついでいい場所じゃあ——」

「しょ、初等部！」

ニアがすべてを言い終えるよりも早く、少女が絶叫した。ニアは思わず言葉の先を呑みこみ、何事だという様子で少女を見れば、彼女はわなわなと肩を震わせて握り拳を作ると、涙目でニアを睨みつけた。

その時の感想は、【マモノ】と戦うのよりもよほど恐ろしかった——とだけ言っておく。

身体の軸をうまく使った運動エネルギーの連動から成った少女の拳打。ニアは避けることも防ぐことも叶わず、ただ甘んじてその一撃を浴びるしかなかった。

「——あああああああああ！？」

ほとんど声にならない悲鳴を発して、ニアは眼尻に涙を浮かべて呻いた。

そんな彼に向けて、少女は威風堂々とその場に仁王立ちして言う。

「ボクは初等部じゃない！ 中等部所属だよ！ つかで言えば、今年で十五歳だ——」

その言葉に、ニアは思わず痛みも忘れて少女を凝視した。

（は！？ 俺のいつこ上？ 嘘だろ）

というのを口にしなかったのは、正直運が良かった。もしこの時それを言葉にして発していたのなら、ニアの死因は機獣との戦闘ではなく、少女の暴力になっていたところだろう。

「まったく……なんか生き倒れているから様子を見てみれば、これは何とも失礼な人だったなんてね」

「なら……無視すりゃあ良かっただろう？」

少女が頬を膨らませながら告げた言葉に、ニアは舌打ちしながらそう返した。すると、少女は再びしゃがみ込んで視線の高さを合わせる、徐に問うた。

「——でも、君ならそうするでしょ？」

「なっ……！？」

思わず、ニアは素っ頓狂な声を上げて少女を見れば、彼女はしたり顔で次々と言葉を連ねていく。

「それでも、いろんな場所で動物探して歩き回ってるんだ。だから、君のことは何度か見かけてた。羨ましいくらい動物に好かれてるよね……ホント、実に羨ましい……」というのはさて置いて、この前なんて、木の上に逃げた猫を助けて飼い主の女の子に手渡してたよね？ おまけに照れ隠しなのか知らないけど、ぶっきらばうに『もう目え離すなよ』とか言ってたよね？」

「お前……」

特に意識してやっていた覚えはないが、こうも他人の口から自分の所業を赤裸々に語られるのは恥ずかしいこと以外の何でもなかった。

歯を剥き出しに、ニアは少女を睨む。が、彼女はそれに動じることもなくにたりと口元に笑みを浮かべた。

「そんな風に脅しても恐くないね。君は口ではどう言っても、行動はただのお人よしだから」

「ならお前は人の行動を逐一覚えて、その相手に暴露する変態だ」「うーん……あながち君の場合は否定できない気もする」

少女は何か小声で呟いたが、その声はニアの耳には届かなかった。代わりに、ニアは口から僅かにうめき声を漏らす。

叫び過ぎたのか、今更ながら痛みに感覚が追いついたのか、全身至るところが痛みを発する。流石に無視するには厳しすぎる痛みに、ニアは顔を顰めてうなだれた。

その次の瞬間——ニアの身体を淡い光が包み込んだ。同時に激痛を発していた身体の痛みが徐々に引いて行くのを感じ、ニアは視線を上げると、そこには両手を翳して目を閉じ、祈るように跪く少女がいた。

だが、ニアが驚いたのはその少女の動作ではなくてその背中。そ

ここに輝く八つの翼。

ニアはそれを知っていた。話だけでしか聞いてはいなかったが、まさかそれを目にする日が来るとは思っていなかったため、我を忘れてあんぐりと口を開いて呆けてしまう。

しばらくすると、ニアを包んでいた光は唐突に消え去り、同時に少女の背中に現れた光の翼も消え失せていた。

少女が閉じていた目を開き、僅かに口角を上げて笑ってみせる。

「あんまり人に見せたことはないんだよね、これ……唯一響律式らしいけど、凄く珍しいらしくて——滅多に人には見せないんだ」

「……だろうな」

少女の言葉に、ニアはそれとなく同意しておいた。少女の持っている響律式は、下手をすれば今ある常識を覆す可能性すらあるものだと教えられた。

「可能な限り、人前では使わない方がいい。他の誰でもない——お前自身のためにな」

それとなく警告しておく。しかし少女はニアの言葉に込められた意味の半分も理解していないだろう。「あはは」とかすかに笑って、

「うーん。でも、使わなきゃいけない時があれば、使っしかないしねー」

そう言った。だろうな、と曖昧に頷きながら、ニアは両手を持ち上げて握って、開いて、もう一度その動作を繰り返して身体の具合を確認する。

痛みは完全に失せていた。先程まで死ぬ瀬戸際にいたのが嘘のように、まるで最初から健康体そのものであったかのような回復ぶりを見せていた。

ニアは曲がりなりにも自分を助けてくれた少女に視線を向けて、微苦笑を浮かべながら頭を下げる。

「助かったよ。本当に、助かった。礼を言う」

すると、そんなニアの反応を予想していなかったのだらう。少

女はその脱力した感じの表情を驚愕に染め——更に顔を真っ赤に染めて頭を振った。

「や、そんな……お礼なんて言われることした覚えは——むしろ殴ったし……」

「そりゃ、俺に非があつたからな……こっちは命拾つて貰つたんだ。礼を欠かしたら、それこそ俺はドヤされかねない」

「うぐぐ……」

少女は顔を赤くしながら唸っていた。お令が欲しくて助けたわけではないから、そんなものはいらない——というのはニアにも分からなくはないが。流石にコレばかりは何もないまま手うちというわけにはいかないのだ。

ニアは僅かに黙考し、そしておもむろに口を開く。

「そうだな……アンタ、何かして欲しいこととかないか？」

「——ふえ？」

謎の声を発した少女は、目を丸くしてニアを見上げた。対してニアはそんな彼女の様子に微笑しながら、僅かに明後日の方向を見て肩を竦める。

「だから——して欲しいこととかないかって聞いたんだよ。つつても、いきなりじゃ何も思いつかないか……なら次ぎ会う時までにも考えておけてのもの……なんか違うわな」

「してほしいこと……んあ！」

ニアがならばどうするかと考えを巡らせて髪を掻き上げる最中、少女はむむむ……と何智らしいうめき声を上げた後、何かを閃いたようにニアを見た。

ニアも彼女の様子に気づき、問う。

「何だ？　なんか思いついたか？」

その問いに、少女は答えの代わりとでもいうようにブカブカの服の袖から覗く右手をぬつとニアに差し出した。

差し出された手を見て、ニアは一瞬何を求められているのかわらず首を傾げ、

「金か？」

「ちがーっ！」

盛大に間違えた回答をしてしまったらしく、少女は肩を怒らせてニアを睨むと、僅かにため息を漏らして渋々と言った様子で言った。

「握手と——君の名前を教えて欲しいかなーとか、思ったりしてるんだけど……」

その言葉に、ニアは訳が分からないという表情を浮かべて少女を見返すが、その表情の何処にも冗談は見受けられず、それが彼女の考え出した精一杯の願いなのだと理解すると、ニアは失笑しながらその小さな手を取って、

「ニア。ニアァ「ゲイル」アシュリート」

「シエラ。シエラ「F」レッヒエル。よろしく、ニア君」

——それが、ニアとシエラの出会いだった。

「お、青空」

「何時の間にか雨も止んでたな……」

握手を交わしたまま、二人は頭上を見上げた。

いつの間にか雨は止み、鮮やかな蒼穹が蜘蛛の間から覗いていた。

そこで、ニアは目を覚ました。

TTB最下層——地下都市区画。常に蒸気で包まれたこの場所の一角。大量の廃材やらが積み重なった山の上が僅かに動いた。

百年分の廃棄物が山となったその上に落ちてきた彼は、数時間の時を経てゆっくりと意識を取り戻し、自分に折り重なるように積みもっている廃材や上層からの廃棄物を押しのけて起き上がる。

「ぐえふえ！ がーっ！ 邪魔くせー！」

せき込み、感情のままに自分の行動を邪魔するものを容赦なく投げ捨て、蹴り飛ばし、やっこの思いで廃棄の山から顔を出し、呼吸

する。

湿気の帯びた空気を肺に流し込みながら、ニアはげっそりとした様子でうなだれる。

そこに、

「——ニア？ 貴方、そこで何をしているんですか？」

多次元的知覚で、脳に、あるいは聴覚に直接響いた声に、ニアは声もなく顔を上げて、そこに立っている影法師を一瞥した。

影法師——ヴィルヘイム・チャンバーは、相変わらず全身黒ずくめの格好で、廃材の山に半ば埋まったニアを見下ろして信じられないと言った様子で肩を竦める。

「随分ト、愉快的な遊びをしていますネ？」

「……これが愉快的な遊びに見えるんなら、ついにお前は眼も腐り始めてるぜ？ ヴィル」

「ハハハ、そうかも知れませんが。所詮は半死半生の身ですか？」

ニアの皮肉を受け取り、ヴィルヘイムはかんかんらと笑った。正直な話、彼が半死半生の身であることは事実であるため、ニアとしてはそう話を振った側であるのに笑えない。

城九の返しとしては、これ以上にならない笑えないネタを返され、ニアは道化のような笑みを浮かべ続けるヴィルヘイムを見上げて、ついに根負けした様子で眉をひそめ、

「——手……貸してくれ？」

「喜んで」

ニアの頼みに、ヴィルヘイムは満面の笑みで了承を唱えると、ヴィルヘイムはニアの手を取って力いっぱい彼を引いた。引き上げながら、ヴィルヘイムは何かを思い出したように苦笑し、

「そう言えば、貴方と初めて会ったのも此処でしたネ？」

「あんなに思い出したい記憶じゃないな……それに、あのときとは何もかも状況が違い過ぎる……」

そのほんの寸前までの記憶を思い出してたとはあえて言うまい。

ニアは立ち上がりながら、ふと自分の腹部を見下ろして表情を顰める。衣服は血まみれで、ざっくりと袈裟に切られているというのに、目新しい傷は見当たらなかった。

落下する最中、全身を包んだあの光に、ニアは覚えがあった。

（あの馬鹿……無茶を——って、させたのは俺か……クソっ）

胸中で毒づきながら、ニアはそこでガックリと膝をついた。

「見た目以上に、疲労しているようですね。私の家へ——そこで休みましょウ」

うずくまったニアに肩を貸しながら発せられたヴィルヘイムの提案を、ニアはかぶりを振って断る。

「悪いが……そんな余裕はないんだよ——急いで、上に戻らねーと」「何のために？」

「——轟の野郎と、あの英雄様をぶん殴りに行く」

ニアは即応した。だらりと下げた右手の先で、強く握り拳を作りながら、ニアは鬼の如き形相で頭上を仰ぎ見る。

あれからどれだけ時間が過ぎたかは分からないが、急ぐにこしたことはない。すべてが手遅れになってからでは遅いのだ。

だが——

「無理ですヨ」

ヴィルヘイムが、そう断じた。

どういう意味か、それを問うよりも早く、ヴィルヘイムが言う。

「休ませるようニ——そう、麗愛から厳命されていますのでネ」

ヴィルヘイムの腕が、ニアの首筋へと伸ばされる。その手に握られている者を見た瞬間、ニアは彼の腕から逃れようとした——が、それよりも早く、ヴィルヘイムがそれをニアの首筋に当てて引き金を引く。

針が刺さり、供えられていたアンプルの中身が注がれる。

「ヴィル……テメエ……——」

文句を言うよりも早く、ニアの意識は暗転し——がっくりと全

身から力が抜け落ちる。そして本の数瞬の後には、安らかに寝息を立て始めたのを見て、ヴィルヘイムは失笑した。

「まったク……いくら睡眠促進のある鎮静剤とはいエ、ものの一瞬で眠りにつくほど疲弊していることに気づかないとハ。プロ失格ですヨ？」

眠るニアの身体を担ぎあげながら、ヴィルヘイムははるか上空にあるTTBの上部へと視線を向けて、そして祈るように言葉を口にした。

「時間は稼ぎましたヨ、麗愛。そして、無理ないようニ」

そして歩きながら、ヴィルヘイムはぼそりと小さく言葉を発した。このような場所で、誰が聞き耳立てているわけでもないが、それはヴィルヘイム個人の勝手な想い故――

「私もこれ以上――友を失うのは嫌ですからネ」

TTB第七階層には三つの区画があり、その一つが防衛技術局が有する研究区画として利用されている。

轟とベオルフは、その中でも最奥に研究ブロックに設けられた轟が個人研究のために用意した建物の最上階にいた。

そこはほとんど足の踏み場もないと言えるくらいに様々な機材が乱立し、あるいはそれらを作るために集めた資材や道具が至る所に散乱しており、もしこの場に轟が案内しなければ、ベオルフは此処をただの機関部か何かと思ったことだろう。

その部屋は、ある種の轟の妄執と狂気の産物でもあった。

どれだけの偉業を成し遂げようと、それを決して自らの成果と顧みられない彼が求め続けた栄華のために生み出された異物。

その部屋の真ん中に佇立している巨大な機械は、そういう轟の想いから生み出されたものだった。

——《天上の御力》。

それがその群集機構の名だ。

この巨大な人口居住塔TTBを、永遠に廃れることのない楽園へと昇華させる力を生み出すことを可能とするこの機構は、《天使》の力を増幅させ、それを流用しTTB全体を覆う巨大な絶対不可侵の障壁を生み出すことを可能とする。

故に、この《天上の御力》は轟の妄執の産物であるのと同時に、ベオルフの長年求め続けてきた、誰もが安寧の中でくらす場所を作り出すという願いを体现するための物でもある。

そのために、長い準備が続けてきた。

すべては三年前の『グレンデル』討伐作戦から始まったのだ。

当時のベオルフは腐敗しきったTTBの治安や塔の外延部障壁の不完全さを知り、それを改善しようと躍起になっていた。そのため外延部防衛局という前線で戦い続け、数々の功績を得て【剣の賢者】の席に座し、不当な徴収や暴力によって人々に恐れられていた『騎士団』を改正し、彼らを【マモノ】とも渡り合える戦士たちへと昇華させることに尽力を尽くしていた。

しかし、それもいずれ限界が来る。如何に『騎士団』を強くし、TTBの防衛の要としようと、結局それはただの付け焼刃による時間稼ぎにしかない。

どれだけ外から押し寄せる【マモノ】を退けようと、現実的にTTBにはすでに多数の【マモノ】が侵入し、下層から徐々に上層へと侵食しているという現実があった。

すべてはもつと根本的部分からの改善が必要だ——そう考え至つたベオルフの下に、ある日本当に唐突に、轟は姿を見せ、こう提案した。

『このTTBに絶対の秩序を齎さないか？』

普通ならば世迷言と斬って捨てるが、轟の提示してきた《天上の御力》とそれによってなされるTTBの改革事情に耳を傾けてみれ

ば、決して不可能とはいえないものだった。

そして何より、それによってTTBの【マモノ】に対する被害が完全に駆逐される——それは常に最前線で【マモノ】と戦ってきたベオルフにとって魅力的な話だったのである。

そうして遂にベオルフは轟の《天上の御力》の計画への加担を承諾し、『グレンデル』討伐を利用して自らを志望したことにし、計画の要となる《天使》の候補となる響律式使いを探し出すために、姿と名前を変えてコルブス・アカデミーの教師となって潜入した。それから三年。言葉にすれば短いが、ベオルフには酷く長い時間を感じられたものだ。それだけの時間を有して、ついに自分の願いが成就する日が訪れた。

顔には出さないが、ベオルフは実に感慨深いものを感じていた。同時に、いくばくかの申し訳なさも感じないわけではなかった。

たとえばグレイアース。

まだベオルフが『騎士団』を束ねていた頃、自分を慕い、自分の理想を共に夢見てくれたあの若者。気づけば自分と同じ【剣の賢者】となり、更には自分よりも遥かに上手く『騎士団』を束ね、日々このTTBの安寧のために尽力を尽くして来てくれた愛弟子を、こんな形で裏切ってしまったことに。

彼の大切な人を、自分の願いのためとはいえ傷つけてしまったことに。

たとえばシエラ。

今この場に君臨する《天上の御力》の核として利用されることとなる少女の、この先にあったであろう無数の可能性を、自分の勝手な理想のために奪い取り、その生涯を奪うことになってしまったことに。

たとえば、ニア。

慇懃無礼なあの若造は、世を疎み他者を毛嫌うような態度を見せながら、その実誰よりも誠実に見えた。口を開けば悪態ばかりだが、その眼に宿っていた光はある種自分の理想よりもはるかに大きなも

のを捉え、そこに向かって邁進し続けていたように見えた。そんな彼の命を、この計画を阻む可能性故、奪ってしまったことに。

そこまで考えて、ベオルフは苦笑した。

自分は酷くらしくないことを考えるようになったと、ベオルフ自身自嘲する。

「……教師を長く勤め過ぎたか……」

そう言いながら、あの日々もまた悪いものではなかったと重いつている自分がいる。計画が終わりを迎えるからこそ、感慨深い感傷に浸ってしまうのだろうと結論付けて、ベオルフは肩を竦めた——その時だった。

室内に警報が鳴り響く。

「何があった？」

「どうにも、侵入者のようですね。誰かが警戒ラインを突破したみたいです」

ベオルフの問いに、轟は《天上の御力》の制御端末とは別の端末を操作しながらモニターを見——そして舌打ちした。

「まったく……あの人形といい、貴女といい……どうしてこう父に關係する連中はことごとく私の邪魔をしたがるのか」

それはベオルフにというよりは、モニターの向こうに映った人物に向けて言った言葉とベオルフは判断し、轟と同じモニターを覗きこむ。

そこに映っていたのは、とても長い——尺寸三メートルはありそうな長尺刀を肩に担いで悠然と廊下を歩く、我そうに身を包んだ金髪の子女の姿があった。

「この娘——何者だ？」

ベオルフは無意識にそう呟いた。

モニター越したが、そこに映った子女が相当の手練であることだけは見て取れた。何よりこの子女は、自らが侵入者という立場を理解したその上で、その身を隠そうともせず悠々と通路の真ん中を歩いている。

その威風堂々たる行進に、ベオルフは好感めいたものを抱く。

ベオルフの呟きに、轟が答えた。

「麗愛〓マルスタイン——剣の魔女と呼ばれる、このTTBでも最強と目される刀使いですよ。そして我が父、斑目〓恭一郎の窮地の友人にして、あのニア（人形）の剣の師のようです」

「ほう……」

轟の言葉に、ベオルフは一層興味が惹かれた。そして、なるほど——と納得する。

彼女の堂々たる歩みは、確かにあのニア〓ゲイル〓アシュリートのそれによく似ていた。師弟揃ってその不敵な笑みに宿った尊大さはそっくりだった。

興味がわいた。そして同時に、戦士として対峙してみたくなった——それがこの時のベオルフの真意だった。

「私が下で迎え撃とう。お前はその間に《天上の御力》の統制を終えろ」

「いいのですか？ わざわざ貴方が出向く必要はないと思いますが」
轟が意外そうにベオルフを見た。それに対して、ベオルフは横目に彼を一瞥したあと、不敵に笑んで見せた。

「——武人の血が、騒ぐのだよ」

その言葉に、轟は理解ができないという様子で肩を竦め、

「では、お任せしますね」

そう言って、再び《天上の御力》の制御端末に移動して操作を再開する。

ベオルフはそれ以上何も言わず、昇降機エレベータに乗ってその部屋を後にした。

そしてベオルフの乗った昇降機が下に辿り着き、そこからベオルフが出たのを見計らったように、侵入者は反対の扉を開けて姿を現した。

そしてこちらの姿を見つけるや否や、何とも不敵な——そして不遜な笑顔を浮かべ、

「おや？ お出迎えかね？」

そう、何処か嘲りを孕んだ口調で言った。その態度と言動に、ベオルフは何とも言い難い既視感を覚えて失笑する。

師弟というよりは、丸で親子のような仕草のそっくり具合だった。「なんじゃ？ いきなり人を見て笑いおつて。最近の若造はなっておらん」

童女は僅かに眉を顰めて言った。が、その表情は何処か楽しそうな笑みを浮かべたままだ。

ベオルフはかぶりを振った。

「非礼を詫びよう。そして、その上で問おう。貴女が、アシュリートの師とお見受けして間違いないか？」

「んー？ 私はあれの師になった覚えはないぞ。育てはしたがな。剣はあれが勝手に覚えたんじゃ。私は関係ないわい」

その返答で、ベオルフは納得した。確かに、この人は弟子を取るような人ではないだろう。だが、あの若者の人生に多大な影響を与えているのは間違いなさそうだった。

——何せ、言動の端々に彼と共通する部分が多々見受けられるのだ。剣の師でないのならば、おそらく人生の師、と言ったところか。本人に自覚はないにしろ、ニアはこの童女の背を見て、気づかぬうちに彼女の真似をして育ったのだろう。それならば似ていても仕方がない、とベオルフは胸中で納得する。

そんなベオルフの心情など知らぬ麗愛は、勝手にしたり顔をしているベオルフに向けてにたりと笑って言った。

「さつきから一人で笑いおつて。訳の分からぬ奴だな。私はこの上にいる友の不肖の息子に用があるのだ。出来ればさっさと行かせてほしいのだが？」

その麗愛の申し出に、ベオルフは首を振った。

「それは了承しかねぬ。是が非でも通りたいというのならば、私を倒してからにして頂こう——剣の魔女、麗愛Ⅱマルスタイン殿。我が名はベオルフ。ベオルフⅡクロー！」

そう声高らかに名乗り上げ、ベオルフはその手に真紅の長剣——
緋の暁（エスカル＝ラーダ）を正眼に構えて見せた。

「ほっ……」

ベオルフの名乗り、麗愛は酷く楽しそうに口元に笑みを浮かべた。

「なるほど——土道を弁えた、その上でクソ生意気な若造だな……
よからう」

うんうんと首を何度も縦に振り、麗愛はその長い金色の髪を靡かせて長刀の切っ先をベオルフへと突きつけて声を上げた。

「【ザプリユッド】が長、麗愛＝マルスタインじゃ！ 相手をしてやろう、若人よ！」

刹那、麗愛の全身からベオルフをも圧倒する闘気が溢れ出す。丸で物理的圧力を持ったような身を凍わすほどの気迫に、ベオルフは気圧されそうになるのを辛うじて防いだ。

まだ一合も交えていないのに、頬を冷や汗が伝った。

一瞬で悟る。この人は強い。

今までであった誰よりも。如何なる存在よりも、この人は圧倒的に強いということを、ベオルフは理解した。

それこそ、今まで百も千も剣を交えて屠ってきた、機獣や【マモノ】などよりも遙かにだ。

ベオルフは刀を構えて不敵に笑う麗愛を見て、剣を握る手を直して一言、

「礼を言う——麗愛＝マルスタイン」

その言葉に万感の思いを込めて、ベオルフは剣を握り切りかけた。

ガバリ——上にかけていたシートを蹴り飛ばして、ニアは身体を起こして周囲を見回した。

「おや？ 随分早いお目覚めですネ？」

大量の書物に埋もれていたヴィルヘイムが、起きあがったニアを見て驚いたように眼を見開いた。と同時に、ニアがその胸元に手を伸ばして引き寄せて叫ぶ。

「どういっつもりだ、ヴィル！」

「というト？」

ニアの問いに、とぼけたように首を傾げるヴィルヘイム。

「とぼけるな！ 麻酔まで使って人を眠らせた理由を聞いてんるんだよ！」

我鳴るニアに、ヴィルヘイムはわざとらしいため息を漏らし、呆れた様子で口を開く。

「だって貴方、三十二階層の事件からほとんど寝ていないでしょう？」

「それとこれと、一体何の関係がある？」

まるで今すぐにでも喉元に喰いかかろうとする獣のような視線でヴィルヘイムを見るニアに、彼は本当に呆れたのだろう。普段柔和な笑みを絶やさない彼の表情から、その笑みが瞬時に消えた。

「その結果が現状を引き起こしたという事実二、貴方は本当に気づいていないのですか？」

「——なっ！？」

ヴィルヘイムの言葉に、ニアは息を呑んだ。そんなニアに、ヴィルヘイムはまくしたてるように、あるいは責めるように言葉を続ける。

「君の連れのお嬢さんが心配だったのは分かります。ですが、それを理由に自身の体調管理を怠り、本来ならば何時意識を手放しても可笑しくないほど疲弊しているにも拘らず、そこで無理をおして警戒を続け、その結果貴方はほとんど戦えないほどまで衰弱していタ」
矢次に吐き出されるヴィルヘイムの言葉に、ニアは何も言い返すことが出来ずただ悔しげに顔を顰めることしかできなかった。

いつの間にかヴィルヘイムの襟元を？んでいた手は解け、だらり

と垂れさがっており、逆にヴィルヘイムのほうがニアの襟元を？
み上げ、その？身からは想像できないほどの膂力でニアを？み上
げる。

「本来ならば貴方は『騎士団』になど出し抜かれるはずがないので
ス。如何にベオルフ・クロウの腕が立ったとしても、一撃で貴方が
退けられるはずがないのですか？」

「だが現実には、俺は奴に負けてんだよ！ オッサンにも、そしてあ
の轟の野郎にもだ！」

そう。現実には、ニアはベオルフの剣の一撃でほとんど戦闘不能
に陥り、拳銃の刃で本来ならば致命傷を負っていたのだ。

たとえ他人がどう自分の腕を評価しようと、結果が現実にある以
上、ヴィルヘイムの言葉はただの慰めに過ぎない。
だが、

「貴方の実力ハ、麗愛も私もあなた以上に理解しているつもりです。
——だからこそ！ 貴方はあのような事態の最中、常に万全の態勢
でいれば、今あなたが此処にいることもなく、たとえ敗れたとして
も麗愛が到着するまでの時間は稼げたはず！ そうすれば、少女は
二人に拿捕されることもなかった！ それなのに、貴方はその可能
性を自分の意地で潰してしまったことが分からないのですか！」
「うるせえ！」

その叱咤に、ニアは奥歯を軋ませて声を荒げた。

その通りだった。ヴィルヘイムの言う通りなのだ。あの時、トバ
リはほとんど眠ることなく神経を張り詰めて、常時緊張状態を保ち
続けていた。いや、無理やり保っていたのだ。

ほんの一瞬でも気を抜けば、それだけですべてが無に帰してしま
うような予感に、恐怖に駆られて——眠ることを恐れ、意識を途切
れさせることを恐怖して、ニアは頑ななまでに気を張っていた。

それが意味のないことだと分かっていたいながら。それでもニアは
半ば意固地になって休まずにいたのだ。

「……もう、あんな思い……したくないんだよ」

脳裏に蘇るのは、あの日の記憶。博士と離別したあの刹那——耳に、僅かに聞こえていた轟の笑い声。

その景色が垣間見えるたびに、耳に轟の笑い声が聞こえるたびに、それが再び回帰することがどれだけ恐ろしかったか。

「守りたかったんだよ……俺の周りにある——俺を取り巻く……世界を」

うなだれるニアに、ヴィルヘイムは問う。

「それで結局——貴方はそれを守れたのですか？」

無慈悲な、残酷な問い。

そんな質問に意味はない。答えが分かり切っているといは問いではない。ただの確認。それをニア自身に再確認させるための言葉。

ニアは答えない。答える意味すらないからだ。

答えなくとも、現状がその答えを克明に表していた。

ただ強く——強くニアは拳を握り締める。爪が手の平に食い込み、血が滲み——痛みを生じさせる。

だがそんな痛みは、痛みの内に入らない。

本当に痛いのは、その痛みを生み出す傷は、手の平よりもよほど深い所に出来ている。ずっと昔におったその傷は、今再び抉られて、新しい傷となりニアを苛む。

そんなニアから手を離し、ヴィルヘイムは踵を返して傍のデスクへと歩み寄ると、そこに置いてあった資料の束をニアに投げ渡した。

反射的に、それを受け取って何気なく目を向けた。

『——《天上の御力》を転用した《神の右に座す者》の考案』

「なんだよ……これ？」

普段の彼からは想像もつかない力のない言葉に、ヴィルヘイムは嘆息しながら答えた。

「貴方を通して麗愛から頼まれタ、例のファイルの中身ですヨ。目

を通すことをお勧めします。貴方がもう一度、轟と対峙する覚悟があるのなら——いエ、あの少女を助けたいと願うのなら……ですネ」

その言葉に、ニアは僅かに逡巡した。

逆にいえば、逡巡したのは僅かだった。

「——決まってる」

そう、一言口にし、ニアは思いっきり自分の頬に拳を叩き込んだ。

これには、流石のヴィルヘイムも両目を見開いて驚愕する。頬を叩いて気合を入れるのは見たことがあるが、一切のためらいもなく全力で自分の頬を拳で殴り飛ばすなど誰が予想するだろうか。

呆氣にとられるヴィルヘイムをよそに、ニアはその口元に不敵な笑みを浮かべて息を漏らした。自分の中に溜まったあらゆる鬱憤を吐き出すように。

そして、

「まだ間に合う——そうなんだろう？　ヴィル」

「えエ——勿論です」

ニアの力の籠った言葉に、ヴィルヘイムは満面の笑みで応じて踵を返し、家の出入口へと向かっていく。

そしてニアに背を向けながら、彼は弾んだ声音で言った。

「足を用意します。すぐに済ませますから、それまでに服、着替えておいてくださいネ。それを読むのはそれからです」

言われて、ニアは初めて気づいた。

自分の上半身が、包帯を除けば裸であったことに。

刀を振るのに、それほど膂力はいらない。麗愛は長年の経験からそう確信を持っている。

せいぜい必要な筋肉は、刀を振っての手からすっぽ抜けなかったための

握力と、その振った際の遠心力に耐えるための肩の力と踏み込み切るための脚力と言ったところ。

刃を相手に叩き込み、剣自身の自重で『叩き切る』剣とは違い、刀は刃を相手に当てて、引くことで『切り裂く』武器。

板金鎧という厚い防御の上から鎧語と強引に叩き切る、あるいは突き破るべく重厚長大の進んだ西洋剣とは異なり——刀はあくまで切り裂くことを主眼に置いている。布を。皮を。肉を。そのため歪曲形状でありそのための片刃だ。

必要なのは、如何に早く、如何に鋭い一撃を叩きこめるか。そういった意味では、麗愛という剣士は生粋の刀使いと言えるだろう。

彼女の動きは究極に無駄を省いた体捌き。刀を振る腕の動き。肩の動き。手首の返し。腰のひねり。膝の屈伸運動。足首の運び。それらを決して違えず、連動させ、必ず一定のリズムを以てそれぞれの関節の動きが最適化された流れを生んで刀を振るう。

——故に、彼女の一刀は速い。

そう。あの英雄と謳われるベオルフ・クロウを圧倒するほどに。刀身だけで三メートルある太刀が、目まぐるしく上段から、あるいは下段から襲いかかってくる。それを後退することで難を逃れるが、その次の瞬間には袈裟に切り抜かれ、その一撃を剣の腹で受け止めれば、次は左下段からの切り上げが襲ってくる。

ベオルフの知覚速度では到底対応しきれない速度で、麗愛の刀は早く鋭い。一瞬でも気を抜けば四肢のどれかが、あるいは耳や鼻が——下手すれば目すら切り裂かれるかもしれない恐怖に駆られ、ベオルフは防戦一方に追いやられていた。

丸で大人と子供の勝負だ。

そもそもに勝負になっていないと言っても良かった。

ベオルフの間合いは、一足による踏み込みと剣の尺寸を合わせて

三メートルが必殺の間合いだ。

対し、麗愛の間合いは軽くその倍があった。刀の尺寸でまず三メートル。更に一足の踏み込みの距離が三メートルほど。それが麗愛の持つ必殺の間合いだった。

剣士同士の戦いは、如何に自己の間合いを征するかで決まる。相手の間合いを見極め、決して相手の間合いに踏み込まず、如何にして自分の間合いで立ち回れるか——それが勝敗を決する決定打となる。

そう言った意味では、ベオルフはすでに死に体だった。

おそらく、麗愛には明確にベオルフの間合いが見えている。それこそ実際に円状の色分けがされている位に明確に見えているのかもしれない。

——そして麗愛は、絶対のそのラインに、ベオルフの間合いには踏み込んで来ない。
そしてベオルフは、自分の間合いに麗愛を取り込むことが出来ない。

すでに勝敗は決していた。

いや、始まる前からこの戦いの結末は決まっていたのだ。

しかし、結果が見えていたとしても、ベオルフは諦めるような男ではなかった。

麗愛が悠々と刀を肩に担ぐ様を見据えながら、ベオルフはほんのわずかの間目を閉じ、そして覚悟を決めた。

——勝てぬのならば、せめて引き分けに持ち込む。

死力を決する想いで剣を大きく振りかぶり、大上段に持ち上げる。それを見て、麗愛はくつくつと笑った。

「ほう……覚悟を決めたか」

「ああ……どうやら私は、貴女には勝てぬみたいだ。現に、未だ貴方を我が間合いに捉えることも叶わぬままよ」

「当たり前よ。入れさせていないのだからなあ。それとも、手を抜いたほうが良かったか？」

「遠慮しよう……」

麗愛が人を食ったようににたりと笑う。

「しかしおぬし……自分があの小倅に言いように使われていることに気づいているのか？」

「《天上の御力》のことならば、私は知った上で手を貸している——説得は無意味だぞ」

ベオルフは即座に切り返す。

すると、麗愛は「やはり……」と小さく漏らして首を振った。

「哀れよの……いや、自らが駒と気づいていないのは幸せなことか」
小さく零れた童女の言葉。だが、静まり返ったこの広間ではやけに澄み渡るように響いたその言葉に、ベオルフは僅かに眉をひそめる。

「一体……何を言っている？」

ベオルフの問いに、麗愛は呆れたように肩を竦め——担いでいた刀を突きつけて言う。

「戦いの最中、相手の言葉に耳を貸しては剣が迷うぞ？ まだまだ甘い証拠だな」

「くう……」

麗愛の言葉にベオルフは僅かに唸って見せるのみだった。その様子に、麗愛は実に愉快そうに肩を震わせる。

「若いな。まだまだ若い——だから、見せてやろうか。重ねた^{よわい}齡の
違いとやらをな」

その瞬間、一気に殺気が膨れ上がった。

ベオルフが目を剥くのを視界の先に見ながら、麗愛は声を上げる。

「——行くぞ！」

——ズダンッ！

踏み込みの音。

それがベオルフの耳朵を叩いた時には、麗愛がすでに目前にいた。

振り上げた刀。

上段からの一刀。

反射的に、ベオルフは持ち上げていた剣を引き寄せて、頭上からの一刀を防ぐように構えた。

「——っ!？」

受け止めた一撃。だが、受け止められたのはそこまでだった。

麗愛の放った上段からの切り下ろし。それを剣で防いだはいが——防いだ際に生じた剣圧による衝撃で、ベオルフの握力が消失していた。あまりに強力な剣撃が生み出した衝撃は、剣を通してベオルフの両腕を襲い、一時的にだがその筋力を麻痺させたのだ。

剣を握ることが出来ず、その手に握っていた 緋の暁 が床に落ちて鈍い金属音を響かせるのを耳にし、ベオルフが目を開くのを見ながら、麗愛はにっ……と笑った。

「今の一撃、よく凌いだ——だが、それまでよのう」

すでに彼女は地面にその足を下ろし、身を低くしながら身体を捻り回転させていた。

そして——

「——ふんっ!」

刀を——振り抜く。

左下段からに切り上げ。

あまりに鋭い、まさしく神速の斬撃がベオルフの身体を包んでいた鎧を寸断——鎧ごとベオルフの身体に刀が走り、鮮血が吹き出す。

「があっ!？」

ベオルフの口から、悲鳴が上がる。内臓までは達していないだろうが、切った範囲が広く、流れる血の量は多い。

何より、寸前でベオルフの握力を奪うほどの圧力を放つ麗愛の一刀だ。刀が纏っていた衝撃が身体を貫き、全身に電波してベオルフから力を奪い、彼はガックリと膝について地に伏した。

倒れ伏したベオルフを見下ろしながら、麗愛は血振るいし刀を肩に担ぐ。

「さて——敗者は勝者の問いに答えてもらおうか？　あの桜色の髪の毛と、斑目の小倅は何処にいる？」

ベオルフは僅かに逡巡したが、すぐに抵抗の無意味さを悟る。何よりベオルフは麗愛に敗れたのだ。彼女の言葉通り、敗者は勝者に従うべきだと判断したのだろう。

麗愛を見上げ、口を開こうとしたその時、二人の頭上から声が響き渡った。

「私なら——すでに此処に居ますよ？　麗愛「マルスタイン」

かつん……かつん……金属製の板で拵えられた階段を優雅に下りてきながら、白衣の青年——斑目「轟は二人を見下ろしていた。

「やはり……ベオルフ殿では貴女の足止めにもなりませんか。まあ、想定内の範囲ですが」

「良く言うわ。元々捨て駒にするつもりでおったくせに」

すかさず、麗愛が切り込んだ。麗愛の言葉に、轟が僅かに眉を顰め、ベオルフが僅かに目を剥いて二人を見上げた。

そんな二人の様子を一瞥したあと、麗愛は着物の裾から紙の束を取り出し、それを轟へと突きつけるように翳す。

「《天上の御力》——というのは、こ奴を駒にするための甘言だったのだろう？　本命を生み出すためのおとりとして」

麗愛の言葉に、轟は納得したという様子で首肯して見せ、眼鏡の押し上げながら肩をすくめて見せる。

「なるほど……デীরリング君が持ち出した記録媒体——あれは、貴女に届けられたようですね？」

「正確には、ニアアを通じて私の下へ届けられたんだ。優秀だろう？　お前が人形と蔑み疎む、ウチの稼ぎ頭は？」

「ええ——実に忌々しいですよ」

麗愛の嘲りに、しかして轟は語気を強めてそう返した。

「それで——貴女は何処まで知ったのですか？ この計画の全容のどの辺りまで」

「まあ、大方すべてだよ。『《天上の御力》を転用した《神の右に座す者》考案』——だったかのう。ヴィルヘイムが解析して私の所に届けられた時には目を疑ったわい。まさか恭一郎の忘れ形見が、こんなことをしでかすとは思ってもみなかったからな」

麗愛は手にした資料の束を捲り、その一部を読み上げて見せる。

「えー……なにになに？」

——『《天使》——即ち唯一響律式 ステウ・エインシエル 天授なる使翼 の力を応用

し、障壁と化して外部からの絶対不可侵領域を形成する《天上の御力》。そして、《天上の御力》のシステムを応用し、より攻撃性を高めその範囲内における絶対的防衛兵器へと転用する《神の右に座す者》の開発へプロセスを移行』か……なるほど、発想がぶつとんでいるな？」

「……そんな話、私は知らないぞ」

麗愛の横で倒れている轟が絞り出すように口をはさむ。

「まあ、教えていないのだから、当然じゃろう。そうだろう？ 轟」

「ええ。そうですね」

存外あっさりと、轟はそのことを肯定した。逆にベオルフが粟を食ったように慄き、轟を見た。

「これは——どういうことだ！ お前は、《天上の御力》を以てして、TTBの恒久平和のための防衛機構を作るのではなかったのか！」

ベオルフの問いに、轟は至極面倒くさがるように溜息を洩らし、仕方がないと言った様子で答える。

「元はまあ、そういう発案の下に指導した計画でしたよ。ですが、途中で方向転換したのですよ。ただそれだけのことです」

「なん……だと？」

いけしゃあしゃあとはこのこと。轟は澄ました顔でベオルフの言

葉に即応して見せた。が、それが逆にベオルフの神経を逆撫でする。が、そんなことは轟の知ったことではないのだらうと、麗愛は掌で踊らされていたベオルフに微塵の同情をくれてやりながら、麗愛は降りてきた轟に刀を突き付けた。

「轟よ。今すぐあの娘をこちらに引き渡し、その《神の右に座す者》とやらを廃棄しろ。さもなくば——」

「——切りますか？」

「応」

肩を竦めて切り返した轟に、麗愛は即応する。

麗愛の返答を受けた轟は、「困ったものです」と口で言いながら、その実口元が楽しげに笑っていた。

そして、両手を腰のベルトに吊るした剣帯に伸ばし——それを抜剣。二振りの小剣を手に取り、彼は堂々と答える。

「残念ですが——どちらもお断りしますよ。すでに《神の右に座す者》の起動は最終段階……もう止まりませんよ。アレは」

「——この痴れ者が！」

ケタケタと笑う轟の応答に、麗愛は怒号しながら地面を蹴って間合いを詰めると、残像すら残さない速さで抜き打ちを放つ。

だが、そこで麗愛の目が驚愕に見開かれる。

必殺の意志を込めて振るった神速の一刀。ベオルフでさえ手も足も出なかった麗愛の刀技を、轟は僅かに身を退けることで難なく躲して見せたのだ。

彼の所業に、麗愛も——そして寸前まで対峙していたベオルフも驚愕し、言葉を失って動きを止めた。

その隙に、轟が二刀を手に麗愛へと肉薄する。

左右の小剣が時間差で、そして異なる角度から麗愛へと振り下ろさ、あるいは切り上げられる。

「くっ！」

咄嗟に麗愛は刀を引き、血に突き立ててそれを軸に身体を中空に持ち上げ——そして跳ぶ。柄頭を足場にして轟の背後に飛び退き、

柄頭に結ばれている長い飾り紐を？んでそれを引くと、繋がった刀が麗愛の手元へと納まる。

が、それと同時に轟が間合いを詰めていた。

完全に死角を突き、更には予想だにしない動きをして見せたにも拘らず、轟はそれに対処して見せ麗愛へと迫った。

二刀が再び麗愛を襲う。そして――

「くあっ!？」

その口から小さな悲鳴が漏れる。轟の左の小剣が、麗愛の脇腹を割いたのだ。

次いで右の一刀が突き出される。麗愛の死角――彼女自身の刀で見えなくなっていた死角をついた刺突の一撃が彼女の左足を穿つ。

彼女の最大の強みである機動力が断たれ、先ほどまでベオルフを圧倒していた麗愛が、轟の手によって一方的に翻られるという信じ難い光景が繰り広げられ――

「――かはっ!？」

轟の右の剣が、麗愛の胸を貫いた。

大量の血が傷口から溢れ出し、麗愛が轟の件によって壁に縫い付けられ、脱力して刀がその手から零れ落ちる。

突き貫いた麗愛を見下ろしながら、轟は無表情に言った。

「貴女はこれでも死なないでしょうが――邪魔をされては面倒ですし、しばらく此处で大人しく成り行きを見守っていなさい」

「ぐう……とど……ろきい……」

わずかに、血であふれた口からそんな声が漏れたが、轟はそれを無視してベオルフのほうに歩み寄った。

近づいてくる轟を、ベオルフは未だにうまく動かない身体を強引に動かしてうずくまった姿勢で見上げながら呻きを漏らす。

「貴様……なんという……ことを……」

「もしかして、麗愛のことを言っているんですか？ それなら安心していいですよ」

ベオルフの言葉に、轟はそう答えた。

そんなはずがあるはずない。心臓を貫かれて、一体何を安心しろというのか。

そんなベオルフの疑問に、轟は至極当たり前のように説明した。「彼女は、ある特殊な唯一響律式の保持者でして——その影響により半不滅の肉体を持っているんです。

我が父、斑目Ⅱ恭一郎の宿していた　一賢者の石（ヴァイゼⅡシュタイン）。

ヴィルヘイムⅡチャンバーが左目に宿る　一生ける屍（ザ・リビングⅡデッド）。

そしてそこにいる麗愛Ⅱマルスタインの背に宿す　輪廻の蛇。
ウロボロス

彼らは皆、このTTBが創設される以前の時代から生き続けている、歴史の生き証人ですからね。あの程度では——特に　輪廻の蛇を宿す麗愛は、死にはしませんよ。ただひたすら、痛みに苦しむだけです」

だからあの程度のことはして当然——そう言い切る轟に、ベオルフは戦慄した。

狂っている——いや、思えば始めからこの青年は狂っていたのかもしれない。そして、その狂気を感じながら、同じように理想という名の狂気に駆られていた自分も、他者から見れば同じものなのかなと思うと、酷く恐ろしく感じられた。

そんなベオルフに、轟は至極冷徹に言った。

「人の心配よりも、自分の心配をするべきですよ」

そう言って、彼は持っていた左の剣を何気なくベオルフへ突き立てた。

「ぐうつ!?!」

腹部に剣を突き立てられたベオルフが激痛に悲鳴を漏らす。

が、轟はそんなベオルフを冷たく見下ろし、

「貴方もそこで、我が《神の右に座す者》の完成をご覧になってください」

まあ、それまで生きていればの話ですが——そう言い残して、轟

はベオルフが使った昇降機に乗って、その場を後にした。

最上階に戻り、轟は再び端末を操作した。モニターに表示される幾つもの情報に目を通しながら、ようやくここまで来たと感慨に耽りながら頭上を見上げる。

何かを成すたびに、そこには必ず父の名があった。

何か成果を出せば、そのたびに『斑目』恭一郎の息子』という評価ばかりが飛び続けた。それが嫌で嫌で仕方がなかった。

父が亡きあともそれは変わることなく、このまま未来永劫彼の名を引き摺って生きていくことに反吐が出た。

だから考え、考え続けた結果が、この『神の右に座す者』だった。史上最も偉大なる科学者。

響律式の生みの親。

人工生命研究の権威。

蘇った錬金術師。

そんな数多の異名を取る父を超えるには、最早彼でさえ達成できなかったことを成し遂げるしかない——その想いの一心で、轟は『神の右に座す者』の開発を続け、そしてついに完成するのだ。

これでもう、誰も自分を『斑目』恭一郎の息子』などとは呼ばない。

呼ばうものなら、この『神の右に座す者』の力で消し去ればいい。これにはそれだけの力が備わっているのだから。

『神の右に座す者』は、あの三二階層でシエラ』F』レッヒエルがやって見せた光の結界の応用した攻防を一体とした殲滅兵器である。

光の範囲内にいる存在を識別し、任意対象だけを攻撃する光の結界を応用し、その範囲をTTB全域へと広めて何時何処にいても索敵し、攻撃対象を識別したのち、上空から圧縮エネルギーによる攻

撃を可能とするように応用する機関——それが《神の右に座す者》。最も神に近い存在の力を冠する兵器。

それを有する轟とは——即ち神に等しい存在となる。

この《神の右に座す者》を使えば、TTBは轟の絶対な支配下に置くことすら可能となるのだ。

「そうだ……誰も私を阻むことなど出来ない。あの麗愛ですら、ヴィルヘイムですら——ましてや最早存在しない父ですら、私の邪魔することなど出来ないのだ！」

《神の右に座す者》を見上げながら、轟は痛快に笑い声を上げた——その次の瞬間だった。

建物全体に衝撃が走り、大きく揺れた。

警報が鳴り響き、館内放送に幾つもの指令が飛び交う中で、轟は端末を操作して呼びかける。

「何事だ？」

返答はすぐに返っていた。

『敵襲です！ 上空から何者かが高圧縮エネルギーを放って建物の外壁を破壊した模様！ 只今応戦中——うわっ！？』

『邪魔だ、どきやがれ！』

応答した警備隊員の声が途切れ、その向こうからかすかに聞こえた声に、轟は力の限りで端末に拳を叩き下ろした。

此処に来て——此処に来てなお、私の邪魔をするのか。

「忌々しい……父の人影——！」

端末の端——モニターに映る黒衣の少年の姿を見て、轟はあらゆる負の感情を込めてその名を叫んだ。

「ニーア!!ゲイル!!アシュリートおおお!!」

室内に、轟の絶叫が木霊した。

そして——

その彼を呼ぶ轟の声に、

「——ん……に……あ……くん？」
かすかにその名を呼んだ寝ぼけ声がかき消されていた。

Act 5：赤き旋風

小型空中移動船——通称 フライヤー。

少人数での空中移動の際に多く使われるこの乗り物の中に、ニアとヴィルヘイムは乗っていた。

外は酷い嵐だった。どうやらこの間から続いていた雨が強まってしまったらしい。そんな悪天候の中でのフライト——それはまさに自殺行為に等しかった。

強風が吹く度に フライヤー が大きく傾ぎ、その都度ニアはこの船から降りたい気持ちで一杯になる。が、それを必死に堪えてニアは正面の強化ガラス越しにその建物を見た。

第七階層の最奥にある、轟個人が保有する研究所。

「此処か？」

「ええ、麗愛の持っている通信端末の反応も此処ですかラ、まあ間違いないでしょう」

ニアの問いに、ヴィルヘイムは フライヤー の操縦桿を握りながら答えた。ニアは手に響素結晶武具の装柄を握り締め、その感覚を手に馴染ませながら、

「——で？ どうやってあそこに侵入するんだよ？」

「それはですネー」

ニアの問いに、ヴィルヘイムは黒衣の懷を漁ってソレを取り出し、ソレを見たニアはギョツと目を向いて驚愕する。

—— 兵器遺品、 ゲイボルグ。

巨大な銃口を持った金色の光を持つ響律式銃。その重心自体が一つの術式機構となっており、響素を銃身に込めて銃爪トリガを引くだけで、高圧縮エネルギーを撃ち出すことを可能とする凶悪な殲滅兵器。

ヴィルヘイムはそれを徐に手に取ると、これまた徐にその銃口を研究所目掛けて構えた。

その様子に、ニアは呆れた様子で肩を竦め、問う。

「ヴィル……まさか——」

「はい」 そのまさか——でス」

彼がにこりと頷くと同時に、大気中の響素が一気にヴィルヘイムのゲイボルグへと集束していくのがニアには見えた。

そしてヴィルヘイムが銃爪を引く——同瞬、辺りの空気が凍りついたような静寂に見舞われた。フライヤーの外は嵐であるにも拘らず、その風の吹き荒ぶ音も、豪雨がフライヤーを叩く音もしない。正に静寂が世界に訪れたような錯覚をニアが覚えたのと同時に——フライヤーの前方が眩い輝きを放った。

描かれたのは、十の巨大な幾何学模様で形成された円陣。それが直線状に並び、光の円環が一種の銃身に見立てられたように連立する。

そして十の陣に周囲の響素が呑みこまれ、次々と描かれている術式を形成し、気づけばそこには膨大なエネルギーを有した《砲弾》が生み出されていた。

これがゲイボルグの銃弾。ヴィルヘイムの手に持つ、兵器遺品が生み出した殲滅の光！

「穿て——ゲイボルグ」

ヴィルヘイムの口から、起動鍵語が紡がれる。

フライヤーの前方に停滞していた巨大な光源——圧縮されたエネルギーが、描かれた十の円環を銃身に見立てて導かれるように放たれる。

閃光。

衝撃。

爆音。

それらが連続し、ニアとヴィルヘイムの目の前で、研究所の壁に大穴が開く。

瞬間、ニアが叫んだ。

「ヴィル！」

「突っ込みますヨ！」

ニアの声に答えながら、ヴィルヘイムは フライヤー を操作して開いた大穴目掛けて突撃する。景色が一瞬にして過ぎ去り、研究所に供えられている対空迎撃砲も、先の ゲイボルグ の余波で半壊していて機能を失っていた。

ゆえに、ニアとヴィルヘイムを乗せた フライヤー は大した抵抗を受けることなく風穴を開けた研究所に飛び込むことに成功したのだ。

ほとんど墜落と大差な着陸をし、半炎上気味の フライヤー から研究所の床に降り立ったニアは周囲を警戒することもなく一目散に駆け出した。

「ヴィル！ 例の奴を探してくれ！」

「合点承知の助ッ」

捨て台詞のように残されたニアの言葉に、おそらく誰にも通じないような古いネタを披露しながらヴィルヘイムは頷いて別の方向に走り出す。

走りながら、ニアはコートのポケットから携帯端末を取り出し、画面に表示された麗愛の携帯端末の反応を確かめ、その方向に向かって走る。

「その侵入者！ 止まれ！ 止まらないと——」

突き当りを曲がったところで、武装した警備隊と遭遇するも、ニアは右手に長剣を具現させ響素を操作。大気を操り、幾つもの風刃を放って牽制し、一気に接近すると、

「邪魔だ！ どきやがれ！」

そう叫びながら剣を振り抜き、剣に纏わせた響素を解放して衝撃波を成してそれぞれを吹き飛ばす。

振り返ることもせず、ニアは一目散に廊下を疾走。体内の響素で身体能力を底上げして疾風のように駆け抜けるニアを、一介の警備隊が補足し切れるはずもなく、姫井を上げる間もなく昏倒させ

られていく。

「——此処か！」

そうしてようやくたどり着いた扉を半ば強引に蹴り開けると、そこは一種の渡り廊下のような場所になっていた。

ただ、そこは渡り廊下というより、天井も壁もない剥き出しの、建設中の建物の周りに見られる作業台によく似た、ただ手すりがあるだけの金網で出来た橋——と言った方が近い。

反応は、この場所の下からだ。見下ろせば、暗い階下に僅かだが人影が見える。

だが、ニアはすぐにその場に降りることはできなかった。
何故なら——

「待っていたぞ——ニア「ゲイル」アシリート」

その狭い橋の上で一人、立ちふさがるようにしてニアを待ち構えていた。

夜闇に星をちりばめたような暗紫色の光を放つ長剣——魔剣 魔狼。

銀色の髪に青い瞳——そして白銀の外套に身を包んだ剣士——【剣の賢者】グレイアース「ヴェル」ブレードエッジは、その名の通り鋭い刃のような闘気を発しながらニアを見据えて言い放つ。

「悪いが——此処でお前を討たせてもらう」

幽鬼のように立ちほだかる彼の様子に、ニアは呆れたように溜息をついて、

「正直、テメエと戦う理由なんてこれっぽっちもないんだがよ……」

そう面倒臭げに神を掻き上げ、ちらりとグレイアースを一瞥した。そこには、ハーディに訪れた時のような穏やかさも、外延部近くの裏町で会った時の柔和さもなく、あるのは緊張と疲弊——そして何かを気遣い憂いながらも、何も出来ない自分を齒がゆく思い、

悔やみ——そして疲れ果てた胡乱な気配。

そんな彼の様子に、ニアは数国前の自分の姿が重なって見えて失笑した。

「たーく……天下の【剣の賢者】様がなんつー様だよ」

「……黙れ」

ニアの言葉に、グレイアースは吐き出すようにそう言った。数度しか顔を合わせたことはないが、同一人物とは思えないほど、その言葉には覇気がなかった。

「正直、今のアンタなんか相手してる暇がないし、相手もしたくねーな。弱々しいアンタなんかを倒してもなんの意味もない」

「黙れ」

わずかに、語気が強まる。そこに孕んだ怒りと憤りを感じながら、それでもニアは言葉を続けた。

「それとも何か？ あの前官がいないとやる気も出ないか？ なっさけねーなおい」

「——黙れと言っている！」

髪を振り乱し、歯を剥き出しにして叫んだグレイアースに、ニアは微笑笑して応じた。

「わーったよ。今のアンタとは戦っても楽しくないだろうけどよー」
そう言いながら、ニアは手に握る剣を肩に担ぐように構え——そして叫んだ。

「——邪魔するって言うんなら、容赦はしねーぞ！ グレイアース
「ヴェル」ブレードエッジ！」

大音声を上げながら、ニアはグレイアースへと肉薄する。

「来い！」

対してグレイアースもまた、手にする剣を構えて、向かい来るニアを迎え撃った。

戦いの最中でありながらも、グレイアースの頭の中は未だ混乱に見舞われていた。

今まで信じてきたことが一気に瓦解し、自分が立っていた足場が酷く曖昧になり、自分はいつたい今まで何を目指して騎士として日々を過ごしていたのか——そんなことばかりが脳裏で問答を繰り返していた。

何より気がかりだったのは、ヘルマのことだった。

今、彼女は どうしているのか。

怪我の具合はどうなのか。

無事でいてくれるのか。

それがずっと脳裏から離れず、グレイアースはずっと思索し続けていた。

だが、

「闘いの最中に考えることは、随分と余裕じゃねーか！」

叫び声で我に返る。

相手はいつの間にか自分を間合いに捉え、身を屈めた体勢から飛び上がるように足を振り上げてきた。

グレイアースはそれをとっさに上体を逸らすことで躲す。続く剣閃を自身の 魔狼 で受け止め、逆にその力を利用して体を回転させ、足元で小細工をするニア目掛けて剣を振り下ろす。

「——っと！」

刹那、ニアは体を開いてグレイアースの剣を避けるとそのまま大きく飛び退き、橋から飛び出して壁へと飛び移ると、そこを足場のように利用して跳躍——落下する勢いに乗ってグレイアース目掛けてその長剣を叩き下ろす。

「オラッ！」

「くっつ！」

振り下ろされた斬撃を剣の腹で受け流しながら、グレイアースは片手を離してそこに響素を束ねると、目の前に着地したニアの顔面目掛け、ゼロ距離で響律式を叩き込む。

束ねた響素が集束し、転瞬小規模の爆発となってニアを襲う。
だが、彼はそれを読んでいたのである。慌てることなく――むしろ冷静にグレイアースの放った響律式を形成した響素の流れを読み解き、爆炎が自分に届く前に響素を自己の制御化に置いて無力化する。

その響素の制御技術は驚異的速さだ。正直脱帽と言っている。

副官であるヘルマも、グレイアースの知る中では驚愕に値する響素制御技術の持ち主だったが、目の前のニアはその上を行く技巧の持ち主だった。

一瞬たりとも気が抜けない。

否、僅かでも気を緩めれば、間違いなく自分が彼の刃にて破れるだろう。

（――それだけは！）

ほんの数分前に、轟によって告げられた言葉を思い出す。

『――直に、この場所のニア・ゲイル・アシリートが来ます。
《神の右に座す者》の起動完了までの時間を稼いでください。さもないと……あなたの大切な副官がどうなるか、私には想像が付きません』

そう笑顔で告げた轟の顔を思い出し、グレイアースは戦慄する。

あの男は、たとえそれがどれだけ非道なことであっても、自分の目的のためならば平然とやってのける人種だ。やると宣言した以上、彼は必ずやるだろう。

（それだけは――彼女だけは！）

守らなければいけない。

そう自らにいか聞かせ、グレイアースは神経を研ぎ澄まし、ニアを見る。

身体的能力値ではおそらく互角。ただ、精神面では彼のほうが僅かに上を言っているだろう。実力が拮抗する者同士の戦いでは、精

神的圧力や気負いなどで勝敗が左右することは少なくない。

なら、彼になくて自分にあるモノを使って状況を優位にすればいい。

そう判断したグレイアースは、向かい来るニアの剣を受け止め、それを退けた後わずかに意識を集中する。

自分の中にある肉体に流れる響素とは全く異なる——グレイアースにだけ存在する、秘められたる牙。

白銀の輝きを纏い、あらゆる敵を食い破る狼の牙。

グレイアースの全身が白銀の輝きを纏い、それがグレイアースの手にする 魔狼 へと流れていく。剣身全体が白銀の輝きを発し、相対するニアがその変化に動きを止めた。

そんな彼に向けて、グレイアースは研ぎ澄まされた眼差しでニアを見据え、そして告げる。

「——行くぞ」

その宣告と共に、グレイアースは 魔狼 を振り抜いた。

「——
シルバーファンク
鋭牙の銀狼 ！」

宣言。

同時にニアが何かを感じ取ったのか、大きくその場から後ろに飛び退く。

すると、寸前まで彼が立っていた空間に銀色の閃光が走る——そして次の瞬間、その閃光が白銀の炎と衝撃を伴って爆発した。

目の前が突如爆発した現象に、ニアは僅かに目を剥いて驚愕をあらわにするが——すぐに何かを悟ったらしく、彼は不敵に笑った。「なるほどな……それが噂の、グレイアースの『狼の牙』ってわけか？」

「その通りだ」

ニアの言葉に、グレイアースは白銀に輝く剣を八相に構えながら頷いた。

「これが私の唯一響律式—— 鋭牙の銀狼 だ。私の視覚範囲内ならば、あらゆる場所を任意に切り裂き、爆発で追撃する——ただそれだけの響律式だ」

「なにがただそれだけだ。そういう単純な響律式ほど強いんだろうが」

「かもしれない……」

ニアの不満げな囁きに、グレイアースは失笑しながら相手を見据え——

「破っ！」

「——ちっ！」

グレイアースが剣を振ると同時に、ニアは舌打ちをしながら橋から飛び降りた。そして次の瞬間、寸前までニアが立っていた空間が再び切り裂かれ、追撃の爆発が周囲を呑み込むのを背にし、ニアは階下へと飛び降りた。

「逃すか！」

その後をグレイアースも追う。

「—— 焼滅ザインフエルさすもの ！」

先に飛び下りたニアが、追いつがるグレイアース目掛けて火の上位響律式を放つ。 焼き払うもの 上位である 焼滅さすものを起動鍵語なしに放ってきたことに驚きながらも、グレイアースはそれを 鋭牙の銀狼 で斬断する。

斬るということに特化した唯一響律式である 鋭牙の銀狼 の前では、生半可な響律式はその刃によって両断することができる。

（—— そうそう容易く打ち破れはしない）

胸中でそう呟く。

そして下の階に着地したグレイアースの目に、信じられない光景が飛び込んだ。

壁際に、剣で胸を貫かれて縫い付けられた格好のままにいる麗愛「マルスタイン。そして、

「……ベオルフ……様」

反対側の床で、腹部に剣を突き立てられたベオルフ・クロウの姿に、グレイアースは驚愕を隠せずにいた。

そんな最中、先に着地していたニアが、壁に剣で縫い止められた麗愛に向けて、

「ババア、生きてるか？」

そう尋ねていた。

——無理だ。瞬間的に、グレイアースはそう断じた。

どう見ても心臓を貫かれている。あれではどんな人間であろうと生存できるわけがない。だが、そんなグレイアースの予想を裏切るように、麗愛Ⅱマルスタインは僅かに身震いしたあと、ゆっくりとした動きで顔を上げてニアを見て、

「うい……死ぬほど痛いわー。ニア、剣を抜いてくれぬか？」
そう言った。

信じられない情景を目にして絶句するグレイアース。そんな彼の目の前で、ニアは「仕方ねーなー」と至極面倒くさそうにぼやきながら剣を遠慮なく引き抜いた。

「ふがあっ！？ もうちょつと優しくできんのか！」

「知るか。抜いてやってただけでもありがたく思え。この不死身属性持ちのロリババアが」

「うっさい！ くそう。あの小章——思いっきり刺してくれおつたて……」

そう文句を垂れながら壁際に背を預けて座り込む麗愛を、呆れた様子で一瞥したあと、ニアは改めてグレイアースと対峙した。

「どうする？ まだやるのか」

「くっ……無論だ。私は、何としてもお前をこれ以上先に行かせるわけにはいかない」

わずかに逡巡しながらも、グレイアースは再び白銀の輝きを纏った魔狼を構えた。対峙するニアは、仕方がないという風にため息を漏らして同じように剣を構え——そして地面すれすれまで身を屈めると、飛び出すようにグレイアースへと肉薄した。

圧倒的な速度でグレイアースとの間合いを詰めたニアはグレイアースの剣の間合いの内に入り込み、剣での切り合いではなく、拳と蹴りによる接近戦にかかる。

だが、グレイアースもそれを警戒していたのだろう。彼はニアが掌底を放つのと同時に体を開いてその一撃を躲すと、大きく飛び退いて間合いを開いて剣を振るった。

白銀の軌跡がニアを襲う。彼は僅かに後ろに後退し、剣を楯のように翳して響素が生み出す斬撃を受け止めた。

剣身に幾つもの火花が走り――次の瞬間ニアの眼前が白銀の爆発によって覆い尽くされる。

同時に、グレイアースが動いた。一気に間合いをつけて、爆発で体勢を崩したニアへと迫る。

迫りながら、グレイアースは 魔狼 を下段から大振りに振り上げる。

爆炎が晴れた時には、グレイアースはすでに剣を振り抜き終えた後だった。そのグレイアースの剣の振るい方を見て、ニアはギョツと目を剥く。こっちの意図に気づいたのだろうが、時すでに遅し。ニアの足下から生じた白銀の斬撃は、先ほどまでの斬撃よりもはるかに範囲が広く、ニアは上に飛び上がりながら剣を楯にするしか対処する術がなかった。

無論、それがグレイアースの狙いでもある。

大振りの斬撃によって空中に打ち上げられたニアを、追撃の爆発が襲う。空中という無防備な場所では、追撃の爆炎から逃れる術がなかった。

ニアの身体は、巨大な白銀の爆発に飲み込まれて見えなくなる。そこでグレイアースが追撃に出た。

手にする 魔狼 を両手で握り直し、それを目にも止まらぬ速さで連舞する。

虚空に幾つもの軌跡が走る。その数は五つ。

出鱈目に放たれた巨大な斬撃場――それらすべてがほぼ同時に爆発

し、空間一帯が爆炎に飲み込まれた。

（これならば……！）

必殺を確信した刹那——爆炎の中から転げるように飛び出て来た影——ニアは全身のあちこちから煙を発しながら、それでも五体満足の様子であの焰と衝撃の中からは出でてきた。

おそらく、周囲の響素を束ねて熱を遮断する障壁を形成したのだろう。あれだけの爆発の中でほとんど火傷もなく現れたのは、そうでもなければ説明がつかない。

地面に膝をつき、渋面を浮かべて剣を杖代わりにして起き上がりながら、ニアは忌々しげにグレイアースを見た。

「くそ……本当に遠慮がねーな。お前」

「当たり前だ。君を殺す気で放っているのだからね」

そう言つて、グレイアースは再び剣を構える。そして今度こそニアに止めを刺すために剣を振り抜こうとした間際、傍観していた麗愛が唐突に叫んだ。

「ニア！ アレの使用を許可する！ 遣り合うならば、同じ度台でだ！」

アレ——の意味するものは、当人ではないグレイアースには分らなかった。だが、どうにも嫌な予感がした。

麗愛がニアに指摘したアレを使われる前にケリをつける。その想いと共に、グレイアースは 鋭牙の銀狼 を発動させ、ニアを切り払おうとして——それに気づいた。

ニアの周囲、そこに渦めく響素の流れ。ニアを中心に渦巻いたそれは、集束しながらニアの中に流れ込んでいく。

（——まさか！？）

その現象と、麗愛の言つたアレの刺す意味を理解した瞬間、グレイアースは自分の鈍感さに舌打ちしながら、ニアを両断するべく 魔狼 を振るい 鋭牙の銀狼 を発動させる。

だが、それよりも早く、ニアが叫んだ。

「――魔王の残滓！」

ニアの起動鍵語が紡がれた刹那――彼の周囲に集っていた響素が膨れ上がり、爆発する。一瞬、グレイアースの鋭牙の銀狼の力が吞まれるほどの響素が彼の周囲で渦を描いていた。

まるでニアを守るように。

響素は緋色を帯び、風となって彼の周囲で渦を巻いていた。

そして、その風を纏い、長剣を携えてその場に佇むニアの姿に、グレイアースは一瞬空寒い何かを感じ、思わず一步後退った。

が、すぐに被りを振って、考えを改める。

（何を気圧されている。ただ彼が唯一響律式を使っただけだ――それに、たとえ彼の響律式がどのようなものであったとしても）

グレイアースは、自らの剣を見下ろした。白銀の光を発する剣身は、その刃に触れる全てをその牙にて食い散らす狼の牙だ。

（――どのようなものであったとしても、この鋭牙の銀狼で切り伏せればいい！）

そう――自らに言い聞かせて、グレイアースは緋色の風を纏ったニアを見据え、
魔狼を手に彼を切り捨てるべく地を蹴った。

咄嗟に叫んだあと、麗愛は少なからず後悔の念に駆られていた。

（あの銀色の坊やには……悪いことしたのー）

そう胸中でグレイアースに謝罪しながら、麗愛はニアの様子を見た。

全身を包みこむように展開された緋色の風――魔王の残滓が具現したことによって生じたあの風は、ニアを守る最強の楯と言っている。

――魔王の残滓。

それは一見唯一響律式に見えるが、実はそれらとは似ていながら非なるものであり、唯一響律式の中でも異端中の異端と言える響律式だ。

魔王の残滓 は、発動と共に宿主の胎内に宿る響素と共鳴し、その身体能力を通常時と比べて数倍にまで高める。無論、ただの体内響素を操った場合の身体強化とは比べるべくもない強化を宿主に与えるが、それは 魔王の残滓 の本来の能力ではなく、いうならば本来の能力の発動させるための予備能力に過ぎない。

魔王の残滓 というのは、そもそもに自然に発生した唯一響律式ではなく、斑目Ⅱ恭一郎の遺伝子強化を施した人工生命が突発的に生じさせた——いわば突然変異に近い特殊な響律式。

彼は 魔王の残滓 を、一元型響律式（アーキータイプⅡコード）と呼んでいた。

すべての響律式の始まりの響律式—— インベリアル・リヴェリオン 万魔の覇者 に最も近しく、しかし最も通り力の残影。搾りカスのようなほんの些細な力しかない——出来そこないの響律式。

故に、彼はそれを唯一響律式とは名付けなかった。

——あれほど響律式使いにとって相性の悪い響律式など、他に存在しないというのに。

眼前で、ニアとグレイアースが激突する。

緋色の風を纏った黒塗りの長剣と、白銀に染まる夜闇の長剣が、両者の膂力によって拮抗する。

そしてニアとニアの剣を包む緋色の風がグレイアースの 鋭牙の銀狼 の光に触れた刹那——それは起きた。

まずそれに気づいたのは、術者であるグレイアース自身。気づいた彼の表情は、理解の及ばない現象を前にして怯える子供のように見えた。

その彼の反応を見て、麗愛もそれを視認した。

ニアの 魔王の残滓 に触れた 鋭牙の銀狼 の光が、弾けるようにして消え失せるユン感を、麗愛は確かにその眼で見た。

そう。あれこそがニアの唯一響律式 魔王の残滓 の脅威。

他者の響律式を破壊し、それを形成していた響素を喰らい、自らの力へと転換・増幅するという、圧倒的な攻撃性を誇る侵食系響律式——それが 魔王の残滓 。

鋭牙の銀狼 という優位性を失ったグレイアースは、ニアの纏う緋色の風を忌々しげに睨みつけながら 鋭い銀狼 を解いた。それに合わせて、ニアも 魔王の残滓 を解除する。

元々あの響律式はその強力な力を有する分、宿主であるニアに多大な負担をかける、悪食のような響律式だ。

だから普段は封印し、滅多なことでは使わないように厳命している。実際に、ニアが 魔王の残滓 を使った回数など指で数えられる程度。それほどまでに、あの響律式は危険をはらんでいる——いわば諸刃の剣。故に禁じ手としているのだ。

それを解放し、グレイアースの 鋭牙の銀狼 を封じることになったならば、あとは単なる剣による戦い。

二人の剣が交錯し、幾つもの火花を散らした。

どちらもその年齢からはとても想像できない卓越した技巧で刃を交える。

そして数合。思わぬ事態が訪れる。

ニアの剣が、グレイアースの剣との衝突でその剣身が砕け散ったのだ。おそらく、寸前の響律式の攻防で、グレイアースの 鋭牙の銀狼 を防ぎ続けて蓄積されたダメージに、更に卓越した剣士同士の剣圧に耐えきれずに自壊したのだ。

ニアの顔が悔しげに歪み、グレイアースが好機と剣を振り上げる。

思わず麗愛が自分の刀を投げ渡そうかと逡巡した——その瞬間だった。ニアの靴の爪先に何かが当たる。

ニアはそれを一瞥すると、迷うことなくそれを蹴り上げ——手に取るや否やそれを手早く振り抜いた。

ニアの手に取ったそれは、ほんの少し前に麗愛が対峙していたベオルフが手にしていた、真紅の刀身を持つ両手長剣 緋の暁。

ニアが 緋の暁 を振るった瞬間——グレイアースの手から 魔狼 が弾け飛ぶ。

ほんの——ほんのわずかの差。

勝利を確信して余韻に浸った者と、最後まであがくことを諦めなかった者の僅かな差が、勝敗を決したのだ。

「勝負あり……だろう」

間違いなく、勝敗は決していた。剣を失った剣士は敗北したも同然。ニアはそう遠まわしに断じた。だが、

「……まだだ」

かすかに、グレイアースがそう答えた。剣を突きつけるニアを正面から見据え、その視線を決して逸らさぬまま、彼は言う。

「どちらかの命が果てるまで——そうでなければ勝敗は決まらない」
言いきったグレイアースに、ニアは呆れて果てて言葉も出なかった。そしてほんのわずかの間黙考し、真長に言葉を選びながら口を開こうとした——その時だった。

「——遅くなりまして」

何処までも緊張感の欠いた多次元的声と共に、ヴィルヘイムは部屋の奥の扉から現れた。その両腕に、蒼い髪的女性を抱えて。

そんな今更過ぎる登場に、ニアは頭痛がしそうな錯覚に襲われながら地団駄を踏んで彼を睨んだ。

「遅すぎだ！ おかげで俺はこの頭でっかちのおかげでボロ雑巾寸

前だぞ！」

というニアの文句など何処吹く風。彼はかんらんかと笑って肩を竦めて、

「妙齡の女性を抱きかかえル……そんな体験は久しぶりだったのデ、堪能したくなつたのですヨ」

という本気なのか冗談なのか分からない発言をして、ニアを脱力させた。

——その横で、グレイアースは呆けたように立ちつくし、ヴィルヘイムの腕の中に納まる女性——ヘルマを見ていた。そして我に帰るや否や、

「ヘルマ！」

己が副官の名前を呼んで、ヴィルヘイムの下に駆け寄った。
「どうゾ」

駆け寄ってきたグレイアースに、ヴィルヘイムはそう言つてヘルマの身柄を手渡した。ぐったりとしたヘルマの身体をそつと包み込むよう受取り、グレイアースは彼女の名を呼ぶ。

「ヘルマ！ ヘルマ！」

「あまり動かさないでください。治癒は施されていましたが、大事には至っていませんヨ」

目を覚まさぬヘルマを心配してか、その身体を揺すりながら声をかけるグレイアースに、ヴィルヘイムは簡潔に状態を伝える。

そのままヴィルヘイムはニアを見た。ニアはそれに頷いて返すと早々に踵を返して動かないベオルフの下へと急ぐ。

此処に突入した際、ヴィルヘイムと別行動を取つた理由はこれだった。もし轟がニアの襲撃を予想していた場合、その防衛策としてベオルフかグレイアースが用意されているだろうと踏んでいた。

そして気になっていたのが、あの外延部で顔を合わせた際に、その傍らにあの蒼髪の副官がいないことが気になっていた。そしてグレイアースの様子から、彼女が人質か何かになつたのではと推測し、そうであるとすれば何処かに幽閉されている可能性を予想したニア

アの案により、対グレイアースようにヘルマを確保しておいた方がいいだろうとヴィルヘイムに探させたのだ。

まあ、そのヘルマを連れて来るよりも早く、グレイアースとの戦いに決着がついてしまったためにあまり意味は成さなかったが、少なくともこれで彼が敵に回ることはないだろう——だからこそ、ニアは当初の目的のためにベオルフへと近づく。

倒れ動かぬベオルフの傍で膝をつき、彼を見下ろし……そして問う。

「おいオッサン。まだ寝るには早い——息はしてるんだろう。なら、俺の質問に答えろ」

一方的な物言い。だがしかし、ベオルフはそんなニアの言葉に微かに笑い声を上げて見せた。

「……くくくつ……相変わらずの傲岸不遜ぶりだな？ アシユリー」

「そう言うアンタは、死に欠けの割には元気そうだな」

ニアの言葉に、ベオルフはいいやと首を振った。

「もう……見えていないのだよ。直に命が尽きる」

「そうか……」

ベオルフの告白に、しかしニアは対して驚くこともせずただ一言そう応じるのみだった。何となく彼の周囲に広がる血の量から死期を悟ったのだろう。

ニアはただ僅かに吐息を漏らすだけだった。そして、

「なら、死ぬ前にチビ助と轟が何処にいるか答えろ」

そう尋ねた。

ベオルフは僅かに逡巡して見せたが——無駄なあがきと悟ったのか、あるいは最早轟をかばう理由はないと意を決したのかは知らないが、ニアの問いに答えようと口を開こうとし——それは頭上から響いたスピーカー越しの声に阻まれることとなった。

『——私でしたら、ずっと貴方達の頭上にいますよ？ 用があるの

ならば、自らの足で我が元に来るのだな』

頭上から降ってきた言葉に、ニアは酷く冷めた目をして見上げながら言った。

「死に損ないの最後に、名誉の花一つも添えてやる気もないみたいだな。あの野郎は」

吐き捨てるようにその言葉を漏らしながら、ニアは 緋の暁を手に立ち上がると、

「オッサン——この剣、貰って行くぜ？」

そう言つて、ベオルフがゼリクであつた時に見せたのと同じ不遜な笑みを浮かべて見せた。

ベオルフは黙つて首肯し、走り出そうとするニアの背に、ふと思ひ出したように声をかけた。

「——一つだけ、聞かせてくれ」

「……答えられることならな」

急ぐ歩みを止めて、ニアは立ち止まって視線だけ振り返り、ベオルフを見た。そんな彼に、ベオルフは僅かに躊躇つた後、意を決したように問う。

「——以前、まだ……アカデミーであつて間もない頃に……お前は言つた。『大地に帰るのが夢』だと……それは……何故だ？ 斑目 恭一郎に……言われたからか？」

「んなわけあるか——たく、寝ぼけたこと言つてんじゃねーよ」

ベオルフの問いに、ニアは呆れたように髪をガシガシと掻き上げて、仕方がないといった風に、それでいて年相応の少年のような笑みを浮かべて答えて見せた。

「——俺は人間だ。大地で生まれ、大地で育ち、そして大地に還る——それが人間だろ？ それが、俺の答えだ」

ニアはそう一方的に言葉を残すと、もう言うことはないという

風に上部へと続く階段を駆け上がって行った。

残されたベオルフは、走り去るその背を見ながら、ただ茫然としまま呟いた。

「大地に生きる……か」

それは、TTBに生きる誰もが今や忘れてしまっている——だがかつての人類にとって、あまりに当たり前の在り方だった。

走り去っていくニアの言葉は、グレイアースの耳にも届いていた。そして彼のその言葉に、グレイアースは酷く、酷く共感めいたものを抱いていた。

——その通りだ。

心の奥底から、グレイアースはニアの言葉に同意を示していた。誰もがこのTTBという機械によってなされた仮初の大地に安堵し、かつて自分たちが生きていた大地を忌むべき存在としているTTBに生きる人類。

たった百年。わずかそれだけの歳月だけで、数千年も生きてきた地を身捨ててしまった人類。

淘汰されて当たり前だ。

目の前にあるただ楽な回答にばかりすがり、自分の目を閉じて本来のあるべき姿から目を反らし続けてきた自分たちが、果たしてどうして大地に生きることができらう——そう思いながら、それと同時に再び大地に帰ることができないか——そう、幼い頃に何度思っただろうか。

しかし、それを口にするたびに、父も母も目くじらを立てて怒鳴り散らしていた。
ふざけるな！

夢を見るのも大概にしる！

一体何度、そんな言葉を投げつけられたらう。

いつしか自分は、大地に帰るといふ夢を口にすることすらなくなり、気づけばＴＴＢの治安と現状の維持ばかりに囚われていたような気がする。

今なら分かる。

どうして自分が、事あるごとにニアの言葉に気を取られていたのか。

——彼は、かつての自分だった。

始まりこそは人の言葉だったが、いつしかそれを自らの望へとして堂々と口にする彼は、まだ親に断じられる以前の自分の姿だったのだ。

「……グレイアース……様」

いつしか上に昇り見えなくなったはずのニアの背中を見続けていたグレイアースへ、不意に名を呼ぶ声が耳朵を叩き、彼は慌てて腕の中にいる彼女を見た。

「ヘルマ！ 目を……覚ましたのか？」

グレイアースの問いに、ヘルマはしっかりと頷いて見せた。

「はい。何処ぞの野良犬の声があまりに五月蠅かったので」

「ハハハ……」

ヘルマの返答に、グレイアースは乾いた笑いを上げながら、ふと彼女へ訪ねた。今しがた思い出した、ずっと昔の自分の抱いていた夢のことを。

ヘルマはゆっくりと頷いた。

「はい。覚えています」

「なるほど……だから、君はニアに食ってかかっていたんだね？」

「はい。あのような野良犬が、グレイアース様と同じ夢を抱いているというのが、我慢ならなかったので」

ヘルマの言葉に、グレイアースはどう答えていいのか分からず、曖昧な返事を返すだけに留めた。

そしてしばらく言葉なく目を閉じた後、恐る恐ると言った様子で彼女に問う。

「今からでも……間に合うだろうか？」

「はい……必ず」

グレイアースの問いに、ヘルマはそう力強く頷いた。そしてそれを後押しするかのように、

「やってみるといい……」

離れた場所からそんな声が届き、グレイアースとヘルマは揃って声の主を見た。

最早目も見えていない、息も絶え絶えのあり様でありながら、それでも彼は——ベオルフ「クロウは力強い声音でグレイアースに言う。

「お前がそう思ったのなら……目指してみるが……いい……かつて私がそうしたように……私とは違う道を……な」

「先生……」

無意識に、グレイアースはそう彼のことを呼んだ。

ずっと昔、まだ騎士を目指す前から自分に剣を教えてくれていた頃の、師の呼び方で。

ベオルフが笑った。

そしてそれを最後に、彼はゆっくりと目を閉じてその生涯を終えた。

英雄と謳われながら、その自らを死で隠匿し、今回の事件の引き金を引いたうちの一人——ベオルフ「クロウは、実にあっけなく息を引き取った。

一瞬、その傍らに駆け寄ろうかと思った。が、それを思いとどまり、グレイアースはかぶりを振った。

彼はそんなことを望まない。そんなことをするくらいならば、とつとと剣を手に立ち上げれ——彼ならきっと、そう言うはずだ。

「グレイアース様……」

氣遣うように名を読んだヘルマに、大丈夫だ的一声かけて彼女を下ろす。そしてニアとの戦いで手から零れた 魔狼 を手にとつて、視線をはるか頭上——その先にいる轟と、先に言ったニアへと向けた。

その隣に、何処からともなく グングニル を召喚したヘルマが立つ。「もういいのか？」と尋ねると、彼女は「問題ありません」と静かな声音で答え、そして進言する。

「私たちも行きましょう。あんな一般の請負屋一人に任せてなどおけません」

言葉に棘があるのは否めないが、遠回しにニアを助けに行こうとしているのだけは伝わった。

無論、グレイアースもそのつもりだった。

かつて同じ夢を見て——そして今再び、同じ夢をその胸に掲げる者として、

「行こうヘルマ。彼一人だけを戦わせるわけにはいかない」

「はい、お供します」

グレイアースとヘルマは、先に駆けだした彼と同じように、その長い階段を駆け上がった。いった。

最上階。酷く広い部屋に、幾つものケーブルや太いパイプが連結された巨大な機構——その前に、斑目〓轟は立っていた。

その背を見つけたニアは、特に何かを言うわけでもなく手に握る 緋の暁 を肩に担ぎ直してその背に歩み寄る。

「やっぱり来ましたか——ニア〓ゲイル〓アシュリート」

先に口を開いたのは、轟だった。名を呼ばれたニアはその場で足を止め、鼻で笑いながらその声に応じた。

「ああ——ご招待預かったからなあ。忙しい中、足を運んでやった

よ」

「来なくても良かったんですよ？」

ニアの皮肉に、轟は本音からそう言った。対して、ニアはほととあきれたと言った様子で肩を竦めて、轟の背後で静かに駆動音を鳴らす機構の真ん中を指さして言う。

「来ないわけがないだろーが。そのクソデカイ機械の真ん中にいるチビを迎えに来たんだよ——分かったらさっさと返せ」

「お断りします——とだけ答えましょう」

ニアの申し出を、きつぱりと轟は却下する。この展開は、正直なところ予想していた。だからこそ、ニアは肩に担いだ 緋の暁を正眼に構えて、悪党然とした笑みを浮かべて言う。

「——だったら、力づくで奪い返すだけだ！」

そう宣言すると同時に、ニアが轟と、その背後に君臨する巨大機構——《神の右に座す者》を目指して疾駆した。

そんなニアを横目に一瞥し、轟は憐れむような目線でニアを見た。

「愚かな——《神の右に座す者》！」

轟が機構の名を呼ぶのと同時に、周囲が証明に照らされて明るみになる。証明に照らされた部屋に現れたのは、背に翼を持つ巨大な機械仕掛けの人型だった。

正確に言えば、機械が寄り集まって辛うじて人に見える物——だろうが、今問題視するべきなのはそこではない。

轟が《神の右に座す者》の名を呼んだのと同時に、ニアの頭上に無数の光陣が現出する——ニアの記憶が正しければ、これは依然シエラが響律式を発動した際に【マモノ】たちを退けた時に発動していた響律式と同じもの。

動物的直観が警鐘を鳴らし、ニアは 緋の暁 を眼前に立てのようにして構えながら大きく飛び退く——と同時に、描かれた六つの響律式が一斉にニア目掛けて熱線を放射した。

剣身を形成する響素に指令を叩き込んでその響律式を阻むも、衝

撃による圧力までは相殺しきれず——ニアの身体は大きくその場から後退する。

追撃の連撃を剣で弾き、飛び退いて躲し、身体を螺子って避ける。結果——結局元の位置に逆戻りし、ニアは忌々しげに舌打ちをした。

そんなニアの様子に、轟は満足げに頷いて大げさな動作で両手を広げる。

「どうだ！　これが《神の右に座す者》の力！　《天使》の有する唯一響律式をエネルギーに、敵対象を補足して迎撃する防衛機能を有したこの《神の右に座す者》があれば、誰も私を阻むことなど出来ないんだよ！」

楽しげに声を上げる轟の様子に、ニアは心底つまらないといった様子で肩を竦めた。

「そんな口上はどうでいい。いいからそのチビ助返せつつてんだ——」

「避けるニア君！　後ろだ！」

叫びながら剣を持ち上げるニアの耳朵を、聞き慣れた声が叩く。その声にニアはほとんど条件反射で横に跳んだ。

次の瞬間——寸前までニアの立っていた場所に幾つもの閃光が着弾する。後一瞬反応が遅れていたら、ニアはこの世から消え去っていたかもしれないことにゾツと身震いさせていると、

「困りますね。核が勝手にしゃしゃり出ないでいただきたい」

見れば、いつの間にか目を覚ましたシエラに向けて、轟が響律式の刃を向けているところだった。

そんな轟に向けて、ニアは全方位を警戒しながら小さく笑って言った。

「誘拐の後は脅迫か？　とことん外道だな」

「なんとでも。その程度で傷つくような安いプライドは、端から持ち合わせていないんでね」

ニアの皮肉など気にも留めないというか、最初から耳を貸す気

がないと言った様子で、轟はシエラに刃を向けながらくつくつと笑う。

「さーて、ニア。此処で貴方に提案です。此処で貴方が自ら命を断てば、彼女の身の何千は保証する——そう言ったらどうします？」

「断るに決まってるんだろ、馬鹿かお前」

一瞬の迷いもなく、ニアは轟の言葉を一蹴した。そもそもに、ニアには轟の提案に耳を貸す理由などこれっぽちもないのだ。最初から力ずくの強硬手段以外の選択肢など存在しなかった。

対する轟も、「まあ、当然でしょうね」と一人納得していた。

「では逆に——シエラさん」

「ふえ？」

実に間抜けな返答をしながら、シエラは轟を見下ろした。視線が交錯し、轟はにたりと厭らしい笑みを浮かべて、シエラに言った。

「貴女が私に協力してくれることを承諾してくれば、彼らの命の保証をする——そう言ったらどうします？」

「——どうもしない」

即答だった。これには轟も予想外だったのか目を剥き、ぽかんと口を開いてシエラを見上げていると、彼女は僅かに眉を顰めて言った。

「そもそもボクはニア君に助けを求めた覚えはないっていうか、目を覚ましたらいきなりこんな状況だよ？ 説明の一つもなしにそんなこと言われたって分かるわけないじゃん？ ねえ？」

「そこで俺に同意を求めんなよ……」

いきなり話を振られたニアは肩を竦めてそう返した。しかしシエラは止まらない。

「大体君、ボクが泣いて誰かに助けを求めるように見えるかなー？ 自分で言うのもなんだけど、ボクは無条件で誰かを助けるのも、誰かに助けられるのも御免だよ。ましてやニア君になんてありえない。ボクと彼はいわばギブ&テイクの関係だしね」

「お前、俺から貰ってばっかで一向に返してないだろう？」

「命より高いモノはないんだよ、ニア君」

何気なく呟いただけの言葉にもしっかりと切り返してきたシエラに、ニアはうつ……と言葉を詰まらせた。

そんなニアを無視し、シエラはなおも呆氣にとられている轟に向って告げる。

「よって、ボクには彼を止める力はないし、彼がボクを助けようとしているのなら、それはニア君が勝手にやっていることだから、たとえボクがどうなろうと結果は変わらないと思うよ?」

そう結論付けて、シエラはそれ以上言うことはない——というように普段と変わらぬ脱力感を漂わせたへの字口で《神の右に座する者》の中枢核にぶら下がる。

あまりの思い切りの良さに、轟だけではなくニアまでもが啞然と言葉を失ってしまったが、やがてニアは肩を竦めて口を開いた。

「——だそうだぞ。轟。終盤まではお前の思い通りだったのに、詰めの部分で誤算が生じたみたいだな?」

「っ……!」

ニアの言葉に、轟は僅かに舌打ちをして見せた。そんな彼の様子ににやりとあくどい笑みを浮かべながら、ニアはシエラを見——そして言った。

「そうだ。俺があんたを助けるのは俺の勝手だ——だからアンタはそこでのんびりどっしり構えて、俺に助けられるのを大人しく待ってろ」

その言葉に、シエラは僅かに口角を上げ、微笑を浮かべて、

「——了解だよ」

そう、了承の言葉を口にした。

「……ふん。物事に不確定要素は付き物だ。この程度はまだ想定の

範囲内だ」

忌々しげにニアとシエラを交互に見て、轟は僅かに眉を顰めながら言った。

「どの道、お前を殺せば私を阻む者はなくなる——《神の右に座す者》！」

『！』

轟が名を叫んだ刹那、虚空に十を超える幾つもの響律式が具現し、そこから無数の閃光が射出されて雨の如くニアを襲撃する。

体内の響素を操って極限まで強化した身体能力でも対処しきれない数の響律式に、僅かにニアの表情に緊張が走る。

剣で捌くにも限界があり、いくつかの閃光がニアの肩や太ももを貫く。

「くあっ！」

ニアの口から悲痛に満ちた呻きが漏れるが、それもほんの一瞬のこと。

「——なっ！？」

痛みで注意が逸れたほんのわずかの間に生み出されていた数多の響律式に、ニアはぎよつと目を剥いて言葉を失い——次の瞬間一斉に解き放たれた無数の閃光がニアの周辺を穿ち爆発する。

矢ぶすまの如く放たれた衝撃波を、ニアは反射的に形成した響素の障壁で凌いだ。が、

グレイアースの時と同じで、完全に防ぎ切れたわけではなく、身体の各所から血を流してその場に蹲る。

「次で——止めです」

轟が宣言すると同時に現れたのは、先ほどとは全く異なる巨大な術陣だった。そこに収束される大量の響素——喰らえば間違いない必死となるだろう術を見て、ニアは咄嗟に飛び退いて躲そうとし——全身に走る痛みのせいで動きが鈍る。

（ヤベエ——！）

回避も防御も間に合わない。脳裏で克明に自分が死ぬイメージが

出来上がり、そのおぞましさにぞつとした刹那――

「―― 鋭牙の銀狼 ！」

裂帛の気迫と共に、轟が生み出した術陣の中心を巨大な斬撃場が閃いた。ニアを襲おうとしていた巨大な響律式は、その白銀の軌跡によって両断され、まるで最初から存在しなかったように霧散する。

目の前で起きた現象に、ニアも轟も声を失って呆然と眺める最中――ニアを守るように、彼はその場に悠然と立ちふさがった。

「無事かい？ ニア」

振り返って手を差し伸べる男――グレイアースを見上げ、ニアは目を瞬かせて首を傾げる。

「お前……なんで？」

「ヘルマを助けてもらった。それが理由では駄目かい？」

ニアの問いに、最初から用意しておいたのであるう答えを口にしたグレイアースに、ニアは呆れて苦笑した。

その背に、

「ええ、助けられた本人が来ていない――などということはないのでご安心を」

兵器遺品 グングニル を薙ぎ払って新たに生じた響律式を叩き切りながら、ヘルマがそう告げた。

自分を守るように前後を固める二人を見て、ニアは複雑そうに表情を顰めながら、

「ったく……おせっかいなんだな」

「君に言われたくはないね」

グレイアースが即応した。「違いない」とニアは肩を竦めて見せる。

そんな彼らを見て、一番憤慨しているのは轟だった。予想外に増えた邪魔者に憤り、思い通りに事が進まない現状に苛立ち、彼はあ

らん限りの思いを込めて叫んだ。

「どいつもこいつも私の邪魔を——貴方たちは……貴方たちはどうして……！」

そこから先は、言葉にならない叫びが支配した。

同時に轟は際限なく縦横無尽に響律式を展開し、闇雲なまでに術式を発動させてニアたちを攻撃する。

驟雨の如き猛攻を三人で何とか凌ぎながら、このままではいずれ押し切られる。そう判断したニアは、

「オイ、蒼いの！」

「ヘルマです！ 野良犬！」

「ニアだ！ お前、俺を上まで打ち上げられるか？」

ヘルマがニアの問いの意味を理解するのに半秒も必要なかった。彼女は響律式の雨をはじき返しながら大きく頷いて見せる。

「可能です！」

「よし！ なら上から攻める！ グレイアース、援護しろ！」

「了解した！」

言葉少なに交わされた作戦は、瞬く間に決行される。

轟が《神の右に座す者》を用いて新たな響律式を生み出すほんの僅かな間隙を縫うようにして、ヘルマは グングニル の雷撃で自身の筋肉を刺激して臂力を高め、その瞬間を狙ってニアが グングニル に足を乗せると、ヘルマは「行きます！」と僅かに一言だけ口にする、一切の容赦なく思い切り グングニル 振り抜いた。振り抜かれる瞬間に合わせて、ニアは全力で跳躍する。ヘルマの打ち上げとニアの跳躍力が合わさり、ニアは《神の右に座す者》のはるか頭上に舞い上がった。

「何のつもりか知りませんが——撃ち落としてやりますよ！」

宙空へと飛び出したニアは、響律式の恰好なだった。事実、轟の展開した全響律式は、狙い違わずすべてがニアへと向かって飛来して行った。

が、それをグレイアースの 鋭牙の銀狼 が阻む。

最早面に等しいほど巨大な斬撃場が、ニアと《神の右に座す者》の間に生じ、放たれたすべての響律式が白銀の斬撃によって無力化される。

そして次の瞬間——超新星爆発にも似た巨大な閃光が弾け、轟の視界を奪った。

防御と目暗まし。二重の意味を持って放たれたグレイアースの鋭牙の銀狼の一撃。その爆撃の中をニアは緋色の風を纏って突き抜けてきた。

——魔王の残滓。

あらゆる響律式を構成する響素を喰らい、己が力へと還元する風がニアを包み、グレイアースの鋭牙の銀狼を無効化する。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！」
手にする 緋の暁 を振り上げ、ニアは一直線に《神の右に座す者》へと落下していく。

そこでようやく視界を取り戻した轟が、慌てて響律式を顕現させてニアへと叩きこむが、魔王の残滓が生み出す緋色の風がそのすべてを無力化する。

最早ニアを阻む者は何もなかった。彼は上空から《神の右に座す者》の上に着地すると、手にする 緋の暁 を思い切り振りかぶり、それを突き立てる。

「貴様あああああああああああああ！？」

轟が絶叫し、ニアへと襲いかかろうとするが、すでに遅い。

「——焼滅さすもの！」

ニアの最も得意とする炎の響律式が、緋の暁を通して《神の右に座す者》の中へと直接叩きこまれる。

——一瞬の静寂が周囲を包みこみ——

次の瞬間、室内のあちこちで炸裂音が響いた後、電力の供給が止まった状態と似たような静止音が耳朵を叩く。

すると、シエラを拘束していた無数の機械が音を立てて外れ、されるがままに身を預けていたシエラの身体が放りだされそうになり

「——よっと」

「うぎゃ」

その襟首をニアが？んで、シエラは情けない声を上げると、恨めしそうにニアを見上げて言った。

「遅いぞ、ニア君」

「悪かったな、先輩殿」

さして悪びれた様子もなく、ニアは微苦笑と共にそう答えた。

轟は目の前で機能を停止した《神の右に座す者》を見上げて、ただ呆然と立ち尽くしていた。

最早動くことのなくなった機械の塊を呆然と見上げている彼に——ニアと、その肩に荷物当然に担がれたシエラが歩み寄った。

そんな二人にゆっくりと視線を動かし、そして徐に轟は笑い声を発した。

「何だ？ 私を笑いに來たのか？」

「——違う」

「ならば——殺しにか？」

ニアの肩に担がれたシエラが、僅かに息を呑んだ。こつも簡単に殺す殺されるを口にする

轟に驚いているのか。あるいは恐怖したのかは、彼女本人にしか分からない。

あるいは——ニアがそうするのではないかという不安に駆られたのかもしれないが、結局は憶測の域を出ないままだ。

そんなシエラの反応をよそに、ニアは呆れたように溜息をついてかぶりを振った。

「違う——そんな無意味なこと、俺はする気はない」

「父を——斑目」恭一郎を殺した私を？」

「ああ。どっちみち、お前を殺しても博士は帰ってこないし、無駄に手を地に汚すのもごめんだ」

ニアのどこかさびしげな言葉に、轟は肩を震わせて笑う。

「どうしてだよ……私はお前の育ての親を——お前が博士と呼んで慕っていた男を殺したんだぞ！　なのに……なのにどうしてそんなことを言える！」

轟の言葉に、ニアはほんの僅かに顔を伏せて、ボソリと呟いた。
「博士がそう望んでたからだ……俺にも、お前にもな」

「——なっ！？」

ニアの言葉に、轟は絶句した。あの研究ばかりに明け暮れた父が、そんなことを望んでいたなど、唐突に言われたところで信じられるわけがない——轟は信じたくもなかった。

だが、次いでニアが口にした言葉に、轟は自分の中の確たるものを打ち碎かれる。

「それになあ……お前がどんだけのことをしてこようと——お前は俺の兄なんだよ。そう、博士が何度も言い聞かせてた——だから、俺はお前を殺さない。兄弟を、家族を殺す気は——ない」

ニアのその言葉に、轟は今度こそ忘我した。
兄？

自分が、こんな人形の——人間もどきの兄。

いや、それよりも今、この男は家族——兄弟——そう言ったのか？
轟の頭の中で幾つもの言葉が交錯し、混合し、飽和する。

「もう会うことはないだろうが……あばよ」

そう、一方的に言い残して、ニアはその場を後にした。グレイアースとヘルマは、先に下の方へ向って事後処理のために『騎士団』と連絡を取りに向かった——という会話が僅かに聞こえたが、そん

なことは轟にはどうでも良かった。

屈辱だった。

最低だった。

まさか、一番忌み嫌っていた存在に——父の最高傑作と謳われた人工生命に、あんな言葉を言われたことが。

なにより、それが嬉しかったという事実が、轟にとって最低最悪のことだったのだ。

毎日毎日研究に暮れる日々。そうして成し遂げた成果は、皆等しく自分が『斑目』恭一郎の息子』だから、出来て当たり前と言われ続けた。

それを甘受し、表面的に笑い、内心で疎み苦しみ続けたが故に求めていたもの。自分の感情のすべてをさらけ出せる相手だった。

思い返して見れば、それはいつだって存在していたのだ。

父がそうだった。

斑目』恭一郎だけは、本心から意見をぶつけ、衝突し、さらけ出せる相手だった。

ニアを憎んでいた理由が、やっと轟には理解出来た。

あれは憎しみなんかではなかった。

——嫉妬、だった、

自分の感情も、思いもすべてさらけ出せる父の関心を奪われた——

ただそれだけのことだったのだ。

下らない。

そんな下らないことのために——自分は父を殺めたのか。

そんな事実、叶うことならば一生気づきたくなかった。

だが、気づいてしまった。気づいてしまったのなら、もう気づかずには戻れない。

それでも、そんな自分を認めるのが嫌だった。

そんな子供のような下らない感情があるなんて事実を、認めたく

なかった。

認めたくないのならば、どうすればいいのか——少し考えて、すぐに答えに至った。

白衣の懷——そこに手を伸ばして、轟はそれを手に取った。

リボルバーの小銃。護身用にもならない、お守り代わりのように持ち歩いていた、数少ない父の遺品だった。

轟はそれを手に取り、残弾を確認。撃鉄^{ハンマー}を上げて——轟はそれ自分のこめかみに当てた。

これまで築いてきたものを捨てるために。

此処で気づいてしまったことを、なかったことにするために。

自分は、子供めいた嫉妬を抱く——斑目「恭一郎の息子なのではない。

「私は斑目」轟——《神の右に座す者》だ」

そう宣言し、轟は引き金を引いた。

痛みは——なかった。

——パンッ……

上から聞こえたその小さな音に、ニアは歩みを止め、彼に抱えられていたシエラもまた、息を呑んだ。

しばらく無言で時間が過ぎ——やがて、

「……ちっ……目覚めの悪い結末だぜ」

ニアが忌々しげに舌打ちをした。

彼が果たしてどんな表情をしていたのか——それは、彼に抱えられて真横でその表情を見ていたシエラ以外、誰一人として知る者はいなかった。

全身に走る痛みに限界を感じたニアは、シエラを地面に下ろすのと同時に力果てたようによろめいてたたらを踏みつつ、それでも最後の力で壁際まで歩み寄ると、そのまま背を預けて地面に座り込んでしまう。

「……うぁ……眠い……」

正直なところ、限界だった。

肉体にせよ精神にせよ、すでに限界の域はとうに超えていた。

此処までの連戦に次ぐ連戦、そして慣れない唯一響律式の長時間使用も相まって、緊張の糸が途切れた今、疲労やら痛みやらが全身を支配し始め、意識がまだ保てているのすら不思議なくらいの状態なのである。

だがまあ、不思議と充実感には満ちていた。

最後は少しばかり後味悪い終わりとなってしまったが、概ねニアとしてはましな結果で済んだと思える。

何せ、今回は失わずに済んだのだ。

自分にとつての、大切な者を……

だというのに――

その当の本人はというと、随分と湿っぽい雰囲気纏って、いつの間にかニアの傍に歩み寄り、しゃがみ込んでニアを見ていた。そして徐に手を伸ばし、無言でニアの身体に残る幾つもの傷を、なぞるように自分の指を走らせていた。生乾きであるため、触れればまだ血が付くだろう。実際、ニアの傷口に触れたシエラの白い指には、赤黒いニアの血が付着し、染まっていた。

痛いから触らないで欲しいという本音は口にしない。こんな状態であっても、男としての自尊心が勝るのである。

暫くの間、シエラは黙ってニアの傷口に触れていた。それは、まるでこの傷の原因は自分なのだと、己に言い聞かせているようにニアには見えた。

そして、それは案の定と言わんばかりの言葉をシエラは呟く。

「ごめんね。ボクのせいでこんなに怪我して……」

シエラが済まなそうにニアを見ながらそう言った。変化の乏しい表情にも、今だけは自責の念が窺える。

そんな彼女を見て、ニアは呆れたように大きくため息を漏らした。この少女は、何故にこうそういう捉え方しかできないのか。普段はあれだけ人を振り回して来ながら、ここぞという時に限って自分を卑下に見る傾向があるのではないかと疑いたくなる。

何のために自分がここまでの怪我をしてまでこの場所に來たのか。これではまるで道化だと、ニアは胸中で嘆息する。

自身も人のことは言えないだろうが、この少女もまた随分と鈍感だった。

言わなくてもいい気がするが、だが、何となく言っておきたい気分になり、ニアは囁くようにシエラに語りかける。

「……せい、じゃねーだろ」

「……え？」

「ボクの『せい』とか言ってんじゃねえよ……そこはボクの『為』って、自惚れとけ」

渋面で口をへの字に結びながら、ニアは「ふん……」と鼻を鳴らし——そして全身から力を抜いた。

もう、流石に限界だった。

全身にまとわりつく疲労感に抗うことができず、ニアはその言葉で最後に目を閉じ、意識の糸を手放して眠りの闇へと落ちていった。

「——え……ええ!？」

ニアの囁いた言葉の意味を理解するのに随分と時間を要し、シエラは大分間を置いてから素っ頓狂な声を上げた。シエラにしては珍しい、全身で驚きを現した悲鳴なのだが、幸か不幸か、ニアはすでに意識を手放して寝息を立てていた。

しかし、シエラの方はそうはいかなかった。

彼が眠りに落ちる寸前に口にした言葉の意味。その真意が知りた
いような知りたくないような、訊きたいような訊きたくないような
…… どうしようもない葛藤が自分の中でせめぎ合っているのをシエ
ラは実感した。

「ちょ、起きて！ 起きるんだよニア君！ こら！ うわ！ こ
の人マジで爆睡してる！ 今の言葉の意味ちゃんと説明しろー！
こらー！」

彼の言葉の真意を問うべく、シエラは必死になってニアの身体
を揺するのだが、完全に寝入った彼は挺子でも起きる気配はせず、
シエラの慌てふためいた何ともいがたい悲鳴が、延々と木霊し続け
るのだった。

エピソード

斑目「轟による、外敵殲滅機関《神の右に座す者》を用いた事件から二週間後の、第十四階層の墓地。そこに、ニアは立っていた。彼の目の前には二つの墓標。若干古い墓標と、真新しい墓標の二つを交互に見て、真新しいほうの墓標に対して皮肉気な笑みを浮かべながら、ニアは古いほうの墓標に花を添えて、言う。

「悪いな博士。できれば同じ墓に入れたかったんだが、きっと奴は嫌がるから。隣で勘弁してくれよ……」

古いほうに掘られている銘は、斑目「恭一郎。この墓は、彼の眠る墓石だった。

五年前に彼の訃報を聞いた麗愛とヴィルヘイムの手によってひっそりの建てられたその墓の隣——そこに新たに建てられた墓は、あの日《神の右に座す者》の前で自決した轟の墓だった。

人の手によって生み出された偽りの神の眼下で、彼が何を願い、何を想って自ら命を絶ったのかは分からないし、分かりたくもなかった。

だが、それでもニアはその場所に轟の墓を建てることを決めた。仲良く——とまでは言わないが、せめて隣り合って安らかに眠っていてほしい。死してなお、轟の不満げで嫌見たらしい声が聞こえてきそうで、ニアは墓の前で僅かに笑んだ。

「——珍しい所で会いますネ、ニア」

多次元的に響いた声——だが確かに背後から聞こえたヴィルヘイムの声に、ニアは僅かかに嘆息しながら立ち上がり、振り返って彼を見た。

「——年中引きこもりのお前が墓参りか？　珍しいこともあるんだな」

ニアは普段通りの不遜な態度を纏い、墓所の階段を上ってくる
ヴィルヘイムを見下ろした。

昼間であろうと炎天下であろうと嵐であろうと変わることのない全身黒衣に身を包んだ彼は、ニアの政府に「そうですネ」と同意を示した。

「私がこのような場所に訪れてハ、墓から出てきたの力、入りに来たのか分かったものじゃありませんしネ」

「……お前の冗談はホントに笑えねーよ」

うんざりしたように呟くニアに、彼は実に楽しそうに笑った。

「フフフ。たダ、偶にこうして友人の墓前に訪れてみたくなるものですヨ。私王——そして、麗愛もです」

「あのババアがねえ？」

そう言われても、あまりぴんとこなかった。中々にあの容姿の人物がこんな場所に訪れても、迷子か悪戯をしに来たかの二択に一つな気がする。

ちなみに、件の麗愛はあの事件の翌日には全開して、再び【ザブリユッド】の引きこもりへと戻った。日々あの和装の部屋にこもり、煙管を銜えて紫煙を吐き続けている。いっそ肺を病めばいいのと思っくらい最近たはこの量が増えている。

どうにかしなくてはと色々画策してはいるが、どうしてかこうあの同徐に痛恨の一撃を見舞う手段が思いつかなくて難航している。

——果たしてたばこをやめさせるのに痛い思いをする必要があるのかは不明だが、まあそれはご愛敬といったところだ。

そんなことを考えているニアの横を通り過ぎ、ヴィルヘイムは恭一郎の墓前に跪いて黙祷する。

その瞬間だけは、ニアも静かにその後ろで彼の祈りを眺めていた。死者を悼む者を嘲り、蔑み、揚げ足を取る趣味は流石にない。

「——恭一郎。彼ハ、この世界では誰もが異端と忌避する理想論者でしタ」

轟が、墓前の前にしゃがみこんだまま徐に語り出した言葉に、ニ

「アは何処となく同意せざるを得なかった。

幼い頃は、ただ彼の教える言葉だけが真実だった。だが、外の世界を知り、様々な知識と経験を重ねていく中で、恭一郎の口にしていた言葉の端々に、現実との強い差異を感じていた。

「彼の語る多く八、世界がまだTTBという狭い世界くに囚われる以前の常識を踏まえた上での言葉でしタ。故に二、このTTBしか知らない今の人間たちにとつテ、彼の言葉は何処までも幻想の領分を逸脱しなかつタ」

斑目「恭一郎は総合的に見ると——現実を直視することができなくなつた人間と言つていいだろう。なまじこのTTBという箱庭に移住する以前の——広大な大地で生きていた人類の在りし日の姿を知っているが故に、彼はその頃の世界の姿に固執し続け——今の世界の現状を否定し続けていたのだ。

「それ故二、轟との軋轢が生じることとなつたのでス」

恭一郎とは違い、轟はこのTTBが創生された後に生まれた人間だ。故に、彼には父が事あるごとに口にする——轟の持つ常識からすれば有り得ない人類の姿を提示し続け、なまじ強要する恭一郎は、いつの頃からか忌むべき存在へと変わつていったのだ。

だからこそ、ニアと轟の間にも相容れぬモノが生じた。

恭一郎の語る理想を信じたニアと、それを拒絶した轟——地はつながらないが同じ父を持った二人の子供がここまで反するように育つたのは、ある種必然でもあつた。

ニアが恭一郎の話に耳を貸したあの日から、ニアと轟は対峙する因果を負い、そしてあの事件を契機にとして、その因果は現実となつた——それだけのこと。

そう言つた意味では、今回の事件の発端には彼が——斑目「恭一郎がいたのかもしれない。

「無論、彼に悪気はなかつたんですヨ。彼はたダ、過去を捨ててまで今の世界の形を受け入れる必要はない——そう断じただけのことですヨ」

「ああ——博士はただ、帰りたかっただけなんだよな」

ヴィルヘイムの言葉に、ニアは感慨深げに呟いた。果たして、自分にとって故郷とは何処なのだろうか？ それは生まれたあの培養槽のある研究室なのだろうか。それはニアには分からなかったが、

「そう——帰りたかっただけなのですヨ。生まれ育った故郷へ」
「帰りたい——ね」

そんなものなのだろうか。帰りたい——そう思う場所があれば、それが故郷となり得るのだろうか？

なら、自分の帰るべき場所とは——そう考えて脳裏に浮かんだのは、あの麗愛がいる【ザプリユッド】や、自分みたいな目つきも態度も悪い店主の営む店に飽きずにやってくる常連たちの顔。

「……はは」

そう考えると、なるほど——納得して笑った。

「帰るべき場所ってのは——帰りを待っていてくれる人たちがいる所——なんだな」

ニアの呟きは、しかして不意に吹いた風の音に阻まれて、呟いた本人以外の耳に届くことはなかった。

「——ン？ 何か言いましたか？」

「何も言ってねーよ」

振り返って尋ねたヴィルヘイムに、ニアは肩を竦めて応じながら踵を返した。そして背を向けながら、視線だけを向けて言う。

「偶の外出なんだ。店に顔出してけよ——美味い葉が入ったんだ。飲んでけよ？」

ニアの申し出に、ヴィルヘイムは僅かに驚愕して目を見開く。が、それも一瞬のことで、彼は満面の笑みを浮かべながら頷いた。
「はい——招待に預かりましょウ」

そう答えてスキップするように歩く出すヴィルヘイムの様子に苦

笑しながら、ニアは自らの経営する喫茶店——『ハーディ』へと足を向けた。

カラン……っという、店の入り口に備え付けているベルの音が鳴り——次いで無数の破砕音と悲鳴が戻ってきたニアと、それに同伴したヴィルヘイムを出迎えた。

店に戻ってニアが最初に見た光景は、見るも無残に模様替えをした店内と、それをやってくれた犯人たちの姿だった。

「うお！ ニア君おかえり……っ、うわわ」

と、戻ってきたニアに声をかけながら、シエラが両手で抱えていた皿の山を崩して床に落ち——いっそ小気味よいリズムで皿が連続して割れていった。

「ぬぐう……なんじゃこの湯呑は！ 持ち辛い時たらありやせんわ」
そうティーカップに文句を言って、彼女はそれを適当に放り捨てる。当然ながら、陶磁器のカップは瞬時に粗大ごみへとその姿を変えた。

「申し訳ありません、グレイアース様」

「いや、いいのだよ。誰にでも得て不得手はある」

おそらく茶を給仕しようとして失敗したのだろう。床一面に広がる水たまりと、その中心で粉々に立っている元ティーポットを拾いながら、頭を下げ続けるヘルマを宥めるグレイアースがいた。

「……………なんだ……こりゃあ…………」

その言葉にするにもむごたらしい店の有様に、ニアはしばし呆然と立ち尽くして、やっとの思いでそれだけを口にした。

そんなニアに、グレイアースは砕けたティーポットの破片を拾いながら微笑で出迎える。

「やあ、お邪魔しているよ」

「やあ——じゃねえだろ！ 何だこの店の中の惨状は！ おい先輩

！俺が出かけてる間に何しやがった！」

周りの状況など気にも留めずに挨拶してくるグレイアースに食ってかかりながら、ニアは店番を頼んだシエラに問いたです。

「なんかニア君のいない間に皆来てねー。とりあえず言われた通りにお茶を出したただけだよ」

「……何をどうすりゃ、茶を出すだけで店の中がこんなにも非道状況になるんだよ……」

この間の事件以来、やたらと店に現れては「手伝う」と連呼し続けてきた彼女の態度に心を砕いて手伝わせてみた結果がこれか。

やはりやらせるのではなかった——と、早速後悔の念に駆られるニアに、カウンターの奥の席に我が物顔で座る麗愛が叫ぶ。

「店主が店をほっぽり出して何処に行っておったんじゃ！」

「そういうアンタは『ザプリユッド』の長だろうが！ あんたこそ大人しくあの部屋でふんぞり返ってるよ！」

「腹が減ったんじゃよ。お前の作った牛丼が食いたくなつたから待っていた。文句あるか！」

「大ありに決まってるんだろ！」

麗愛の厚顔無恥な我が物顔に、ニアは語気を荒げる。

「オイ野良犬。グレイアース様に早く新しい茶を出さんか」

「店の道具ぶつ壊しておいて謝る気ゼロか、お前。つーか、自分の主に掃除させてんじゃねーよ」

グレイアースがいそいそと壊したポットを片付け、濡れた床を掃除するのを横目に要求してくるヘルマに、ニアはほとほと呆れた様子でそう返した。

そんな店の中の様子に、ニアと共にやってきたヴィルヘイムはくつくつと楽しそうに笑う。

「くふフ……本当に貴方の人生は退屈しなさそうですネ、ニア」

「うつせーよ。余計な御世話だ」

笑うヴィルヘイムに、ニアは歯を剥き出しにして言葉を返した。そんな彼に、店の中の面々は矢次に言葉を投げかける。

「腹が減ったー！ さつさと牛井作らんかー！」

麗愛が腹を抑えながらテーブルに突っ伏して叫び、

「野良犬、さつさとしろ」

ヘルマが鋭い視線を投げかけながら催促し、

「ニア、この壊したポットは何処に捨てればいいんだ？」

グレイアースが、塵とりで壊れたポットの破片を集めながら尋ね、

「それではニア。貴女の本日のお勧めをお願いしますネ。ア、ケ
ーキもつけてくださいヨ」

ヴィルヘイムが席に着きながら注文し、

「おい、ニア君。新しいゴミ袋って何処にしまってるんだい」

シエラがカウンターの向こうからそう問うてくる。

次々と飛んでくるまとまりのない言葉に、ニアは煩わしげにうめき声を上げ髪を掻き上げながら叫んだ。

「うつせー！ だー！ お前ら全員何もするな！ 黙って席に座れ
！ ちょうどいい機会だ！ 全員茶の入れ方って奴を叩き込んでやる！」

そう言って、ニアはズカズカと店の中へ入っていった。

——開け放たれたままだった扉が閉まり、カラン……という店の扉に備え付けてあるベルが音を鳴らす。

普段なら、そのベルの音だけが響くだけの人気のほとんどない店の中。

しかし、この日は日が暮れ——ひいては外の景色が夜を迎えても、店の中から楽しげな喧騒が途切れることはなかった。

——怒号が飛び交い、

——騒音が響き、

——笑い声が木霊し、

——可笑しく、滑稽で、奇妙な談笑が続くその場所。

請負屋も、学生も、魔女も、騎士も、情報屋も、その立場も生き様も全く異なるような連中が、

集い、

騒ぎ、

語らう場所。

——そこが、彼の帰るべき場所なのだ。

エピソード（後書き）

一応これは此処で終わりです。もちのろんで続きが書けるようにネタはまだまだありますし、書こうと思えば書けるのですが——それはいつかのために取っておくことにします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1825y/>

TTB ——The Tower of Babel——

2011年11月4日03時23分発行